かしの京とも思て、猶めでたくも見へつゝあれば、
「いやましに思ふもの、

△大光寺のおし鳥　西寺町

張皮籠のホト〳〵に、餌をしたひよるには、龍安寺の鳥がくれにしにまさつて、年毎に數の羽音に、代のかはりし黒表も早馴染て、

△鳥屋町

公冶長をなぶりちらすも、今猶めづらしきもの多く、扨此題にして此地の卷軸となすもの、

△天滿祭りの船

抑鉾流しの神事とやらん、流れし鉾今の戎島にとまりて、御旅所となれりとや、其程の所せきて、大船の塲取は宵の日に居ならびて、もとより天神水屋は水無月の恆例となり、近松が書たる千世界の千日月も、此夜の闇を覺ざるにやあらんか、網舟の立廻り、一人乘りの拔歩行、通ひ船の自由さも、他の郷の斯成に賑はしきは、儲かる事專らなり、是又船屋料理屋ともに其意ははづれねど、費を慰し思ひは、是にまさりしやあらんとて、土地の姿猶顯はせりとも、迎ひ舟のいさましさに、卷尾の粧ひいとゞしく、

安永六年丁酉四月吉日

繁榮堂梓

富貴地座位下卷終

京都名物

水の富貴寄

發端

大名「是は此あたりの大名でござる、今日はまれな客がござる故、何がなめづらしい事にてもてなしたふござる、まづ〳〵太郎くわじやをよび出し、かれがしあんをきかふと存る、ヤイ〳〵太郎くわじや有か、太郎「ハア おまへにおりまする、大名「ねんのふ早かつた、なんじをよび出す事べつ儀でない、今日の珍きやくに、何がなめづらしい儀をお目にかけたい、其方よろしく工夫を仕て見よ、太郎「かしこまりました、アヽなんぞめづらしい儀を工夫いたし度物でござるが、オヤ夫よ、思ひ付た事がござる、頼ふだ人ござりますか、大名「ホヽ太郎くはじや、我をよぶは、なんぞめづらしい儀をばしあんいたしたか、やいはやふきかせよ、太郎「やふ〳〵しあんがうかみました、なんと都のめいぶつ評判はどふでござりませふナ、大名「是は一段とよからふ、おきやくへの御ちそふじや、はやふはじめい、太郎「かしこまりました、左樣ならば及ばずながら、私頭取役をつとめます、いづれもお客人樣方、思召をすい分仰られませ、高座は御めん下さりませ、先名物より評致しましよ、

京都名物

水の富貴寄上之卷

△總卷頭

大至極上上吉　　京の水

頭取曰「とふざい〳〵、扨此京水丈儀は京都根生のお人にて、何國の舞臺をふまず、むかしより今にいたる迄京にすんで、片時もお休みなく御出勤は、さりとは御くらうに存ます、夫故此度總卷頭におきましたが、中分はござりますまい、大ぜい「ないぞ〳〵、きつとないぞ、ひいき「藝評はどうじや、頭取「此度思ふまゝたからの石ずへに、ねおき姿にて手水鉢にさしかゝれば、人の顔をあらはし、夫より口中をきよめさゝるゝさつぱりとした仕内、よいぞ〳〵、夏の段井戸よりくみ上れば、咽のかわく事をさとり、ふく中に入てかはきをやめらるゝ所、さりとは功者な仕内、きつと受取ました、夫よりところてんや店にて、水氣を立らるゝ迄、きれいな仕内、江戸者「頭取ばかな事云ふナ、あんな事はいづくでも出きる事だ、頭取「成ほど其段は御尤でござりますれ共、京水丈の仕内は、格別いさぎよくきれいに致されますゆへ、外々とは至つたものでござります、きじき「そふじや〳〵、きれいな事においては、外にいらいてはないぞ〳〵、見功者「何をさせても大ていにて、さら〳〵ととゞこふりのない仕内、よいぞ〳〵、頭取「成程左樣でござります、どなたがどふおつしやつても、かてぬのは此人計、きつとした京の大立もの〳〵、

△名物之部

鑑上上吉　　稻荷山松茸

頭取「扨此所がおなじみの山松丈でござります、稻荷組「よかろ〳〵、ぐつとほめてもらいたいぞ、頭取「打つづいでいなりの御勤め、目出たし〳〵、此御人は何になられても、しつかりと見ごたへあつて丈夫な仕内、よいぞ〳〵、芝居好「例年こん立にならるゝ所、又格別な者じや、頭取「成ほどその段は、外の衆のならぬ事でござります、別して女中方のうけよく御仕合、きつと大立者と、かほり計でもうごかぬ〳〵、□□「ヨウこちの山松さま、

上上吉　　祇園町香煎

ぎおん町組「ヤア打ませう、しやん〳〵、三ッせいしやん

しやん、祝ふて三度、おしやしやんのしやん、頭取「扨此人はむかしより同座の名人、こまやか成仕内にて、とかく人氣を引立てるやうにせらるゝゆへ、諸見物のうけよく、お仕合〳〵、きじき「ばんなりとした所は、又あつた物ではないぞ、頭取「先は評よく御手がら御手がら、

上上吉　　圓山かき餅

丸山組「待かねた〳〵、壬生組「こちの水菜をどこにおくのじや、こゝへおき直せ、どんな事すると聞てはいぬぞ、頭取「成程御尤でござりますれ共、此丸山丈儀は、水菜丈、笋丈とちがひ、おなじみがすくなふござりますゆへ、夫ほどに思し召ませね共、せんたいきやうはだにて、さつくりとかるい仕内の中にかうばしみあつて、まづ申分のないお人ゆへ、此所にすへました、きじき「どこへ出しても、はづかしうない仕内じや、芝居好「男つきはとんと嵐吉じや、頭取「こせつかぬ所は、きつと立物々々、

上上吉　　壬生水菜

頭取「此お人は、むかしより京の歌に、水水菜と詠せられし人にて、筋道のわかれたる仕内、和らかみあつてよし、青貢丈とのろ合、きつとあたりました、きじき「霞はうまいものじや、場より「又初午の段きつとしてよいぞ、頭取「先うけよく御手がら〳〵、

上上吉　　不動堂笋

頭取「二十四孝にて、孟宗が孝行をかんじ、孝子のために我身をすてらるゝ所出來ました、見功者「切狂言の石橋に、だん〳〵ゐせうぬがるゝ所は、ちと下作見へて出來なんだぞや、頭取「いかさま所作事はちとにやいませぬ、すいぶんやわらかみの付く樣にいたされましたら、立物にならるゝは今の間〳〵、

上上吉　　淨福寺納豆

頭取「半びつの中よりの出は、黑とびにかしわのもやう、ゐせうこのみしつくりと、こうとうに見へてよし、すゞりぶたの段、梅ぼしとのせりふ、しつとりとしてよし、

上上吉　　圓山煮梅
　　鞍馬木芽漬
　　二軒茶屋うはみづ

頭取「御三人共同位故一所に評を致します、煮梅丈は東山の立物、參會の段に、夜に入ての御はたらき御

くらう、引肴の段にて、白砂糖をあたまにいたゞき、ちよくの中より出らるゝ所、すい成仕内よいぞ〳〵、○木芽丈はせんたい古風成仕内にて、あまり評判はなけれ共、庭訓の段で御名が高う成ました、○うはみづ丈は、きつうおなじみのうすいお人にて、噌がなふて氣のどく、〻ちもの出「噌がなふても、せんたいが高上でおもしろい、芝居好「二のかわりの櫻ぼんの所作は、大分よかつたぞ、頭取「是からさぞ御名が上りませう、

上上吉　賀茂酢莖

頭取「此度しのびの者と成、おけの中へ身をかくし、うかゞゐいらるゝ所へ、大石をおもしにかけられ、顔をしかめなんぎの仕内、おかしみあつてよし〳〵、

上上　堀川牛蒡

頭取「此度まいす坊主と成、八はたの御坊なりといつわり、後たくみあらわれ、すりこ木にてたゝかれての仕内、大分面白かつた、

上上　東寺芋頭

頭取「此度非人てつぽうの八、さしたる事なし、大てい大てい、

上上　袋中庵切漬

頭取「此人の仕内は、ことの外こまかにて、あぢわいよし〳〵、此外の衆は、いづれもてゞやげになるまで、かさねてかくべつのあたりのせつ、部を立て申ましよ、

卷軸　至上上吉　空也寺茶筌

頭取「扨此所がおなじみの茶せん丈でござります、打つゞいて同座のおつとめ、目出たし〳〵、當顔みせ鉢たゝきの所作事、おどり念佛おもしろい事でござりました、夫より大ふくの段のふり廻し、よし〳〵、此御人の仕内は、こまかい事に氣を付ず、只ざんぐりとした所、大ていにてよいぞ〳〵、諸見物「きつと京の立物と見ゆるぞ、頭取「先は評よく珍重々々、

△女才子之部

琴　鍵屋曾良

頭取「扨此所は若女形、御存のいつ丈でござります、横關組「こちの大將はどこにおくのじや、卷頭をのけてもらいたい、上京組「勃海はどふするのじやな、頭取「左様あろと存ました、此部には位を付させず、只琴碁書畫と申事に手よりまして、一番に直しました、見功者「鍵屋なら、慥に似た名は聞た様なれど、曾良と有からは、一德座が初ぶたいで、續て今の八百座出のそ良じやないか、頭取「是はくはしう御存、成程夫には大ぶんわけの有事ゆへ、先はか様にいたしてのせました、大ぜい「よし〳〵、頭取「祇園の茶屋に居つゞけの段、五十四段之丞と成さわぎの所、外に仕人はないきびしいお勤、見功者「六段目れんぼのあちはひ、べた付げなくよいぞ〳〵、後雲井弄齋にて、妹小弓三絲を引ずりよせ、ひざにしかるゝ迄、場より「いつの藝でも姉にならるゝ事が多ひ、頭取「どふでも妹がたく山に御座るからのしゆかうと思はれます、大ぜい「大切の布さらし、きぬたの所作事はおもしろかつたぞ、頭取「第一しつとりとしておとなしく、一座の請よく、今での立物、お休なふ頼みます〳〵、

碁　横關井尾

頭取「初段ふり袖姿にての出は、しほらしく花やかにてよし、ひいき「今での女忠信じや、頭取「多賀井先右衛門役にて、中手切せきの籠りたる城の、四ッ目門の石垣ふしんの場にて、らうせき者まつかうを切懸るをはねのけ、つゐに押へて打とる迄、わざの手早さ、場より「打合ひ事はどふもいへぬ、見事々々、頭取「たれだれも此御人と立合ては、誠に石で手詰た様に成て、ぎつちりとして閉口々々、見功者「上手の名取連が白黑に成て、晝夜三百六十日はげんでも、そばへもよせぬは、廣い都にまれ人〳〵、頭取「さりとはおてがらおてがら、

書　勃海飛手

書家連「打つゞひてさぞお勤と存、おくゆかしう存じます、頭取「十歳の時に、北野宮二竹筆勢と云ふ狂言に、繪馬堂の段の當りより、後たへず評よく、わる口「其のはちとはでは、事が口て何共、頭取「はでが則藝道のけいこになるゆへ、隨ぶんゆるす事がござります、大ぜい「何ぞ唐流なげいがみたい、見功者「近頃如菊丈瓊花丈のと追々出られても、此人のかたでしらるゝ様に思わるゝ、頭取「何もかたといふ事はなけれ共、しせんと其場がうつると云もの、とかくはもつぱら云出しまするは、此人先は口女の女形の一枚々々、

畫　眞葛原玉蘭

頭取「右百合丈より、つゞいて當地の御勤めでたしめでたし、江戸上り「祇園の畫工とは、身共らが國でも受がよいさ、頭取「成程當地でも、女形にはきつと妙手と

いふ顔の、花をおすべき白き扇を取ての所作事、四方かくやく玉の闌丈〳〵、

豪傑　新屋お清

川本組「よふ〳〵こちの關取、□□てもらひましよ、頭取「女伊達出入の川床にては、度々の當りを取られ、ひいき「いつ何をさしても手づよい仕内、受取ました、頭取「大役を引受て、一寸も跡へ引ず、つゝこんでの談合事などはきよとい事、大坂でもしたをふるはします、聞功者「其ついで、大坂歌はよふのみ込だものじや、りちぎもの「此人大坂角の芝居の替りめには、舞臺を休んで下らるゝがなせにじや、すい顔「今年は又中の芝居であろ、りちぎもの「そりや又なせに、頭取「はて扨□□にもかゝわらぬ事をねどいなさるな、いづれ當地一方の立物でござる、何ぞ又、新しいめざましい仕内を待ます〳〵、

風流　富永屋お雪

ひいき「ぐつとほめてもらいたい、頭取「手ごとゝいゝ所作といゝ、何をしられてもじんせうで、諸見物の受よく御仕合でござる、たゞさら〳〵と、こせつかずきれいな事と、何方にても十目の見る所はちがはぬ、諸木にて見立たら、松の位ともすべきか、おのほつそりとすわりとは、いかさま〳〵、

△奇妙之部

墨色　知法院

頭取「此度見堂四郎右衞門と成、鉄川落介の惡だくみ迄、見あらわさるゝ段よし、ひいき「後病氣本ぶくの爲、早□やりの所はおち付たる仕内、見功者「折々不當りな事もあつたてに、頭取「それはちと御無理かと存ます、十人が十人ながら、心々でござりますれば、すきすきらひが有て、藝を見ずに惡口計をいふ御方が、何方にも多ふござりますす物じや、ひいき「そうじや〳〵、頭取「大切檀上にての祈りの段、ひいき「どつしりとした身のかまへ、澤山に仕人はないおや玉〳〵、

風監　湖月和尙

頭取「初段聖相見と成たづね、喜三太の面體をみれば、おさな顔に覺へ有もの故、三歳の時兩親にはなれたるもの成とて、身の上の事を物語して、時節至らねば、大望のくわだてのとげざる事を、云聞さるゝまで、ひいき「新さらしな月見の段、はなれ庵にて運氣かんがへの塲などは、よいぞ〳〵、頭取「當時はつかふ、

他國へ行かず、久々お勤を賴みます〳〵、

奇瑞　大蓮寺

女中組「待かねた〳〵、早ふ評をきかして、頭取「さん段めのあわれな所へ出て、おちをとらるゝ御人は、外に有まい、後もちやの子もりのふところに入れしを、我子と知り、つゐに世に出し、母おやのぼだいをとぶらわさるゝまで、ひいき「落付たる仕内、しゆせうな事はかんしんいたした、有がたいぞ〳〵、

妙術　加川玄迪

頭取「打つゞいて段々御出精、珍重々々、見功者「なんぞ洞が嶽の來現役にでも遣ふたら、氣遣ひなしの役であろ、頭取「當時のまれ人、專ら流儀をのこし給へ、

高名　永樂屋三良平

頭取「滿水にて、諸人くるしみ難儀の所を、計り事を以て、一度に水を切おとさるゝ工夫、ひいき「水論のさばきならば、落付た物じや、

正直　一心天上軒

頭取「御夢想の靈符丸といふ藥店の亭主の段、評よくて、見功者「龜蛇劔塞のもやうを付たるゐせうにての出端、わけの有事とみへます、大ぜい「成程々々、頭取「日の間に千軒のぼりも出さうな評判の當りを取るは、此人より外にはめつたに有まい〳〵、

佳味　般若湯會々

頭取「通天の紅葉見の段、風雅成出端、市女笠をきて青竹の柱のもとに、圓座を敷ての酒もりの趣向、見功者「此まへ祇園のねり物に、新地の先ばやしの屋たいに迄用ひたるは、御手がら〳〵、頭取「第一しゆかうが向上にて、何方でも請よく、ちんてう〳〵、

△藥品之部

極上上吉

雨森丁意　雨森良叔

頭取「御兩人共元御同苗故、位もつり合、もちろん評も一所にいたし、此部の卷頭にいたしました、尤當地へむく風俗と、田舍へむく風俗と、ちと差別ほござれ共、つゞまる所は同じ事な仕内ゆへ、大ぜい「成程々々、頭取「貝内黑石衞門と成、やつこ透肌平を供につれての出端、二ッ目萬屋の店先にて、非人がしらはげの六、根太の八をかしらとして、大せい取まくを見れば、本名癰梅瘡右衞門が仕業成故、黑石衞門主從、はれ物々し、手なみの程を見よと、へしつぶしはりまはし追ち

らさるゝ迄、きみよし〳〵、見功者「いつとても和らかみが有て、どこやらにつよみの有仕内、場より「後火鉢をのけて、ふところ手にてしからるゝさばきよし、小しやくもの「せんたいすい出しな藝じや、頭取「さすが立物のかぶほど有ぞ〳〵、

上上吉　古澤肥後

頭取「近年段々評よく、めでたし〳〵、ひいき「安永五の春の大當りは御仕合、老人「どふでも古俵氏の、くわ箒二本の所作事程の事は有まい、やぶい組「はるかに鉦たいこにて、風の神を送るころにおどろき立上り、いらざるせつ生をといわるゝ迄、此方どもはきつと呑込ました、頭取「先は評よくめでたし〳〵、

上上吉　水月堂仙積散

頭取「しのびの者ともなく、まぎらわしき者出て、此方の名をかたり、其上家の傳書をうかゞふ者有と、きびしくせいせらるゝ所よし、わる口「近年門外に市をなす程な當りがないやら、諸人のうらやむ事を聞ぬ、ひいき「山井直四郎役にて、積せんさつばり拂ふてきみよからるゝ迄、見功者「大切暦をひらき見らるゝ所、こまかに氣を付てしらるゝ、頭取「別て暑氣寒氣兩度の御つとめ、御くらう〳〵、

上上吉　勸學屋大八

頭取「けたいなふ毎日の御出勤には、十年來の功はきつと見へます、ひいき「往來の人、ふら〳〵まく〳〵して、難儀の所へ出合せ、立ぐらみをたすけやらるゝ所、頭取「七段め聖靈祭の段、燒香院の住寺との二役出來ました、大坂上り「安永六の春より、めつきり評判が出ました、頭取「いまだ御存ない方々迄の評がよふて、御てがら〳〵、

上上　狼三平

頭取「此人は兩三年の内に、急に藝を上られました、わる口「何やらおかしな人じやと思ひの外、めつきり御出精じや程にの、しかし此比はちと評がうすふ成たじやないか、見功者「そんな事もあらふ、此人はとかく、顔みせの前後でなければ當りがない、頭取「せき口たん右衞門を、鐵砲にて打し音にておどろき、熊のうけ出しを生取し、引わたさるゝ迄手づよい事、わる口「荷物のやつこが聲の出ぬのに、ちとこそげてのましたい、頭取「すいぶん此上御出精あれかし〳〵、

上上　源藏かうやく

頭取「北野より四條道場の熊野權現と、寺町行願寺の觀音へ日參の所を、道行に持こんだるしゆかう、よいぞ〳〵、見功者「たが井ほね藏に出合て、是迄の身の上のなんぎを物がたりするをきゝ、きのどくに思ひ助けやらるる所、打付たる仕内、場より「なんばや竹源の樣な所作事が見たい物じや、頭取「後ほね藏立身して、伊丹全快と改、りつばの姿を見て、ともに悅ばるゝ迄よひぞ〳〵、

卷軸　大上上吉

大黑屋肥後
田中宗悅

頭取「御兩人共、さしたる當りをとらるゝといふ事もなけれども、せんたいおとなしく、はで成藝をこのまれず、しつとりとした事をしられては、老功がきつと見へる、見功者「こねまはしたおもひ事もあれど、そこにあまみの有所はどふもいへぬ、江戸上り「田中丈などは猶何もいざこざは有まい、頭取「御二人共、どうこうと云分はござりませぬ、すなほなむつくりとした事においては、いらゐてのない此部の卷軸々々、

京都名物　水の富貴寄上之卷　終

京都名物　水の富貴寄下之卷

△飲食之部

上上吉　龜屋良安

諸方より口々「龜良丈を飲食の卷頭とは呑こまぬ、此廣い都に根生の衆中も有さふな物、出直せ〳〵、頭取「成程御尤ではござれ共、先私の申事を御きゝ下さりませ、昔より仕似せ名物はおゝく御ざりますれ共、たゞ持まへ一色計、龜良丈はくわし一通り、何をさせても引受せられ、別て當時むしぐわしの仕内は、此人につづくはござりますまい、見功者「美製醍醐味山に、まづ新製手を盡し、次に御家の御寶、組子の井籠に手製を入れて、むし釜の湯氣にて温氣を考へ、程よく風味をもたせ、氷おろしの白雪も紅と變じさせ、それ〳〵の折にしつらひ、又は高蒔繪の重におさめ、尺長の水引に、心みをそへて渡さるゝ迄、頭取「先近來のまれ人、又何ぞ新製をまちます〳〵、

上上吉　津國屋此花

頭取「仁德の御代に、王仁がさゝげし難波津の歌も、梅

は諸木の兄にて、冬籠りよりかんばしき故か、殊には天神の愛樹にて、所ちがきによせ、此花と付しや、場より「いづれ此人、何のくせなく、貴家好人にあいせられ、酒ゑんの座せきを程よくにぎわし、しせんと配順よくし、人々の心を若やかし、誠に春のあしたに、梅花のかほりにくれをおしむにひとし、長生不老とやいわん、御手がら〳〵、

上上吉　尾道屋源右衛門

頭取「酒は百薬の長なりと、七賢がほめしもむべなり、一酒の製だに得がたきに、此人は數百の名酒を作りわけ、意味尤格別也、見功者「先貴人高家にもてはやされ、分量わづかにして、人をなつとくさし、さかなのあしらひなく、いづれにても大かた一人しての働、いやはやどふも〳〵、わる口「しかし一比は何とやらめいちがきたが、又二三年見直しました、どふでもかぶだけ〳〵、

上上吉　酢屋彌二平

頭取「七條死出山道の狂言に、銀ばくを以て四花をかざりて、千もり百もりのけそく、そのきれいさいふもくだ也、見功者「野蠟燭を相圖に壇をかざり、せしゆ人の心を悦ばし、法事のおわる迄、頭取「先第一野邊のかつてよく、此供物計は外にいらいてはないぞ〳〵、

上上吉　鱗形屋治兵衛

頭取「わるい事のたとへには、味噌付るといゝ、なく事のたとへには、味噌賣といへど、此人は味噌を賣てまず〳〵當りをとらるゝ段、どふも〳〵、見功者「先白みその風味よく、廣い都中に、料理茶屋又ははし〻〳〵汁屋、どじやうの相手に、此人ならでないやふに心ゑ、諸事ふるまい佛事等迄、此人のもるゝは少く、誠にうそなしのみそは此人、

上上吉　茨木屋砂越
壺屋瀧の水

頭取「此兩人一所に申ます、先兩所共東邊の座敷をよく勤められ、砂ごしの瀧の水に、しせんと口座となし、只おもしろく興をもたし、又はくせつの中を直し、ゑつゞけの二日酔には、むかひ酒ともてはやされ、何れ色席によき愛ゑんの有は、愛染尊のまもりか、顔はまつかい〳〵、

上上吉　一文字屋二右衛門

頭取「此人の藝はたゞきれいにして、絹絲のねぢたるかたちを表、つやよき仕内、白絲といふ、見功者「第一を細末よくし、病人又るす見舞に殊更うけよく、別て去ル未の年、はしかの狂言は大當り、今において申出しまする、

上上吉　大佛餅兵右衛門

頭取「古人中村吉右衛門が聲色に、大佛餅にあわふとは此人の事か、見功者「江州しの原餅の狂言に、三人を相手にかちぎ、手にて始終をあしらひ、うす取の手水をさらひ、夫より切に成て、數取りかけ目をたがわさぬしゆれん、がをおります、場より「近年もちにて、まんぢうをせらるゝ所、思入よし、頭取「例年のかけもちにて、當りをとらるゝ所、大でいにてよし〳〵、

上上吉　枡屋五郎右衛門

頭取「此人の仕内は、當世の野卑成花形をせず、只古風を用ひ、何をせられてもきれいに手ざわよく、蒔繪の重の内にうちついてよし、老人出「それ故前も今も相かはらず、いつもろくにてよし〳〵、

上上吉　洲濱屋治右衛門

頭取「扨相かわらぬ御かほ、此人はむかしより外の仕内をせず、只洲濱岩おこし二色にて、年中當りを取るゝ名人々々、芝居好「岩おこしのあら事に齒あたりよく、すはまのおやぢ方に風味をもたせ、兩方共よいぞ〳〵、

上上　松屋市郎兵衛

頭取「松市丈の仕内は、先諸祝儀はいふにおよばず、佛事法事に至る迄、いか成美製のくわし共、一座して當りをとらるゝ、見功者「せんたいおしげなく、兩みゝを廣くおとし、酢合のかげんよく覺、くわし昆布の外、わきひら見ず心がけがよいぞ〳〵、

上上　東寺麩の燒

東寺九條西岡運口々「こちの麩丈を、いかふ末においたは心ゑぬ、どふじや〳〵、頭取「成ほど御尤ではござれ共、麩丈殿仕内今少し場當り計にて、かんじんの樓敷におちませぬ、しかしもちしんこさりきらいなく、大せいを引うけて大でい成仕内よし、見功者「ふのやきの場は、くどう見せの角引まはし、小づめを二三人相手に、一眼を四方へくばり、杓の尻にて付子をやき、なべによきほどにすり付、銅のふたをおゝひ、しばらく有てあんをつゝみ、夫よりしゃう手にてのあしらひ、わる口「此段はちとむつさりか、頭取「毎月廿一日には

門前に市をなす、水月堂もあとじさり〳〵、

上上

樋口　燒餅

頭取「やきもちは何のゆかりかきくの紋と、たれやらがほつ句があつた、見功者「此人の印は、大の字と一方は本の字、兩家共いか成ゆゑんにや、ことに大の字ならば大方に有そうなもの、餘人よりいたつて小さく、今少し仕内を大ていに頼ます、頭取「しかし近頃兩家共、ふしんきれいにてよし、春は花見ゆ山、夏はすゞみの歸るさ、秋はすもふのはてに、冬はかほ見せもどりのみやげ、四季をわかたず取はづさぬ仕内、名代々々、

卷軸

至上上吉

川端道志

老人出「彭祖萬歳、末の序の口明に、昔より川ばた町に有つて、御朝をさゝげ、次に御玄猪嘉祥、其外何事によらず、御祝儀に此人のもるゝはなく、頭取「粽は家の藝にて、是又舞御らん御所初め、何事によらず御目度を引受せらるゝ段、外よりいらいてなく、見功者「牡丹もちも、此人の仕内は格別との噂、大ぜい「いや早、飲食の部の卷軸に直したもことわり、「御かぶ〳〵、

△料理之部

上上吉

二軒茶屋

連中「打ませう、しやん〳〵、も一ッせい、しやん〳〵、頭取「久々御當地御馴染のリャンコウ丈、相かわらず同座の御勤、めでたし〳〵、町連「早ふ評がきゝたい、中居「頭取さん、ちやといゝな、頭取「しばらくの間、どなたも手をたゝかずに御きゝ下されませ、さわがしうてきこへにくふござりませう、先評の儀は東西東西、扨早春には、祇園繁昌御忌戻といふ狂言にて、大入をとられ、わる口「娘役おでんは、あまりちいさうて、みごたへがないぞ、見功者「いつでも花やかで、りゝしい仕内じや、頭取「六幕目ねり物の行れつに、すだれを卷上さして見物の段、小しやくもの「すだれを卷上ての趣向は、清少納言の香爐峯の思入かしらぬ、頭取「一様の赤前だれ姿にて、兩方へわかれ、ちいさき竹やりを手毎にかまへたる女武者の出立のぎやうさん、見事見事、わる口「せわしなふ薄刄にて、かげうつ音のさはがしさ、頭取「何にもせよ、舊年の高名尤成かな、

上上吉

新南禪寺豆腐

頭取「打つゞいて評よく、先は珍重、見功者「白むくにとび色の上着、黄色なおき綿にての出端、今での花車方じや、頭取「成程かうしつおぼろよの役にて、召つかひの女供を、きり〳〵としかりまはさるゝ段、にく〳〵敷、場より「からし色した綿で、こちらはあまりむごふて、なみだがこぼれた、

上上吉

湊屋三右衛門

諸見物「なんといふてもお家の藝になると、いつでもあてらるゝ、頭取「近年は若手の衆が多く出られて、評判もうすいやうなれども、どふもおされぬ所は老かう老かう、

上上吉

三柄屋伊左衛門

京屋おるい

わる口「此二人をつり合とはいやらしい、分て評してもらいたい、頭取「御兩人共、打つゞき段々評よく御仕合、三柄丈は何角に氣を付て、こつてりとしらるゝくせにおもからず、京るい丈は、とかくきれいに向上で、すいむき成仕内、次第にうはさよく珍重々々、

上上吉

柏屋宗七

頭取「夏座敷の段にて、山の芋をうなぎにして茶わんの中へ入れば、其まゝむしの上るをかんがへる段、うまい事〳〵、見功者「又何ぞ新狂言に、雪中のたけの子を、口びやしにして出すやふな、切かわつたしゆかうを待ふす、わる口「女をきらわるゝはかたくろしい、せめて鴨立にさゝずとも、よる迄しつぽりおゐてもらいたい、頭取「さつぱりとした仕内、かげんの事は隱れない、すつと上み〳〵、

上上吉

京屋吉兵衛

頭取「めき〳〵と近年評判よく、新狂言往古猫飼養といふ藝に、初段紺色のひとへ物きて、荒なわにてくゝられての出端、後火水のせめにあふ迄、しぶとい所がなくばよかろに、ひいき「かわゆさうに、ほねなしの樣な和らかな事じやに、頭取「何方でも近年ひいきが多くなつて、お仕合せ〳〵、

上上吉

高長兵衛

頭取「名をきいてもぞつとする程、女中方などはこわがり人のおゝひ仕内、きつとかたき役にしては、おさへては有まいとのうはさ、ひいき「あら事は此人にきわまつた、うまい事じやぞ〳〵、頭取「入りとさへいへば、此人の事とがてんする程のかぶになられたは、まつたくすき身をぬいて、切り込の段の當りより、先評よくめで度〳〵、

上上　　山端平八

頭取「いつでも此人の藝はかるふてよいとの噂、見功者「とかくもつさりと、田舍風な事が得手と見へる、頭取「おぼこな所が何方でもうけよく、御仕合々々々、

上上　三國屋
　　敦賀屋

頭取「御兩人とも、相かわらず同座の御勤、目出たし目出たし、上京組「川とさへいへば、いつでも身の有事をする、都乾の立物であろがの、頭取「燒むくには、二人共かうばしき所は、しらぬ方もなき高名々々、わる日「三國山敦賀關の前だれにて雙方の立合、ちとはでなしゆかうじや、どちらへとも開扇は上られまい、頭取先はせうぶなし、頭取へ預りませう、

上上　三文字屋
　　十一屋

頭取「又つり合の御兩人、段々評よく大慶に存ます、見功者「何藝をしられても、それ〴〵に當りをとられる、場より「人のくせをとらず、持まへにて是程に評のよいは御仕合、見功者「川中へせり出しの座敷の所、大てい成道具立見事々々、頭取「景事に成ては、跡へは引ぬ御兩人々々々、

上上　三星屋喜兵衛

頭取「彌生開萬櫻花臺にて大入をとられ、夫より後すもふの段にても、とかく入を取るゝは珍らしからぬ事じや、わる日「田舍廻りはよしにしはせいで、旅役者のやうに、頭取「よぎなふかゝへにくれば、こゝらの立物顔では、かぶりもなられぬ所が御座る故、見功者「格別に好味な藝が見あたらねど、老功故かいつでも評よく、御てがら〳〵、頭取「次第評は、天眞へ上りました三星々々、

上上　鳥屋又兵衛

頭取「川納涼都萬燈の時、石垣西藏にて當りを取られ、大でい「かけ床のさわぎの所にて、三味線入たら面白からふに、殘念々々、頭取「月見の段の後二かいより川原の、かまぼこを見ておかしがらるゝ迄、見功者「はでならずこうとうならずひんよくて、何をしられてもよいぞ〳〵、

上上　坂本屋田樂

頭取「目川田州にて、盛切飯藏との出合、おし立よくてどつしりとして、見ごたへ有てよい〳〵、見功者「後二役飯藏のいもとなのはの役、しほらしくこまかう、氣を付しられる故、何方の評もよふておてがらおてがら、

卷軸　眞上上吉　　丸山端寮

頭取「吉水參會と成、かしざしきさわぎの所おもしろく、一ッは道具當り、さりとはいつでも見ざめのせぬ事じや、芝居好「三がいだての座敷の趣向は、信仰記の金閣寺の段よりよいぞ〳〵、見功者「築山の花ざかり、藤の棚の下にて、琴三みせんのさわぎの所、花やかな事じやぞ、頭取「かゝりの内にて曲まりの所作事は、おかしかつたとの噂、大ぜい「大切千疊敷の段、大でい成思入、頭取「供の大せい迎ひのちやうちん、萬燈のごとくにてらせば、相圖と見へて建仁寺のだらりをつく迄、見功者「初段よりから紙ふすまの取組、幾品も取かへぬぎかへする人は、外に澤山有まい、わる日「かんじんの持まへの料理の藝評はどうじやな、頭取「成程これは御尤、此度はさしたる仕内もござらねば、尙二のかわりの評判に委ふ申上ましよ、大ぜい「待ているぞ、待ているぞ、

△總卷軸

無類　　京羽二重

頭取「大内獻上と成、眞白幡廣のはたを立さし、西陣場に控へたる段、位高にてきつと一方の大將と見へてよし、見功者「後黑地五紋と成、かさくら將軍の御召によつて登城の段、のつしりとしてよいぞ〳〵、さじきより「此跡の狂言に、茶人本村氏の後室鹽瀨にて、幅紗の事に付てのさばきなどは、高上な仕内じや有た、わる日「此人も京水にもまれられずば、此場などは出來まい、頭取「けいせい紅裏にて、百織絹右衞門との出合うつくしうて、別て女中方の受よく、第一器やう肌なげい故、

何になられても見ざめなく、きつと大立物々々、先はこれにて評判もしゆび致しました、都はんじやう諸商賣、にぎわふ春こそ目出度けれ、

安永七年戊正月吉日　　日本眞中住人　橘井榮助

京都名物　水の富貴寄下之卷終

五十三次江戸土産序

高の師直が鹽谷をおろしていわく、井の内の鮒大海をしらず、井戸替に釣瓶に懸つて上り、川へ放せば廣大なるにきもをつぶし、橋杭にあたまを當てひりひりとは、忠臣藏の喧嘩の序開、直坊にはあらねども、むさしの國永代島の邊りに庵をむすび、色黑くして口ににくまれるといへども、庵は形に似ずきれいなればとて、おのづからよんで鳥巢亭一賀と號し、男ぶりでは鹽谷が替りはおよびもなし、伴内はみがわりぐらいに成もせうが、鹽谷の替り師坊におろさせるには、少もうごかぬ世間しらず、花のお江戸はむまれたま〻しつたといふも百ひとつ、夫でも江戸は知た顔、橋杭に當てひり〳〵しよふかしらねども、花の都や難波津へいつてみたひと久しひねがひ、ひしやくを持て拔參りも、とふに立たるはげあたま、どふかこふかと送る日の、時を得たやら天明やら、頃は卯月のすへつがた、けふ上がたへと立いづれば、日頃懇意の人々の、いざや一賀を見立んとて、おもひ〳〵の出立に、名殘おしさにそろ〳〵と、あゆめどわづか二里の道、ひつじの歩行ほどもなく、品川にこそ着にけり、送りのひと〴〵打寄て酒汲かわし、いろ〳〵とわれも〳〵といふむだに、立べきよふこそあらばこそ、伴ふ人々聲々に、先が永ひは日がたけると、いさめに是非なく立出れど、名殘おしさの海山を、詠めにまぎらす鬼の目の、泪といふは是ならん、おもひ出たり鎌倉に、三良、いせんが來て居れば、いざ立寄てとむらわんと、道を早めて行ほどに、早鈴が森おふ森と、先へ〳〵と行ほどに、いそぐ心か永の日も、戸塚は宿に着ければ、伴ふひと〴〵のこし置、今宵は爰に草まくら、あすはゆるりと立給へ、ふじ澤宿にて逢ませうと、鎌倉さして夜もすがら、旅宿にいたり音信るれば、こは珍らしやといふま〻に、三良といせんがもてはやせば、土橋の新次がうたふやら、ぶん三が舞やら語るやら、一賀も旅やら土橋やら、ゑつに入たる大さわぎ、夜もはや五更の比おひは、さはぎも次第に利に落つれど、どふで女はなきね入、ほどなく明けたと立上れば、あけたどころか四ッ時分、南無三したりと旅よそほひ、いとまごひして立出れば、

またいつまでの別れやら、所縁の色のふじ澤迄、ともに送らん出給へと、みな〳〵打つれ四方山の、噺しと詠めにほどもなく、藤澤宿に伴ひつ〻、互ひにまめで御無事でと、歸て土ばしであふ迄は、のみにも喰せぬ此からだと、勘平ならぬ鐵砲を、はなしてこそは行道の、一賀巖に腰をかけ、これより先は友もなし、假令五年が十年でも、はなし相手は一人もなし、是に附ても古郷の友、餞別と言ひ送りと云ひ、扨しん切な旁へ、何をか土産のおもひ付、永の道中いろ〳〵に、工夫をすれ共あらばこそ、はてどうがなとひじ枕、とろ〳〵ねむる枕の夢、日比念ずる寅神の、ふしぎや姿あらはし給ひ、汝土産に心をつくし、おもひわずらふ不便さに、古郷へ土産をさづけんと、の給ふ御聲ともろ共に、枕の夢は覺にけり、一賀おどろき枕の元、ふしぎととるは一ッの本、ひらいてみれば、かすかずに五十三次江戸土産、どんな事かとだん〳〵に、よめば江戸より京都まで、芝居にしたる江戸みやげと、おしいたゞき〳〵、懇意の方へ進上申す、作者にあらねばおかしひやら、詰らぬだらけは全體夢、靈夢とおもへど勞から、やくたひなしの夢じややら、夢のことならかんにんし給へ、しかり給ふな、

天あきらかに二合コバカラシイあつひぞ

作者　鳥巢亭一賀

五十三次江戸土産

△立役之部

見立江戸役者による、左のごとし、

巻頭極上上吉　武州品川

海道の隨市川や江戸の花

上上吉　駿州府中

色もかも間に合ふ宿や幸四郎

上上吉　遠州濱松

扨もよひ宿の指折る三津五郎

上上吉　三州よし田

相おふに市江の出來るよし田宿

上上吉　相州小田原

立物におとらぬ宿の門のすけ

上上吉　尾州桑名

よけれども江戸氣にむかぬ今調子

上上吉　遠州掛川

花ござの見事にみゆる今中車

上上　勢州龜山

まだよいと申されませぬ今彦三

上上　駿州原

どこ迄も實の山しな四郎十郎

上上吉　勢州四日市

塲所がらぞよく成給へ淀五ろふ

上上吉　駿州沼津

此宿はおもひの外に所廣次

近年城下になられました、燒られて普請出來ませねば、追て評判いたしませう、しかし城下になつてから、宿のひやうばんはなくなりました、さたがわるい、普請が出來たらば精を出し給へ、

上　遠州二河

上　三州岡部

上　三州藤河

上　勢州庄の

上　三州見付

上　三州池鯉鮒

上　遠州袋井

上　三州白須か

△實惡之部

上上吉　相州箱根

雙六の仲藏でさへきみわるし

上上吉　尾州宮

あくていの中の笑ひや山十郎

上上吉　遠州荒井

御ぎんみのしよふは扨も廣右衛門

上上吉　武州戸塚

立惡に惡を手つだい助五郎

上上　三州舞坂

實惡のなかではいつもすみ右衛門

上上　駿州まり子

此川へ落たら海迄もいく藏

上上　駿州沖津

見渡せばよくみへる三甫藏

上　駿州蒲原

上　江州石部

上　相州平塚

上　駿州藤枝

上上吉　駿州島田

實惡に相違のないと云半五郎

△敵役之部

上上吉　勢州坂の下

いらひどくなかせる坂の三ほ右衛門

上上吉　駿州由井

旅人をせつながらせる勘左衛門

上上　駿州よし原

上上　武州程ヶ谷

上　遠州日坂

上　勢州石藥師

上　勢州水口

△色惡之部

上上吉　武州かな川

江戸を出て此宿をこそ松助

△若女形之部

上上吉　三州岡崎

よひ〳〵とさたはみなきく今瀨川

上上吉　相州藤澤

ごぞんじの若女がた崎のすけ

上上吉　相州大磯

むかしよりけいせいの名はりこふ

上上吉　遠州金谷

名所あり古跡の中の半四郎

上上吉　豆州三島

常世りもぶたひの姿きれい也

上上　駿州江尻

かつこうのほどはみのない乙女

上上　武州川崎

買ものは月六さいのたれも此松

上　尾州鳴見

上　勢州土山

上　勢州關　上　三州赤坂
上　三州御油　上　江州草津
總巻軸
大上上吉　江州大津

見事な七化は大津ゑの座元

五十三次江戸土産

極上上吉　武州品川

此度東海道五十三次品川宿の、大分にぎやかにて、左右に女郎をならべ、關札を持てのせり出し、巻頭にはうごきますまひ、白書に七よふ九よふいろ〳〵の星あらはれるをみて、天もんを考へ、終には星の位をさとり、臺の物にあかがね箔あるをみて、誠にきのじやといわれず、我ながら北國におとりしとくやみ、次に觀音堂におゐて旅人のわかれをおしませ、大じかけにてせうじひらけば、安房かづさみゆる迄、よふござります、上がた「よふても直がたかひじや、頭取「やすくは御座りませね共、海道一外にはござりませぬ、江戸「そふだ〳〵どこにあるものだ、上がたのべらぼうめは、海といふものはみた事はあるまひ、頭取「二番目さめづ氣色之助生のりにてすゞが森の塲、此ところにおいてけいざいをなし、かばねをあらはしみせるは、諸人のこらしめといわるゝ所、おふ立物とみへます、上がた「ゑろふ夏むきはくさいじや、江戸「はなつたらしめ、京や大坂のよふにはつつけやごくもんを、ほふぼふでしやあせねへ、みんなこゝですらあ、こじきめ、頭取「さよふでござります、何でもいたされます、次に八幡の社に來り、麥藁細工郎に出合、ちからだめしに大石をあげしに、石の下より和中さんの能書出るを取、梅の木是齋に渡しわかるゝ迄、よふござります、

上上吉　駿州府中

此度五十三次に、駕籠細工賣ますとなり、蘭の石臺を持ての出羽よふござります、寶物阿部ちや盆石、白須干のせりふ、宿の内がながふござれど、舞臺がにぎやかで、たひくつがござりませぬ、次に初なすを砂むらへうばはれ、せんぎのため男達五もん取餅右衞門と名をあらため、二丁町へ入こみ、御免の塲所平とのの出合、よふ御座ります、一體此人は何もかも相應に出來ます、花もかもある立物、上戸「おいらは酒がなるせひか、道中ぢうにこんな高ひものはなひ、いせ參り「わしは酒も呑ませぬが、一盆が五もんかとおもつて喰ましたら、一ッが五もんづゝ、きもがつぶれます、下戸「のろまめ、喰らつて仕廻たとおもつて、すきな事をいふ、さとふの高いをしらねいか、しろざとふ遣ふ餅が道中にどこにある、全體餅のしなしが違ふは、いせ參「どうりでこなれがわるふござります、頭取「夫では餅ひやうばん計になります、大詰富士せんげんの神靈をごろふじませ、よふござります、

上上吉　遠州濱松

此度五十三次に、でつち濱松廣ひよふでせまひ、ゞゝ譯をしろと難だひを言ひかけられ難儀の塲へ、こんの足袋右衞門にて車を持ていで、詰ひらき樓に車が二丁立ぬと言譯し、はま松がなんぎをすくひ、次に藤戸大三郎にてりよがいせし馬士を手にかけ、追手かかる故、大信寺へ來り、おもわずかたき權左衞門に逢、せふぶせんとせしに、權左衞門にげ行しをむねんにおもひ、病氣につき死なるゝところ、みな泪をながします、みな〳〵「頭取ソリヤ白川の敵打の噺しだ、頭取「左樣でござります、敵打も爰での事、ほかの宿の噺しでは御座りませぬ、江戸「頭取こんの足袋右衞門はわるひぞ、頭取「どふでおゑどのよふではござりませぬ、そこはたびだとおぼしめしませ、宿はよふござります、

上上吉　　三州よし田

此度五十三次に、吉田の下部鎌助にて、軒をならべてのひやうし、きいたもので御座ります、二かひからまねかれ、爰にはまねくものはないと、ふしんにおもひかんがい、扨は海道辨當飯盛のわざとさとり、次にむほん人ほくち火打の助よく火出とたゝかひ、鎌を持て打てかゝるに、火のいづるにへいこうし、わすれ草をのみ言葉をちかひ、互ひに行すへたのしまんといわるゝ迄よし、

上上吉　　相州小田原

頭取なぜ爰へ桑名殿を出さぬ、出し直せ〳〵、頭取「御尤でござります、いかさまおなじくらいのかたでござれども、此人はお江戸のかた〳〵がよく御ぞんじ故、先へ出しました、此度五十三次にうゐらふ賣とらや藤右衛門となり、旅人を相手にくすりをあきなひ、江戸にて初がつをゝまつとき〻、一番にとつてだし、上がた「頭取鰹とはなんの事だ、頭取「鰹といふはな、鰹ぶしのはねのあるのだ、どふで京のこじきめらが喰いゐらるものじやァない、頭、取京のさるめにかまわずとき〻たい、頭取「江戸のかたをよろこばせ、後につをしんまぐろにみかへられ、うらみにおもひ、悪念にて諸人をよわせくるしませるを、取てたゝき桶に入、まことは山前の馬次と名のり、大せいを相手に人馬のかけひきをせらるゝ所、よふござります、

上上吉　　勢州桑名

此度五十三次に、やつこ打物あき内にて、江戸「いまいましい、にやけたものだ、上がた「おどれらがしつた事じやない、ほんのことじや、舟の内からこの人をまつて、めしくいますわひの、江戸「さるめ、汁も平もはまぐりだ、頭取「是はまたけんくわをなされます、二番目蛤ひめ松葉いぶしの塲へいで、なんぎをすくひ、七里の渡しはあやうしと、佐屋へおとさるゝ所、よふございます、

上上吉　　遠州掛川

五十三次に、花ござ織之助にて、いろ〳〵見事の出立、きれい〳〵、次に宿をはなれ、秋葉鳥居之助にて、近きにたてんとの仕打、よふございます、ひいきの人が多いから、よく出來ませう、城下の名があればせいを出し給へ、

上上　　勢州龜山

五十三次に、古跡之助さして仕打なし、龜山のかたき討をおもひ出します、

上上　　駿州原

三里餘右衛門にて、千本松ばらより、朝ぎり晴ざるにたいくつし、晴るにしたがひ、ふじのけしきをみて、あら心ちよやといわるゝまでよし、たび人「永ひ計で味みもなんにもない、まだふじの道具立があるからさ、ふじの道具立がないとあきはてる、そして頭取、ふじに三里餘右衛門とは、足のきうてんをみるよふだ、頭取「またわる口をおつしやります、此人の藝はほんのじつ事計、もちつと宿がよければ、上上吉はうごかぬ人、田毎へうつる富士は、どふも申されませぬ、

上上　　勢州四日市

五十三次に、宗祇太郎古塚にて、伊せ參りを追わけらるゝ迄、よし〳〵、その外は口へ出しました、

△實惡之部

上上吉　　相州箱根

此人よりなぜ大井川を出さぬ、とかく頭取は江戸びいき故、江戸の方をさきへ出したがる、ひやうばんにひいきしてはおもしろくないぞ、頭取「ひいきをなんぼいたしたふござりましても、平つか殿のよふな人は、どふもよく言いよふがござりませぬ、此度五十三次に、難所の八郎にて旅人の足をいため、山路きて何やらゆかしすみれ草といふほつく、石にあるをみて、手ぬるひからあごたをたゝくと、かしのき、さいかち、さるすべりの責道具を持てなやませ、てうしの口へ藥をぬり、女をだまし、女ころばしと名づけ、頭取「藝者ではござりませぬぞ、次に箱根八里は歌でもこすといふをきゝ、大井川におとりしとむねんにおもひ、悪心增長し、風穴より風を出し、魔じゆつをおこなひ、ゑん天に人をなやませ、ふゞきに人をころし、じねんぢよの田樂法師に出合、青むきのあま酒をくらへ、三せうをゝくへといわるゝところ、手強うござります、三立目さいの河原地藏のやく、さして仕打はなけれども見物に無常をおこさせ、二番めあだかの關にて、富樫の左衛門の役、山ぶしを見とがめ、よしつねしう〳〵七人を見のがし、暮六ツのかねを相圖に、幕をおろし入らるゝ迄、よひぞ〳〵、たび人「しかしむかふ坂は、あくど過ぎます、頭取「草臥たあしでは、だれもそふ存ますが、そこが此人の持まい、夫よりけ

いせひ三島に逢迄、さして味い事もございませぬが、さら〳〵といたした事でございます、

上上吉　尾州　宮

五十三次に、あつたの宮旅人のつかれをあわれみ、七里の渡しをこしらひ給ふを、木曾川流のすへ落口にて、あつたの宮の七百十石の朱印をうばひ、風をおこし旅人をとゞめくるしませるを、あつたのみやのかしづき源太夫にとゞめられ、出家になれといわれ、笠寺へ追立られる所、よふございます、次に熱田の御師御初尾ゞ太夫にて、御祓と柚べしを持出し、附賣をせらるゝ所おかし、二番目娘しつとの心故、蛇となりしをかなしみ、心よく持てといわるゝ所、よふございます、

上上吉　遠州　荒井

此度五十三次に、まい坂坊にて今切の四郎と云合、つなみの工みあらはれ、三りの間砂をしき、上べは和らかにみせ、旅人をあとへ〳〵ともどらせ草臥させる仕打、よふございます、

上上吉　武州　戸塚

五十三次に、おふかた泊なれども、やつこ此宿いか内と成、旅人をむたひにとらえ、出女を以てはぎ取、江の島かまくらへ行人を取にがし、無念がらるゝ所よし、どふぞ大ぎん玉のよふな評判を取給へ、

上上　駿州　まり子

五十三次に、府中立の色も香もある仕打のあとへ、阿部川太郎にて旅人をこまらせ、喰れもせぬ團子を買せ、うつのやの四郎を上げたりおろしたりする仕打、よふございます、

上　江州　石部

五十三次に、梅の木是齋がぼうこんにて、三人に形ちをあらはし、旅人をまよはせらるゝ仕打、よふございます、どれがどふかとおもひさす、

上　駿州　沖津

此度五十三次に、かうやく賣にていで、沖津川の悪逆、さして仕打なし、清見寺の梅の木計氣色もよいとは申もの〻、此邊は高ひところは、みんなこふでございますれば、評におよびませぬ、

上上吉　駿州　島田

五十三次に、川越しはだかの助にて、旅籠やの娘に戀をしかけ、髪を島田にいふあねさんに戀かなやとい

ふ古歌をぎんじ、なます盛とて赤がいをぬすみ、四方の山々雪どけを引請、水笠之助増ると心を合、旅人をいたぶらるゝ仕打、よふございます、悪逆次第につのり、十日も廿日も旅人をとゞめ、鎌倉の諸大名をはじめ、大勢になんぎをかけ、終には日よりの助續くとたゝかひ、まけいくさとなり、たのみたる水笠増右衛門も落矢瀬を出し、是迄なり、いろ〳〵の悪逆をなせしも、一つは何卒宿の内を助けんとの心也と本心をあかし、又時節をまつて雨をこひ、はたをあげんといわるゝ迄、よし〳〵、

△色悪之部

上上吉　武州　かな川

此度五十三次に、かな川臺五郎にて、品川宿の太分におとらじとむほんをおこし、廻國の六部能宿坊とあらため、色を以諸人に黒藥をのませ、浦しま太郎にとがめられ、本名を名のらるゝ迄よし、江戸「わざ〳〵此人を見に行ます、あいなめをつらせるは、きつひものでございます、わる口「しかし、臺の茶やは何もかも砂があつて喰れませぬ、頭取「さ様でございます、是は今少し氣をつけ給へ、近年のきゝ物、だん〳〵よく成ませう、

△敵役之部

上上吉　勢州　坂の下

五十三次に、鈴かの大臣にて權現堂にて難所の場、旅人にむねをつかせ、三度まで馬より引おろし、清水を以て足をくさらし、のぞかるゝ所、すごふございます、坂の上の田村丸奉納の白羽の矢文のしばらく、うけよし、次に盗人かけ淵あぶ内にて、座頭をころし金をうばひ、田村將軍にころされ、誠は長門殿の鬼丸と名のり、おんりよふにてちやうちんをけし、坂の内をくらやみにするところ、おそろしうございます、

上上吉　駿州　由井

五十三次に、由井小雨郎すべると成、旅人をこまらせ悪逆をたくむを、女房とうげいけんするをうるさくおもひ、さつたと言ひ、女房さつたうへからは、親しらず子しらずといわるゝ所、手強ふてよふございます、

上上吉　駿州　よし原

五十三次に、名物四郎酒賣となり、岩淵そばの入道と云あわせ、富士川にて水を關とめ、船を渡す事矢のご

とく、雨のふるを待てなんぎさせんと工まるゝ所、こわふござる、

上上

遠州日坂

五十三次に、わらび餅平にて坂のたくみ、さして仕打なし、精を出し給へ、

上上

武州程ヶ谷

五十三次に、似せちよくし馬小便いかす卿にて、さして仕打なし、

△若女形之部

上上吉

三州岡崎

五十三次に、けいせひ八橋にて、矢作の長者が屋敷にて源氏にゆかりの者とみられ、よし經上るり姫の繪姿を持てありかをとはれ、いわざる故、三味せんにてせめられなんぎの所、どふも〳〵、江戸「かな川殿が色あくにならずば、女形はあの人だろふに、頭取「御尤ではござりますが、かな川殿は是ほどにいろ〳〵の名所がござりませぬ、二番目在原の業平と八橋にての所作事、上がた「歌でもよまにやならぬ所じやわいの、江戸「おきやあがれ、八ッの事はおいて、一ッもねへなり平の塚も、へのよふだ、頭取「夫が古せきでござります、杜若をごろうじませ、どこでも花びらが三ッで御座りますが、爰計は花のさかりに四ッづゝ出來ます、上がた「そふじやわいの、形見のはなじや、江戸「きがちがつたやうだ、形見の花といへば、なり平でも植たか、醫師の女房が植たのだ、植たのがよけりやァ、深川の八まんへ植た櫻をみやあがれ、中の町ではまいとし植るは、小便を汁のみにして喰ふから、ばかばつかりぬかすは、頭取「わる口は御むよふになされませ、ひくも引ぬも岡崎女郎衆と、子ども衆もごぞんじの女がた、上上吉はうごきませぬ、むらさきのゑんもあれば、お江戸のかたも御ひいきを被ㇾ成ませ、ほうびもかきつばたでござります、

上上吉

相州藤澤

此度五十三次に、十人の殿原小ぐり殿を相手に、一文の錢を以七いろ買るゝ所よし、見物「一文で七色買たは安ひものだが、百でみせるは高いものだ、百だしたら七百よこせばいひ、頭取「假令御うけなさればとて、どこのどばでもそんな事は御座りませぬ、小栗殿とも十一人死で、小栗殿一人りいきたよふなものでございます、江戸「四文錢ならおいらも四色は買う、一文で七文の錢じやァなかつたか、頭取「盗んだのかしれませぬ、けいせい遊行きれいでござります、きやん「これきねェ、おいらがの山へ行じぶんは、はつつけどもが直があがります、とんだやつらよ、頭取「きついはそこでござります、おまひがたがおふきな島のゆかたをきていても、こゝでとられます、うまひ女形でござります、

上上吉

相州大磯

五十三次に、おふいそのとらにて梅澤の小五郎兵衛に逢なんごの場、よふござります、次におふぜひの子どもにとんぼ返りをさせ、錢をもらい、見物「いやしい仕打でござる、屋敷「いやさ是もさつしますに、祐成がひんくをすくふ心でがなござりませう、わる口「どうりでとらが石もまけてあるときいた、頭取「また始りました、二番目しぎ立澤にて、西行の杖といふふしのない竹をみせらるゝ所、高ふはござれども古跡々々、

上上吉

遠州金谷

五十三次に、あめの餅右衛門が娘よなきにて、山ぶし川越へ安心にれんぼし、ひた〳〵するを、安心めいわくにおもひ、中山寺ににげ行、住僧をたのみ、つきがねの内へかくれしを、むけんにおもひ追かけ來りしが、遊行上人に出合、六字の名號をかゝれ、よなき石となる迄、よふござります、前かたせられしはらみ女は、今に評判がござります、

上上吉

豆州三しま

五十三次に、けいせい三しまにて、富士のしら雪をあさ日にとかし花粧の水となし、和らか成仕打、次に明神の池に片目の鮒ある事を問われ、由來をかたりし内、千貫とび助にわさびを取られ追かけ行、終にそばを討て所の名物といわるゝ迄よし、

上上

駿州江尻

五十三次に、清水之助が妻いほ原にて、全體かつこふはよけれども、仕うちのない人、おしい事でござる、

上上

武州川崎

五十三次に、品川宿の大分が女房ならちや御膳にて、弟かな川臺五郎がむほん故、夫婦の中を六郷川を以てへだてられ、一ッの功を立、夫婦にならんといわるる迄よし、いつも櫻月大師の榮へのよふな仕打がみたい、

上上

三州御油

上上　三州赤坂

御兩人御一所に申ましよ、御ふたり共けいせひにて、せひ旅人にあおふといわるゝ所よし、評判のある人だ、せいを出し給へ、

上　尾州鳴見
　　勢州關
　　勢州土山

五十三次に、鳴見殿は花やか成出立、關殿いたづら娘、親もゆるさぬつまを持るゝ仕打、土山殿はしうたん、いづれもよろし、

上　江州草津
總卷軸　大上上吉　江州大津

五十三次に、ばせを村の百姓翁助にて、石山寺に來り、むらさき式部にれんぼせしを、大將よし仲のみゝにいり、よし仲とせなか合ときゝ、ぶる〳〵せられ、今井の四郎かね平に殺され、式部に粟津に死ぬるをむねんにおもひ、我一念三井寺へいかふと間違、見物「なんの事だ、ろくでもない宿だ、頭取「左樣でござれども、此人のよふに見所の多ひ人はござりませぬ、二番目上る理にて、近江八景ふらちの姿繪、土佐のまた平を相手に鬼の念佛、藤の花の女いろ〳〵の所作、近年は江戸でも御かきなさるかたも多いが、此よふにぶきよふにはどふも出來ませぬ、誠に名物々々、

五十三次江戸土産終

寶貨雋序

東西々々、すでに唐土吾朝の寶貨、たゝ新古は論じませす、多少とその錢の位の處を申上ます、宜鋪品にも、人の望と望ざるとが御ざりますれば、一寸と御覽なされましては、贔負びゐきのよふには御座りますれど、眞に高上の所を申上ます、猶又御鑒定の御方樣、よろしく御評判の程奉ㇾ願ます、文章はかんこに仕まして、早〳〵らちを明ますゆへ、萬事まはりとゞきませぬがちに御座りませうが、其段宜鋪御覽の程を奉ㇾ希ます、先序文の口上、左樣に思召下されませう、

寛政二戊のとしはつ秋　風來人述

古錢總評位附

△平錢折二之部

大極上上吉　北宋　聖宋通寶當伍
上上吉　劉豫　阜昌元寶
上上吉　遼　應曆通寶
上上吉　同　天贊通寶
上上吉　同　統和元寶
上上吉　西夏　乾祐元寶
上上吉　南宋　建炎元寶
上上吉　北宋　靖康元寶折二
上上吉　大元　大德通寶
上上吉　同　元貞通寶
上上吉　同　至治通寶
上上吉　不知品　天啓通寶
上上吉　大濟　天命通寶
上上吉　北宋　靖康通寶
上上吉　張獻忠　大順通寶
上上吉　唐　大曆元寶

上上吉 南漢 乾亨通寶
上上吉 遼 重熙通寶
上上十 五代晉 天福元寶
上上十 南宋 淳祐元寶
上上十 閩王 永昌通寶
上上十 安南 光紹通寶
上上十 後蜀 廣政通寶
上上十 南宗 隆興元寶折二 小明王 龍鳳通寶折二
元 至元通寶折二 金 泰和通寶
上上十 唐 乾封泉寶 順 興朝通寶工
上上十 元 至元通寶 不知品 天定通寶折二
上上 北宋 重和通寶 同 宣和元寶
上上 北宋 崇寧重寶折二 大明 大明通寶
西夏 皇建元寶
上上 安南 明德通寶 同 廣和通寶
明 隆慶通寶 同 隆武通寶
北宋 慶曆通寶 安南 端慶通寶
同 大寶通寶 小明王 龍鳳通寶
西夏 光定通寶
上上 遼 天慶元寶 南宋 乾道元寶

上上 安南 天興通寶 南漢 乾亨重寶
遼 大康通寶 同 大康元寶
高麗 三韓通寶 遼 壽昌元寶
同 天慶通寶 高麗 三韓重寶
安南 大正通寶 南唐 大唐通寶
不知品 永壽通寶 遼 乾統元寶
同 清寧通寶 同 大安元寶
高麗 海東重寶
上 天福鎮寶 上 景興通寶 上 咸應通寶
上 熙寧重寶 上 天祐通寶 上 淳熙篆書
上 紹聖通寶 上 紹興通寶 上 崇寧通寶
上 弘光通寶 上 至正通寶 上 咸康元寶
上 泰昌通寶 上 永曆通寶 上 通正元寶
上 天漢元寶 上 大義通寶 上 光天元寶
上 元景通寶 上 天盛元寶 上 昭武通寶
上 裕民通寶

△雜錢之部

一 開慶通寶 一 崇禎通寶 一 大宗通寶
一 順天元寶 一 萬曆通寶 一 光順通寶
一 唐國通寶 一 天啓通寶 一 嘉靖通寶

一 延寧通寶 一 利用通寶 一 紹平通寶
一 洪化通寶 一 大和通寶 一 常平通寶
一 端平元寶 一 乾德元寶 一 大中通寶

△大錢之部

上上吉 唐 乾元重寶五十當
上上吉 小明王 龍鳳通寶三當
上上吉 南宋 淳祐通寶當百
上上吉 張士成 天佑通寶三當五當
上上吉 不知品 天定通寶三當
上上吉 張獻忠 興朝通寶五厘
上上十 南宋 嘉熙通寶三當
上上十 同 紹興通寶三當
上上十 元 至正通寶十當
上上十 張獻忠 興朝通寶十當
上上十 北宋 大觀通寶十當
上上十 明 大中通寶十當
上上 同 洪武通寶十當
上上 同 天啓通寶十當
上上 金 泰和重寶十當
上上 南宋 嘉泰通寶十當
上上 同 慶元通寶三當
上 同 淳祐通寶三當
上 北宋 崇寧重寶三當

△古文錢之部

眞上上吉 八銖 秦半兩錢
上上吉 六朝 後周布泉
上上吉 同 五行大布
上上吉 蜀 傳形五銖
上上 魏 永安五銖
上上吉 梁 內郭五銖
上上十 陳 大貨六銖
上上十 漢 四道五銖
上上 齊 常平五銖
上上 新 大泉五十
上上 前漢 漢半兩錢
上上 同 漢五銖錢

貨泉 上 小五銖

△日本錢之部

上 乾元大寶 上 承和昌寶 上 長年大寶
上 饒益神寶 上 貞觀永寶 上 寬平大寶

上　延喜通寶　上　富壽神寶　上　萬年通寶
上　和同開珍　上　神功開寶　上　隆平永寶

△總卷軸

大上上吉　明　崇禎通寶五當

△別位之部

不レ及レ評　漢　三銖
同　新　貨布

寶貨篇　諸錢總評

△平錢折二之部

大極上上吉　北宋　聖宋通寶當伍

頭取「此聖宋當伍と申は、宋史にもきつと出てをります、まづ文字の書かた、製作のよふす、誠に大錢のところも手跡に見へます、折二程の大きさでも、文字にかくべつ大錢の心もちあるところ、申分もなき當伍大錢、うへもなき位、卷頭に出しまして皆様おつしやりぶんは御座りますまい、皆々「いや〳〵、これ〳〵、乾元の重輪は、なぜ卷頭に出さぬのだ、頭取「なるほど是は御尤でござります、乾元大錢は時代もふるく、千年の世を經ました大錢は外にはござりませぬ、是を卷頭と存付ましたれど、乾元はむかし多く鑄ました物ゆへ、たゞ今珍品でも、外から風と澤山でます事も御ざりませうが、此聖宋は、むかし少く鑄ましたものゆへ、ほつても多く出ると申事はござりますまい、ひいき「そうさ〳〵、長年大寶も獻山で掘出してから、だいぶ安〳〵なつたよ、頭取「さよふでござります、此乾元は、百姓の私に鑄ましたのがをふくあると申ますれば、又多く成るまい物でも御ざりませぬ、功者「なる程能所にきがついた、

上上吉　劉豫　阜昌元寶

わる口「これ〳〵、阜昌は僞品だが、だいぶたかにかりをしたな、頭取「成る程御尤で御ざりますが、是もわづかのあいだ鑄ましたもので、そのうへ阜昌の文字製作も、格別におもしろきところが御ざります、うらの平地など、よく大觀宣和の大形に似ましてよし、外に二品とはなきものゆへ、爰へ出しましたもむりは御ざりますまい、ひいき「そうとも〳〵、金史にもきつと出ている、卷頭にしてもよさそふなものだ、

上上吉　唐　乾元重寶當五十

頭取「扨々、先程から乾元の御さいそくで、大きに取込ました、此乾元はまづ大錢と申、耳などもたつぷりといたしまして、時代だけ古びと申、文字と申、また格別なものでござります、うらの重輪も見へます所がしをらしく、誠に大錢の親玉でござります、ひいき「乾元も卷頭でなくば、卷軸とおもつたに、なぜ阜昌の次へ出したのだ、頭取「なる程さよふではござりますが、順天の大錢が出ましたら、乾元の上に置すばなりますまい、夫故爰でも早ひかと存ます、皆々「大ぶ乾元を安くするの、ひいき「そうさ〳〵、角力の時は東の大關ではなかつたか、頭取「成程さよふなれど、ちどわけがございます、珍品は、素人は存せぬものがおふく御ざりますれども、此乾元は、雜錢にもある銘文ゆへ、よく人が存じておりますから、大關にもいたしましたれど、爰は甚だ高上のところで御ざります、功者「そうとも〳〵、大錢は素人目によく見へるものだよ、ひいき「素人めによく見へて珍品だから、なをよいではないか、わる口「こいつは賣ものにするきだの、頭取「ますますしばらく御待なされませ、賣ものに致ます氣なれば、淳祐の當百を卷頭に致ますが、是は多少と錢の位で御ざります、功者「そうさ〳〵、しかし西清古鑑にも、此大錢は見ぬと見へて、似せものをうつしたをみては、卷頭とゆふもむりはない、

上上吉　小明王　龍鳳通寶三當

皆々「是々、これはあるものかないものか始て見た、頭取「なる程御尤でござります、是は一品外見ました事もござりませぬから、今少し位を上ましてもよふご

ざります、第一銅あじと申、製作と申、小錢折二よりも又一段見事、裏表とも餘程おもしろい所が御ざります、きつと黒吉とも存知付ましたが、此三當には、まへから正錢うつしの、ふるいにせものが多く見へます、夫をかんがへますれば、むかしはあつたものと存ますゆへ、かよふにまづ致て置ましたが、外に二つない所が御てがら〳〵、ほうびはふじ〳〵、

上上吉　遼　應曆通寶

頭取「此應曆は、泉志にも重寶と御ざれども、見ました所が、遼には重寶と申はなく、通寶ばかりあるを見ましては、應曆も通寶ばかりと存ます、左樣の存知付も、此通寶が出られましてわかります、古びと申、文字と申、なにからなにまで申ぶんはなし、子どもが見ましても安心なもの、たゞ下のかけましたばかりが殘念々々、位は少しさがりましても、今一品むきづを見たいもの〳〵、

上上吉　遼　天贊通寶
　　同　統和元寶

頭取「此二品、誠にどちらとも申されませぬ、ごかくの品で御ざります、天贊は文字たつぷりと致まして、裏の爪形などおもしろし、通字寶字、外の錢とはかわり、中華の人の手跡でない、北狄の人の手跡と、きつと見へる所、安心なもの〳〵、わる口「天贊は手跡がよくないよ、頭取「そのわるい所が遼錢の正銘、是が中華の人の手跡でごろうじませ、おもしろくもなんともなく、不安心の第一々々、その所が地理と時代とが、目利に入とこころで御座ります、功者「そうさ〳〵、遼の錢に爪形のあるものはないが、此天贊ばかりにある所がおもしろい、五代のころは、中華の錢が皆爪形があるゆへ、遼でも爪形を付た物だ、こゝらがきつと見どころだ、頭取「さよふさ、錢體申ぶんのないものゆへ、此上もなき大安心々々々、扨又統和も、天贊同樣の錢體、遼史に銘文が出ましただけ、おもしろいところが御座りますが、どちらをどふともふされませぬゆへ、同許にいたしました、

上上吉　南宋　淳祐通寶　當百

頭取「大錢も多きその中に、當百の大錢とは、順天此方の製作、めづらしい事〳〵、ことになにからなにまでゆきとゞき、たつぷりとした錢で、申ぶんもないものないもの〳〵、わる口「これ〳〵、宋史にも淳祐の當百はなかつたが、近頃少しよくなつた、頭取「なる程此大錢は宋史にもものれます、手跡もちとおとりました、宋史にもれましたも、官よりのお世話がくわしくなかつたと見へました、夫故手跡もおとりましたから、むかしはちとむづかしう御ざりましたゆへ、申ぶんも御ざりませぬ、わる口「なんだか厭勝品のよふな銅色、裏の平地などもおもしろくないものだ、頭取「成程、いまだ能古ひのを見ませぬ故、御尤でござります、追々種錢とも申よふなのが出ましたら、其時くわしく評しませう、わる口「なんだ種錢だ、夫はかぼちやの種錢か、さくらんぼうのたねか、頭取「是はさりとは、わる口が御上りなされました、古びがわるふ御ざりましたり、文字のすきがわるふござりましては、極めがたきものでござります、夫と申も、宋史にもれただけが御そん御そん、

上上吉　西夏　乾祐元寶
　　南宋　建炎元寶

頭取「此の二つ同樣に致しましたが、思召はござりますまい、皆々「成程きこへたが、乾祐を先へかいたはどふだ、頭取「御尤で御ざりますが、乾祐は文字も能できまして、製作も又格別でござります、其うへ僞品だけ、鑄よふが少なかろふと存ます、りくつ者「是、僞りは正用品より、位が次だといつたではないか、頭取「成程さよふで御ざりますれど、西夏は僞品とは申ながら、世々中華の内に帝號を讃しまして、殊にこの節は、錢の製作なども、格別によくゆきとゞきました、夫ゆへ手跡もよふ御座ります、建炎もをとりませぬ錢で御ざりますれど、文字が通寶のよいのとくらべますれば、ちとおとりました、夫ゆへ次座へ直しましたれど、ごかくの位はのがれませぬ、

上上吉　張士誠　天佑通寶　三當五當

頭取「是は珍品でござりますが、近頃は二三品みかけました、しかし製作の至正によく似たがござるところ、安心なものでござります、小錢はちとあつ手でござります、美事なかねでござります、皆々「三當五當は同樣でもよかろふが、折二の位はどふするのだ、頭取「折二の儀は、只今申上がたく御ざります、追々ひやうを致しませう、

上上吉　北宋　靖康元寶　折二

頭取「此靖康は、折二と申、文字も格別面白ひ所が御ざ

ります、皆々「なる程爰が定座とみへる、わる口「是々、此錢も錢體のよいのを見たら、吉字を黑くしたかろふが、頭取「成程文字のすきが、かいのふござりますゆへ、かよふにはいたしましたが、ちと吉の字が白すぎますから、ほうびに香合を遣しませう、

上上吉　大元　大德通寶
上上吉　同　元貞通寶
上上吉　同　至治通寶

頭取「此三品は珍品で御ざれども、製作がちとおとりました、至大の美錢程にもまいろふなら、吉字は黑くなりませうに、殘念々々、わる口「製作がよくても、國史にもれたから、ひやうにもおよぶまい、そしてしろう人の合點ゆかぬものだ、ひいき「それよりも大德などは、趙子昂と云手跡だせ、頭取「なる程、中にも大德などは手跡がよふござります、子昂と申もむりはござりませぬ、皆々「なぜ大德は座をあげぬのだ、頭取「なる程御尤で御ざりますが、元貞、至治も、文字製作のわるい所に、安心なところがござりまして、きつと元の世の錢と見へますゆへ、同位のばはのがれませぬが、大德は少し申わけばかりに、吉を黑くいたしました、

上上吉　不知品　天定通寶三當

ひいき「これ〳〵、天定の三當は、天佑より上にをくはづだが、頭取「御もつともでござりますが、天佑とはちと違ひます、天定は珍品でも、不知で御ざります、ひいき「大義と同じ時代ではないか、頭取「成程、近來涑友涼が天定と改元いたして、此錢を鑄ましたと申ことでござりますが、文字製作も、大義とはよほどかわつて見へます、功者「天啓に似たとゆふことか、頭取「御尤でござります、天啓を爰へ出しとふござりましたれど、天啓は珍品で御ざりますれど、明口文が御ざりますゆへ、素人が餘り存じませぬ、それゆへあとへさげました、皆々「是々、天啓の評はきゝたくない、天定のことをきゝたい、頭取「これは〳〵、天啓を出しとふ存まして、天定の口上が外へちりました、さてまた天定の製作文字とも、たつぷりとしてよし、三當の中にて珍品と申ますは、外にはござりませぬ、龍鳳と同位でござりますれども、天定は小錢が多くみへます、其上不知品かた〳〵にて、少しさげました、

上上吉　不知品　天啓通寶

頭取「此天啓は、明の天啓とは違ひまして、不知品で御

ざりますが、大體天定に似よりました製作で、又天定とは文字も一段よろしく見へます、うらの平地など、餘ほどおもしろい所がござります、わる口「下座にしては、だいぶ吉の字が黑ひの、頭取「さよふで御ざりますか、明の天啓、しんちう錢もござりますゆへ、座は下げましたれど、位は是でも不足でござります、ひいき「吉の字がまつくろでもよかろう、素人「あかがね錢は、皆不知品の天啓かの、頭取「いへさようではござりませぬ、明にも銅は御ざりますが、天啓は文字製作銅色も、天定と少しも替りませぬ、裏の平地は、少しかわつたよふなれど、同じ時代か、近國の製作かと見へます、大體陝西四川雲南の銅によく似ました、素人「安南ではないかの、頭取「なる程、是も御尤では御ざりますが、皆々「これ〳〵、時代の世話は聞ずとるゝい、評をきゝたい〳〵、頭取「小錢折二とも同格のもので、又折二はかくべつ、おもしろみも御座ります、段段人のしるほどならば、評判をましませう、

上上吉　大清　天命通寶
上上吉　北宋　靖康通寶
上上吉　張獻忠　大順通寶背二
上上吉　唐　大曆元寶
上上吉　南漢　乾亨通寶
上上吉　遼　重熙通寶
上上吉　五代　天福元寶

頭取「此七品は、御ひいき次第かと存ます、何れを何れとも申されませぬ、天命、靖康、大順は、世に近かけれど鑄よふが少く、大曆、乾亨、重熙、天福は、多く鑄ましても、時代が古ふござります、天福などは、昔は甚珍品で御ざりましたが、近頃は折々みかけます、素人「おいらは餘りみぬせ、頭取「成程天福は、製作の至てあしき物ゆへ、御ろふじ付ませぬと、皆御不安心なものでござりますが、文字に御きが付ますと、甚見よい物で御ざります、そのわけは、まだ似せ物師が、天福の字を呑込ませぬ、開元で直しますから、直に化があらはれます、あれは天福□□□すと、一盃人のくふ錢がござります、古錢好「是々、夫を似せもの師にきかせるな、

大上上吉　明　崇禎通寶五當

頭取「是は近世の製作では御座りますが、甚だ少きことは、明史でも御存知の通り、文字も□□の背二の字

に似まして、面白い所が御座ります、西清古鑑には、背に監五とあるを出しましたが、今江戸には戸五が御ざります、皆々「是々、明史には、鑄るにも及ずして明の世はほろびたとふことだが、どふしてその錢があるの、頭取「なる程御尤で御座りますが、通用のまもなく、明の世は亡びたと申ことでございます、大國は、一たび鑄らうと仰せ付られますれば、都はほろびましても、遠國は存せず鑄ますから、せひ殘りてあるはづて御ざります、功者「なる程、ねがひのかなはぬ銀代通寶や、二字寶永さへ、内々鑄たのがあるから、せひ崇禎はあるはづだ、わる日「近頃戸五とあるやつが、だいぶどこからか出た、頭取「なる程、近來似せも多くみますが、にせは皆古びが能過ぎます、是は通用のなきものゆへ、今鑄たよふながよふございますが、夫では化があらはれます、又素人は、古びのよいが目に付ますから、是はむづかしいもので御ざります、功者「崇禎を卷軸とはよくあんじた、りくつ者「淳化の十當が出たら、どふするきだ、頭取「是はまたかくべつの品でございます、わずか三千餘貫鑄ましたもので、ことに帝筆と申、宋のはじめの錢にて、宋史にきつとございますれば、中々崇禎の塲ではございませぬ、功者「夫で聖宋の大の字を白くしたのか、わる日「角力では、だいぶ崇禎をあとへさげたせ、銀座町で不安心とゆふやつを、數に入たのか、めうがをくらつてばかになつたか、目鼻がまわつて三ッ巴になつたのか、頭取「是は〳〵さわがしい、まづ〳〵静になされませ、是にはちとわけも御ざりませう、大觀、至正の十當が、座の上り過ましたので、御きを付られませ、わけはちと爰では申されませぬ、きをい「それ頭取はうろたへたことをゆふせ、ひきづりだしてぶちのめせ、ひいき「とんだやつらだ、そいつをつかみだせ〳〵〳〵、上方者「お江戸の人たちは、きやうとふるらいことぢや、わしはならやとゆふて、人にもしられたものぢや、此評はわしがもらひませうわいの、頭取「さてなにごとをおきましても、少ないところが明史にくわしく見へますれば、此上もないおてがら〳〵、

寛政二庚戌年霜月　松翠子述

東都日本橋通二丁目　書林　松本喜兵衛板

寶貨雋終

娘評判記

口上

とうざい〳〵、高うは御ざりますれど、是よりおことはり申上まするど、まくのそとの切口上、年々かはらぬ役者評判記は、見るばかりが百銅のいた事、まれに出る吉原ひやうばん記は、見た跡で百疋のいた事、茲にあらはす藝子ひやうばん記は、わづか小銅で御もとめなされ、おわるい方には御近所の藝子などは、その被レ成かたにて、物いらずに御手に入る法も有と承れば、くはしく御らんの上、右の儀は、ぢき〳〵の御相たいに被レ成ませ、利勘先生此だん申上たく、下手の長口上、牛のせうべん十八町、芝のはてから神田の臺、四ッ谷赤坂かうじ町、深川本所淺草下谷、すみからすみの若い衆へ、そのためおことはり、すらりとさやうに、

明て和らけき年いきな月しやれる日

利勘先生勘當之門弟　道樂散人著

娘評判記　あづまの花軸

路考娘（たちばな町）

瀬川菊之丞にいきうつしなるゆへ、ろかう娘と稱す、およそ唐天ぢくはいざしらず、日本の地において、このきみにならぶはあらじ、鼻すじ打とふり、いろのしろき事ゆきかとあやまられ、首すじなどははくりやうのとつくりにひとし、ゆびさきのじんじやうさ、淺草くわんおん地内の女やうじに異ならず、いきすぎ少もなく、物ごしうるはしく、義太夫の大めいじん、長うたさみせんおごりの上手、かみのゆひかたはならすじみならず、わるじやれはきついきらい、しらぬ御方は武家そだちと見給ふもことわりぞかし、

慶子娘（日本橋）

中村富十郎によくにたるゆへ、慶子娘とせうす、そろそろとしまの部に入るといへども、いろつや十五六に異ならず、ひとへに艶類すぐれしゆへなるべし、せい高くしてほつそりと柳ごし、三絃ぶんごの大めいじん、少しかうまんのきみあれども、是はきりやうと

藝とつりあふ故なるべし、一め見る人は、あはれ此世へ出る甲斐に、此やう成君と、せめて一夜のまくらをかはさば、死でもだいじないなど思はざるはなし、まことに美女の上上吉なり、

中ばし　春水娘

芳澤崎之助にそのまゝなれば、春水娘とせうす、きりやう萬人にすぐれしゆへ、少しもけんたいぶらず、何事にても人の詞をそむかず、しかりとて心ていみだならず、大めやうかうけの御前へ出ても、少もおくするけしきなく、座もちのおやだまなり、少ししこなし過たる塲あれども、是は業がら、そふなふては叶はぬことなり、しかしきうじ人や、供のものをしかるなどは、おり〳〵聞にくきことあり、元來きがさにて大がらなれば、此きみにおもはるゝ人は、さぞかし頬のこけ給ふらん、

京ばし　花曉娘

中村喜代三郎に見ちがふほどなれは、花曉むすめとせうす、心はつめいにして、たにんの不和をとりつくろふことゑて物なり、それゆへばくゑきをこのむよしさたあれども、これは世のわる口なるべし、きものを引ずる事がきついきらい、雪後など路次のあしい時には、おん〳〵ばしよりにして、しろきすねを見するが得手もの、さるによつて、身をかざる事少しもなく、さく〳〵として、男よりも物にすみやかなる氣性なり、此きみと付合ふ人は、たちまち心すぐになるとの評ばん、むべ成かな、

横山町　里江娘

中村松江によく似たるゆへ、里江むすめとせうす、唐のやうきひ、我朝の小野の小町は、當世見し人なければその實しれず、今此やうなうつくしい君が又とあらば、たて引がしたい、どふともこうともほむるに詞なし、此きみに思はるゝ人は、前生にどのやうなよきたねをまきしやらん、當時の色男たち、身だいを棒にふるとも、此きみを一生の手がらに手にいれ給はゞ、まつだいの高名なるべし、びじんの親玉外にはないぞ、

馬喰町　園枝娘

吾妻藤藏ににたるゆへ、園枝むすめとせうす、古人ならば、女武勇集にものるべきがうゆうなる君なり、なまゑいぬきみなどにてさはぐ處を、うでまくりして、くみとめしことたび〳〵、見かけは左ほどには見へねども、心のたくましきこと、むかしのともへ女はんがく女におとらず、しかれども藝にかゝりては、あら〳〵しきこときついきらい、めりやすのめい人なるが、その聲のしとやかなること又ならびなし、じやらつく事がきついきらいにて、かりそめにも、ふるきいくさ物がたりなどが大こうぶつ、木曾よし仲のごときの名將の妾にも仕たし、町家におくはおしき事なり、

神田　井花娘

嵐雛治にそのまゝなれば、井花むすめとせうす、きりやうに申ぶんいさゝかなし、少し小がらなればおぼこめきて、いつ見ても〳〵木むすめと見ゆるなり、くわしくだ物がきついすきにて、飲食いたつてほそし、長うた義太夫小どもめきて一興あり、もはや中年ならんが、其わかき事いつも十四五と見ゆるなり、誠に小町がゑいせし、おもかげのかはらで年のつもれかし、といふ句にかなへり、げいしやはいづれも此君のごとくに有たし、

むま道　杜若娘

岩井半四郎にいきうつしなるゆへ、杜若娘とせうす、少し小がらなれども、たて引にかゝつては、いのちをすてゝはまる氣しつなり、なれども内せうを聞ば、とかく山ぶき色の多き方へ付て、腰がるをばはめに付るといふ、是は此きみにかぎらず、皆以てかくのごとくなり、しかあるをおもてへ見せず、よくはなれてたて引づよきと見せるは、おそろしいほど利こんなり、おの〳〵よふじんあるべし、

くら前　如皐娘

瀬川七藏ににたるゆへ、如皐むすめとせうす、きりやうもよし、諸事の取まはしも申ぶんなけれども、少しかうまんぎみあるにや、ついにこつこりとわらふたる事を見ず、とかくに出いる人より、きん〳〵をせしめたがり、おり〳〵かげまを買ふがゑてものなり、

なみ木　三壽娘

市川小團次ににたるゆへ、三壽むすめとせうす、藝は大ていなれども、少し心にたらぬ所あり、むせうに人の色ごとを取もちて、むづかしく成たる時こさり果るなり、かねもふけする事がぶてうほうなれば、いつ見てもひんきうなり、

立花町　三　朝　娘

尾上民藏によく似たるゆへ、三朝むすめとせうす、むせうにさはぐ事が得手ものにて、なりふりにもかまはず、供のものと手を引あふて、大さたにあるくがくせなり、きんじよの弟子どもけいこに來れば、急用をさし置ておしゆるを見れば、實氣ありと見へたり、

深川　東　湖　娘

山下京之助ににたるゆへ、東湖むすめとせうす、藝きりやうずいぶんよし、物をいふにすゞめのさへづるごとく、ちやらや〳〵といふ、心のすなをなる事世にたぐひなし、なれども玉にきづとやいわん、そこなし上戸にて、一ばい過すやいなや、酒が酒をよびて、ふざけまはるにはあいそうがつきるなり、

中ばし　巨　撰　娘

小佐川つね世ににたるゆへ、巨撰むすめとせうす、きりやうも藝も大ていなれど、げい子ににあはぬ内氣にて、物にじぎするがくせなり、母そだちといふ人あれど、今兩親ぶゐにて有、いか成やうすやらん、是ばかりはくわしくしれず、

品川　龜　音　娘

瀬川雉次郎ににたるゆへ、龜音娘とせうす、藝もよくいひぶんなけれども、おり〳〵むかばらをたつ事あり、五人のはなしのこしをおるが得手ものなり、何さま心にまかれる所あるとみへたり、

どて下　盛　府　娘

佐野川市松ににたるゆへ、盛府娘とせうす、きりやう藝たいていなり、人のはなしをきくがすきにて、きかずとよいことを開たがり、いわずとよいことを口ばしるくせあり、顔ににぬうしろすがたは千兩どうぐなり、うしろびつくり、前うんざりといふなるべし、

かうじ町　都　巨　娘

嵐小式部ににたるゆへ、都巨むすめとせうす、すこし女太夫といふ身あり、手ぬぐひをかたにかけると、人のみゝに口をよせてさゝやくがゐて物なり、少しわきがゝあるとの説なれども、山の手にてはひやうばんよし、

麻布　里　虹　娘

山下金作ににたるゆへ、里虹むすめとせうす、目にあいそうこぼれ、くちじんじやうにして口びるあかく、ひたいのはべぎは、春信がゐがきし上ろうのごとく、

ゐりほそくぬき出、せい高くこしほそく、物ごしとやかにて、人がらいたつて上ひん、うちかけ着る時は、諸侯の奥方と見ゆるなり、諸げいかけたることなく、勿論かうまんのきみ少しもなし、算びつ碁せうぎ、そのほかかくしげいあまたあり、ゐるひはでなることきついきらい、かみの風やしきと町のさかいを結ひ、はりにて突ほども申ぶんなし、其うへけだかき生れゆへ、辨天むすめとゐみやうす、ろかう娘につゝくなり、よつてくはんぢくに出す、

娘評判記あづまの花軸　終

赤烏帽子序

いつしかむ月も半過れば、尾部山の櫻、さらぬ木々まで、何となくめぐみ渡りて、空吹く風もゆたかなる文の、三ッの春九重の春も、あざむきつびやうぞ覺さる、されば我人まねきあい語り相、遊山の有增のみなりき、予もわかからぬ身にしもあらねば、袖をひかれて間の山をのぼるに、太鼓はてれつくてんにひゞき、鞍の聲はちゝちに過たり、是を聞より、瓢簞のうきに浮ひたる浮世の中は、とかく氣まゝと思ひつき、日々に行ことにはなりぬ、かゝる賤き身の、やんごとなき會に立よること、いはゞ薪をおゐる山人の聟入するもかくばかりやはつくろはんと、我ながらおかしきかたも侍んべる、言葉のおちをとられては、のづらにあらざる塵をひねり、公事場に出たる思ひをなす、しかれどふるきおなさけの、はかりも忘れて亂れにおよぶ小薄の、ほのじは次第にまさりたり、瓜田に沓を入れたるの戒めも、後にはおもひ出し侍り、おもへば〳〵移りやすきや、飛鳥川きのふのせんしやう、けふ借錢の淵となるもしらで、このことのみに永日をわすれ、ほゝより文を出しては詠めくらし、是こそ春の道なれなんど、ほゝゑむ事、まじやらぬ出たる折節は、其獨を謹むの言葉胸にうかび、もしと隣の垣間見を恥る、かゝることはわれのみにてもあらんかし、はるもやう〳〵くれがたの頃は、人々あしをそらにまどわして、いきおひまうにのゝしりしが、野良滯留と風聞有より胸をつき、或は作病或は他行と僞りをなせば、中古の中はおのづから、にぎ〳〵しきもさびしくなり、盛者必衰の諭を嗜む、宿やも希にぞ侍るやらんと、又そしるは悔るに似たれど、さりとて費にはあらず、昔も青砥左衞門といふ人　水中に一錢を落し、百文を得させて是を上る、百文の錢は世界にとゞまり寶となる、水中の一錢あげざれば、國家の費との心なり、世人是を殊勝と感ず、是又それに同じ、野良の手に渡りたる手、海にも山にも捨ばこそ、頓てれんどびのかたに渡りて、終は當地にとゞまるなり、抑野良道の德の厚きこと、丹前唇にも越たり、先此道に立入ては、僧旦那のあいらしひ、御師は道者のもてなしを知り、商賣人は人前よく指寄よし、指寄よければ金銀をもうくる事、花錢はものか、それのみならず鬱氣を散じて命を延る、かゝる事しらざるは、石壺の中にて年月を送り、井の中の蝦蟆のたとへ成なるべし、いひつゞくれば惡口に似たれど、宜き道をばよきとほめ、あしき子どもをあしきと難ず、是も正直の頂には、野良の太神もやどり給ふと、いふにまかせて是をつゞる、全く人にみすべきにあらず、ひとりふたりのしりたるものは、同じ狐の穴かしこ〳〵、

赤烏帽子

△古市芝居

平田市太夫　中村甚四郎座

面體容貌は、人々見る事なれば、不レ限二此人一、一向不レ及二褒貶一、先たゝみざわりわろし、年に似げなきわろぐるひせらるゝも、やもめそだちにてあまやかされたるほど、物ゆいにてしる、それは尤と見ゆるし侍らんか、又おとなしきは、一座の子供と樣子有よしにて、施主とそのに成たるもありとなん、されどお茶のひろきに取得有、

中川金之丞　小舞六郎兵衞内

手くだ少しはならはれたるとみゆれども、氣の弱きにひかれ、思ふやうにゆかざる事、甚立習ふにあいしらひ違へるが如し、言葉更にそろはず、聞ば敵にあふて、手をおはれたると云說有、其故なるべし、まはる事は例のたとへの水車、誰を待とも定る施主なければ、ひくや茶臼の穴うたて、うたてもならぬ花せんなるべし、されどおやぢの利德は、各別の所に有との取

沙汰、國津罪の一ッなれば、野良蟲のつみ來らしのと、いよ〳〵おそろし、

或曰、正月元日誓紙試筆、道のならびうけられ候哉らん、施主により、或は誓紙或は誓言の手術うたれ候へども、首尾あわぬかどのみにて候へる、後々方々より物言出來事、□□ひろき取ざたなり、

藤井長門　甚四郎座

年の功といゝ、數年當地の風にもまるゝゆへか、座敷付ならぶ方なし、又並もなきはせいの長きなり、爰におかしき咄有、何れの所にてか有けん、大にあつ□□たる夜物着せ侍るに、膝より上のあき侍りけるを、亭主障子の際より見て、扨も〳〵と獨言の聞ゑや侍らん、引かづき給へば、頓而又膝ぶしより下ぞあらわれたり、昔も友の死をとぶらひ侍りけるに、尸にきせたる衣のみぢかきを見て、などすみちがへにはせぬぞといわれしとなり、左樣の異見云人もあらざるにや、徒然草にいづる、名を聞よりやがて面影はおしはからるゝ心ちするを見る時は、兼ておもひつるまゝの顏したる人こそなけれとは、名よりもはるかに長きのたぐひにもや、此人三番目に入る事は、第三かまへの御作意餘り奇妙に依て、聊其をしたふのみ、

杉村小太夫　上村八右衛門内

施主とつまらぬ口舌する事、大にすきなり、是は一義をきらひてにやとおもへば、左にもあらず、熊手の事は、前書にもいへるごとく今にやまず、我めいたる事、唯我獨尊の樣におもわるゝは、八幡の庭はきの子にはおそれおゝくや、

岩村勘彌　林宇兵衛内

自慢の事、野良蟲に委しければ爰にもらす、舞臺にて口をうごかさるゝこと、いかなる物をくわるゝにかとこのまし、御茶せばし、されど朝熊の牛飼はこわき手にて、御茶にひきめつくまではなされたりとぞ、かれが道具おもひやらるゝ、又去施主に誓書の手におふてつもられたるよし、都をへたりともおぼへられず、但しそれほどの智惠にや、

山本萬助　前の野良多左衛門内

うとき事は云におよばず、面體に顯れたり、うとき者はお茶ひつきとの世話あれど、それさへ違て取得なし、然しよぶ人もなかりしに、有るに始て茶やよりさしに來る、親ちかかたへの人、是はめで鯛、かふていはへと侍れば、よくも祝せられたる物かなとて、□儀を取さしみして振舞り、箸をがらりとおくやいなや、茶やよりかへしに來る、人皆興さめて、色は青酢に異ならずとぞ、

中村藏人　甚四郎内

ぬくきこと、六月半に日なたぼこするがごとし、座敷付火事の見舞か、枡かぶちに鼠のかゝりたるがごとし、人のなせそといふことを、別て好まるゝは、天のじやくの氏子にはなきかとおぼさる、お茶せばきこと、きやらのほそぬのならざることは、芝居の新作に似たり、獨りの施主にまはらるゝ事、心中か是非なきか、時によりてゆかるゝ事、いはゞ坊主の氣隨に似たり、首より手のつけどまでいはんかたなし、

野田小傳次　小舞六郎兵衛内

施主のあいしらい、賣僧の布施を得たるもかく計りにや、さい〳〵文をこす人なり、三月末つかたにからだそこね、漸五月下旬、うるしかはき侍ると覺しくて、床入なるよし、奴して茶ごとへふれられた、

松本右京　兵庫伊兵衛内

年には利發なり、すしなりといふ人もあらん、幾許のおゝあるとても、幼少なればいふにたらず、

吉川品之丞　久兵衛内

ことわり上に同じ、

小森勝太夫　甚四郎内

心立よき人なり、是も當地の風をしられたる故か、又品形わろければ、心はなどか賢よりかしこきに、うつさばうつらざらんを工夫せられたるか、御茶ひろし、

松川花之丞　一郎右衛門内

いつも同じもいさゝなり、こしやくなり、歌月讀なれどきやうとし、萬の難侍れど、くどくは跡よりとのこし候、

杉山市之丞　うか七兵衛内

智惠はなみなり、手術つめひらきは、口つとよばず、又よびたるさたもきかねば、おくの手しれず、しかしちよたはすもじいたされたり、

上村金太夫　兵庫伊兵衛内

或夜施主三人、子供三人の會之時、互に一度づゝかへ合、都合三度事にあわれたるよし、孟母が三遷には違ふておかし、

朝川八彌　奴作兵衛内

茶やにえん遠き人なり、心だてよろし、或夜岸村一座のとき、例のきらひなれば、我ふらんため其方もふれと云ふくめけれど、此人ふられず、能分別か、

花屋數馬　ひじり又兵衛内

當年は殊の外おとられたり、御茶のへりには、いか様石垣おとりたるやうに、心ち覺へ侍り、

荒井皆之助　奴作兵衛内

拍子きゝ利發なり、おやぢの果報うら山敷か、橋本金作に、おやぢ分別ちがいいたされ候へども、此君にて、行末とりかへされんとたのもしく候、

玉崎角彌　七郎右衛門内
松川六彌　庄右衛門内
三丞

右三人は一間申談せざれば、とかふをしらず、博洽の君子をまつのみ、

△中之地藏芝居

岩崎金作　女方藤内内

もとより手付きん作なれば、こまかしき事はしらず、座配大かたなり、狂言のときん白擬わすれたるの一言にて、是も大かた推量いたされたり、

下村左源太　はやし安兵衛

利發なり、しらうとのあとれん若衆なり、然ばおやぢも重寶におもはれてや、本職に任せられたるは、古今無類の例なるべし、一座に施主をとらへては、燒やもしほの鹽もなき太鼓の心、つく〳〵おもへばかねをうらみて、くすのはづかしきかたも有なん、一義はあなたにごちよりすきなり、家持若衆にしはべらば腎虛をすべし、野良においてかゝりなば銀虛をすべし、とにかくにしもあはざる事は、陰陽師と口風の工夫を觀ずべし、

玉川六彌　玉川千之丞内

今年俄におとなしくなられ、座配しとやかなり、御茶はなるといふかた成べし、されども施主にもよらんか、かくいへば予が持物も、大かたはしるゝかにてはもじなるのみ、物所望の方へすこし御異見もうしたし、

玉江三四郎　孫平次内

能書なり、つめひらき勿體、一座野良の手本なり、但わきよろしからねば、おぢか頭となるのたぐひか、此人去施主に頭指と中指にて、釜火指やくのなりして

みせられけり、一座の僧法師などにて、印をむすばるるが、劔印には中ひらけりといろり、いかやうの相國か、きゝたき事にこそ、御茶ひろしといふものは、實にはなしたるにて、御茶せばしと云ふものは、すまたにぞ有ける、いと不審なり、異見を丹前唇といふ、是や作のあつきといふなるべし、

三橋重三郎　女方吉右衛門内

御茶ひろし、一義若にならざる故にや、したるき事、高野坊主もあく計りなり、施主の首をしむるに、息のはづむ事度々なり、聞及びたる人は必氣付を拵參らする、よしなき用心なり、又きぬ〳〵の時節、去いはれたるゆへ七草若衆といふ、我君とのとなへ事、いかさま上るり本より出たる成べし、又去處にて、下おびの古きを恥て、ふとんの下へおしこまれたる故、翌日施主の方より、下帶二筋おくられたるは、孝行成施主とやいわん、

玉井兵之助　金兵衛内

お茶ひくし、物所望せらるゝは、又ならぶものなし、御茶がち成故、そにて利を見らるゝか、手くだ一向しらず、なじみの德とて、一ッも二ッもゆかるゝふしぎなり、

坂井掃部　はやし九郎兵衛内

座敷におゐてくずおゝし、お茶は痔ありてせばきかたへよらんと、□□□計りかりたる人などは、能といふこともあらんかし、うすくみへずつがもなき時、詠歌大概をひかるゝ、やさしとやいはん、くさきとやいはん、

藤田勝彌　孫平次内

むか腹を立らるゝ事も、うすき故にや、伯夷が風を聞しは、頑夫も廉に成といへるに、何とて三四郎が風はにせざるぞと、のみことしたる施主ある、是も御茶の窮窟なるゆへ、よろずをあしくおもわれけるにや、兎角功のゆかぬなるべし、

坂田才三郎　佐左衛門内　與平次預り

つくろはざるを能と心得、不嗜にだゝくさ成は、法然上人の傳を受て、新羅上人の法をとかるゝが如し、過たるは及ばざるにまされるの類か、此人唐物商して目利なるに、其道のちがへるとて、施主を度々見そこなわるゝ事、情は道によりてかしこしの世話に叶侍るか、お茶窮窟のかたならんか、又施主より文得て

は、預りのおやぢに談合せらるゝは無興なり、雙六しやみせんにとりつかれては、諸事わすれて紋なし、

山本金作　長左衛門内

心立よき人なり、お茶おばなることいわん、奴どおやぢの功にて、施主このさんとせられしを、施主へ内談を□ら□し、かつふつやめさせられしよし、殊勝なればあしき事をばいふにたらず、

上村市之丞　玉川千之丞内

おさなければ批判におよばず、それのみならず、事の長きはあくにあれば、省略するのみ、

花井六之助　金兵衛内

是も又心よし、御茶なるかたなり、座配なども大かた成べし、取おくれられたる故か、人々あしきよしの批判なれば、用時は虎となり、不レ用時鼠となるのためし、是非に不レ及儀ども也、

小傳次

面體見るにつけては、かゝる人あるべからず、歌うたはなくとて、自然もゆかるゝよし、天不レ殺レ人の道理有がたや、

七之助　茶や長右衛門内

ちいさけれども利發、おち有とても、元來うすからざれば、いづれよからんと末たのもし、

赤鳥帽子終

後序

或敲二暮扇一袖二一軸一來、覔二予後序一、披レ之見レ之、全篇當年右中二座之野郎評判盡二其極一矣、嗚呼至哉大哉、丈人野郎之業、可レ謂レ勤矣、篇引懲レ惡而勸レ善、有二一字褒貶一、有二千金諷諫一、眞吾若道之春秋乎、毀者不レ失二其眞一、譽者不レ過二其實一、文極レ美辭盡レ麗、卷舒數回、不レ覺二手舞足蹈一、今以二淺見溝識之身一、書二此跋一者、大根太之晴能、所詮可レ望二平釘之通者一、雖レ辭レ之、强及二懇望一、固辭還而似レ管、不レ得レ已且若道來歷記レ之者歟、有二天竺一文殊師利權二輿之一、有二震旦一鳩摩羅什潤二色之一、於二本朝一御井戸掘弘法廣レ之、其流洋々乎繁二昌於瑞穗國一、而無レ底二秋津島一、往昔人情深而用二於玉章詩歌之艶一、以二於錦木千束之諺一、漸世移時變之故、人心巧而集二少男一、令レ習二妓樂一、呼レ之云二若衆歌舞妓一、始吾入二于神地一、寛永年也、萬太夫佐源太等、宮後邑於二養草寺一爲二妓樂一矣、于レ夷于レ洛無二不レ至處一矣、扶桑六十之周章者、用二盡於金銀一、陷二溺于此道一者、不レ可二勝計一、於レ是慶安四年歌舞妓禁制之法度、誠嚴密也、又彼等巧レ事凝レ思而取二少男之額髮一、或着二黑頭巾一、或冠二三尺手拭一、令レ爲二歌舞一、名レ之曰二野郎一、蓋金銀謂レ可レ遣、則後臺指向之故名レ之云々、見二野郎論一、又云、薩摩小勇者似二彼等頭一、故名レ之、未レ知二孰是一矣、當時野良之道體二於威起張合之强一、用二於結開息込之詳一、萬治四年之春、於二洛陽一彌郎衡甚盛之間、京中之貴賤忘二其身一、奢侈超過矣、佐勢牧君追二放於花洛一、而一向斷二其根一、寛文之春來二于勢陽一、舞姿之婀娜、歌舞菩薩、亦挑レ尻可レ被レ逃、歌謠之妙音、迦陵頻伽亦閉レ口可レ止レ歌、不レ出二於華洛一、則如レ此者、不レ可レ來二于吾神宮一、是亦太神宮惠澤、而可レ謂二神慮一矣、誠此道之久者、准二于豐宮川之泥龜一、長者同二于內外宮之注連一矣、是吾儕所レ希也、如レ予加二一語於其間一、譬如二代二大工一劉レ木者一、必切二其手一歟、然丈人之命巨レ拒、於レ是乎跋、

寛文三年仲夏日

勢陽後學如是亭我聞子頓首九拜

吉原丸鑑序

我もそのかみは大じんとよばれ、四十まつしやのものをひきぐし、和氣里にあそぶといへども、手れん手くだのかけひきのみこのまぬ所多く、しばらく女郎ぐるいにたいくつして、眞土山のほとりに隱居の身となり、うき世の色を案ずる折ふし、扉をたゝくものあり、あやしやと露路をひらけば、終に見もせぬ男のさ〳〵と座敷にあがり、辭儀もなく床前になをりて、何を云ひ出ス事ぞとおもふ所に、しさいらしく打しはぶきて、我聞汝粹の道に心をかけて、わけ里にあそぶといへども、しやれの本意にいたらぬ事をなげき、此所に隱居して工夫をこらすの由、その心ざししゆしやうなれば、今汝に此道をおしゑんため、是迄あらはれ出たるなり、我人間にあそびし時、十有五にして粹學に心ざし、三十のあかつき、太夫の腹の上にのぼりて明星の光をくわんじ、豁然として遊色のさとりをひらきぬ、是よりうき世をかゑり見るに、心にかなふ色なきによつて、一ゑ無色の境界にかくれ、ながくかの地にあそぶことなし、おもへば是さへ一むかし、辨慶も西行も今見ればひとつ狂言なり、住果ぬ世に、にぎりこぶしをして何かはせん、ありだけつかふて、あそびたいほどあそべば、どこぞのほどには、しせんと粹の道をさとりて、おのづからやけとまる物ぞかし、いわれぬ親仁が異見、屋敷方の門法度、是皆ぐわちの丁節なり、なにほどに制したりとも、根からこなれぬ人品、用に立ものにあらず、せいとうつよき親仁の子どもには、らうがい病多く、法度きびしき屋敷には、どら打ものたゆる事なし、是角をためて牛をころし、毛を吹てきずを求むるたとへにして、かならず其はづの事ぞかし、其わざわいの來る所は、野暮のやぶさか成ル心より事おこり、しよわけの魂膽をしらぬによれり、仁人君子豈これをなげかざらんや、情の道は人間の本ニして、物のあはれも是よりぞしるといゑり、此道にそまぬは木石なり、うわべにかたい顏つきする仁體、かならずないしやうとりみだすにきはまりぬ、舜も二女の色を愛し、はんれいも西施をともなへり、此道に不粹なるときは、孝も誠の孝にあらず、忠も誠の忠にあらず、昔大王色を好みて、天下その化にやはらげり、まさに知る好色は是文武のみなもとなる事を、汝一方の大じんとして、粹の道をきわめ、しよわけの師とならん事をおもはゝ、金のありだけつかふべし、今は是までなりとて、つゑ立て出給ふを、これ只人にあらずと思ひ、いそぎ椽より飛下、ぬぎすて給ふ草履を、手づから取りてなをしければ、かの客につこと笑、でかした汝、我目利にたがはず、修行の心がけはそれなり、さらば汝に一卷の書を傳へん、是をまなばゝおのづから粹と成て、うき世の野暮をみちびくにたりぬべし、我をば誰とか思ふらん、まことは雲のかくれ男、かりにすがたを見ゆるぞとて、ちいさき石に指をさし、光をはなち給ふとぞ見へし、白雲四方にたなびきつゝ、かすみとともに立まぎれて、松吹風とぞ成りにける、扨はつたゑ聞し粹仙少石公の來臨ありける物にこそと、歡喜のおもひ淺からず、かの書を取てひらき見るに、題而粹法三樂の書と云、粹法の微妙を盡し、遊色無雙の明文なり、よみをわれば、てれんの夢忽然と覺て、起あがるに、粹の道晴たる空のごとく成りぬ、爰に於て少石公の仙言にまかせ、世上の野暮を導て、此道をさささんことを思ひ立、あまねくまつしやの者どもに、細見の使を命じ、太夫格子より、さん茶局、河岸女郎にいたるまで、一人ものこらず吟味をとげ、とり〳〵ひようばんの品をあつめて、そのおもかげをうつすがゆへに、名付て吉原丸鑑と云、かけ奉る手くだのしな〳〵を、大じんの寶前にそなへ申ものなり、穴かしこ〳〵、

享保五年子正月吉旦　　武州眞土山隱士　蝶郎笑て書

右に申候粹法三樂之書、次而に御披見に入可ル申候得共、右三樂之書はしやれの祕傳をあらはし、粹法極意のゆるしにて候間、先此丸鑑を以て、隨分御修行候はゞ、其以後傳授可ル申ため、しばらく延引仕候、

吉原丸鑑第一

△あげ屋の巻

○太夫　京町　三浦四郎左衛門内

極上上吉　高　尾　定紋丸の内楓の葉

そも〳〵是は、元祖高尾より九代の後胤、おさな名をしのぶと云、此さきのおうしゆうと云し君につきそい給ひ、正徳五年に水あげありて、太夫の位にそなはり給ふ、およそ此くるわの内の女郎三千第一の美人なれば、そのかほかたちのすぐれ給ふことは、いわずともしるべし、道中のよそをいひときはしづかにして、たとへば滿月の雲なき空をゆくがごとし、座つきのもつたい、そなはりたる太夫しよく、座頭に足をとをきかせても、極上上のきみとはさとりぬ、物うち云たるけわいいやしからず、一座のけしきは少し氣おもに見へ給ふ事あれども、是氣おも成にはあらず、たいこどものそゝりにのらず、くらゐをおもくしなし給ふがゆへなり、あいなれ給ふほど、いとしめやかにしてよくうつる、御聲もうるわしうして、音曲たぐいなしといへども、なじみあるあいかたにあらざれば、聞たる人すくなし、但シ酒まいらぬは、たしなみにあらず、むまれつきの下戸なり、打ゑみ給ふとき、唇を少シ左リのかたへよする心にて、かたがほにて笑顔をつくり給ふくせあり、其笑顔をたとへて云はゞ、東風温和の氣をうけて、南枝花はじめてひらくがごとし、そのかみあげ屋にて、ある客しゆと口説し給ふ事ありしに、さばかりせき合て物あらそいしたまふおもざし、たけ〳〵しきさまはみちんもなく、御かほばせ少しもみぢして、其うつくしさ彌増なり、その後あまりにせきかねて、嬋娟たるまなじりになみだをうかべたまふよそをい、梨花一枝雨を帶たるふぜい、かのもろこしの楊貴妃の泣顔おもひやられぬ、誠なるかな、此さとに三千餘人の色ありといへども、其中に高尾と名付るきみは代々一人にして、すぐれたる美人にあらざれば、此名を繼事あたわず、此里第一の太夫とあがめ侍るをや、

○太夫　同　じ　内

極上上吉　薄　雲　定紋ったの葉、但そのかみのうすぐもは、代々丸の内つたの葉を付たまふ、此きみは丸なしにつたの葉計付給ふ、わけ有手なり、

此きみは前のみはる、花月良心信女のゆかりにして、そのかみ名に高き、松風ときこゑし御かたにつきそい給ひ、おさな名ははやのすけと申侍りし、松風身うけありて後、みはなのきみにかいほうせられ給ひしが、享保二年酉の四月、みはなむなしく成り給ふにより、其後は高尾のきみのもとにおはして、姉妹のけいやくあり、同年七月十五日水あげして、太夫のくらゐにのぼりたまふ、そも〳〵うすぐもと申は、明暦年中、うすぐも濃紫とて名君あり、そのころ高尾と全勢位をともにして、おしもおされもせぬきこゑ世上にあまねく、是を稱して三浦の三美人と申せしとかや、しかつしよりこのかた、三浦が家にして、うす雲こむらさきを高尾にならべて、代々太夫のとをり名とす、しかるに元禄年中、うすぐもと申太夫、ゆへありて位をおろされ、それよりつゞきて、うすぐもと名のりたまひしきみ、是もすこしのさわりありて、空蟬と名をかへ給ふ、それより後は此名を繼ほどの君なく、しばし打たへたるところに、此度この君、たへたるを繼、すたれたるをおこし給ふべききりやうありとて、うす雲の名題をつぎて、わか木の太夫と成り給ひぬ、御よは

いは今年いまだ二八にたりたまはねば、たとへば春のはつざくら、ひらきかゝれる花のふぜい、さかりの色をまつちやま、山々跡より申べし、

○太夫　極上上吉　音羽　江戸町　山口七郎右衛門内

定紋かげひなたの重菊、

此きみおさなきときは、たぞやとて、前のおとわと云し君につきそひ給ひしが、音羽よめ入ありし後、前のはつぎくと申せし太夫の妹ぶんとして、正徳三年に水あげあり、手なんどつたなからずはしり書、聲うるわしくして、絲竹の道をたしなみ、きわめて酒を好みたまへども、なじみなき一座にては、ふかうはまいらず、さばけて酒もりにおよぶ時は、いかなるのみじまんの男も、いきつかずと云事なし、されどもさすが太夫の德をなわりて、いかほどに酒をすごし給ひても、いさゝかもはしたなきさまに、とりみだし給ふけしき終になし、御かほばせつやゝかにして、御はだへ雪よりも白く、しゝつきむつちりとして、さながらまわたをつかねたるがごとく。肥てうるはしき御おもかげを、たとへて云はゞ、白牡丹の日晝にひらきたるが如し、まことに牡丹は花の富貴なる物とや、此きみのはんじやう、山口の福のかみとも云べし、道中のすがた大ようにして、一座のこなしおとなしく、あつばれ年まの太夫さま、申も中々おろかなり、

○太夫　極上上吉　初菊　同じ内

定紋かさねぎく、音羽さまとおなじ、

それ山口が家にして、太夫のとをり名多しといへども、とりわけ初ぎくと申は、此家にて大切にいたす名題なり、此君御よはひ三五なりし時、音羽の君の妹ぶんとして、正德五年よりつき出しの太夫さま、見事見事、そのせんせい日々にあらたに、月々にさかんなり、容色みがける玉のごとく、温潤含蓄の氣象あつて、あたりもかゞやく御けしき、横顔を見しよりも正面にむかふとき、たぐゐなくあでやかなり、道中のくらゐゆたかにして、たとへて云はゞ、うらゝかなる春のあした、遠山の花にむかふがごとし、あまたの女郎と一座にならびたまふ時も、ひときは目に付御よそをい、秋の千草の中よりも、菊のひともと咲出たるがごとく、げに初菊のきみなりとは、名をとはずしてしりぬべし、そのむかしいか成すへをやくみ給ひけん、今はながれの御身ながら、いさぎよき意氣地をしたい、さむらゐめきたる事を好み給ふとかや、はじめよりかぶろの見ならいなくして、つき出しの女郎なれども、太夫のくらゐをふまへて、年まの女郎の上座になをり、しよわけのとりさばき、少ッもおくれをとり給ふ事なし、御手がら申ばかりなし、

○太夫　無類上上吉　白絲　同じ内

定紋みつびあふぎ、

ないぞ〳〵、古今のまれもの、類をはなれてくらぶるに物なし、美人のたねもあればあるもの、此君おさなき時ははるかとて、此前のあふよと云し君につきそひ給ひしが、あふよかくれ給ひて後、おとはの君の妹分として、正德五年に水あげあり、其時よわい十三にして、太夫の位にのぼり給ふ、今年十八公の春のけしき、常磐の色も一しほに、道中のうつくしさ、たとへば花のあゆむがごとし、座付のよそをい、位あつてしほらしく、うや〳〵しうしてやすらかなり、げに風流の君子とやいわん、御立すがたを遠目より見るときは、ほそやかにして楊柳の風にしなゐる風勢あり、ちかく居よりて見るときは、少ッもやせ給ふ所なく、しかもしゝつきふつくりとしてやはらかなる事、羅綺にだもたへたまはざるがごとし、みどりの髪長してたけにあまり、地を引たまふ計なるを、中ばさみしてかろ〳〵ととりあげ給ひ、ゐりもとすきとをりてさながら玉をのべたるがごとくなり、御かほかたちのうつくしさ、いづくもすぐれ給ふ中に、とりわけ此きみ目もとに直萬金の色ありと、粹なかまのひやうばん、いつぞやさるものどもあつまり、此君の目もと、外にたぐひありやなしやと云ふ事をかけにして、いかさまおほくの女郎の内には、すべての色こそはおとるとも、せめて目もと計は、似たものゝないといふ事はあらじと、物はためしにして、くるわ中をまはりて、さん茶むめ茶より、局かし女郎にいたるまで、かたはしよりさがして、あらゆる女郎をそれよ是よと、目もとばかりに氣をつけて見あわせけれど、數千人の女郎の中に、似たる目もと、さりとは一人もなかりき、四五へんもたづねめぐりて、角町にあるさん茶女郎の目もと、どこやら似た所ありと云出し、わざ〳〵かのさん茶女郎をあげさせ、あげ屋町の茶屋までつれ來りて、此君に見くらべたれば、さながら錦のそばにて木綿を見るごとく、いさゝか似たものにもあら

す、かのさゝ茶女郎には、この事さたなしにして、そのやどへおくりかへしぬ、さてこそ此君の目もと、數千人にすぐれ給ふとはしられぬ、その目形じんでうにしてうつくしく、目ぶくろは大きなるにあらずして、あざやか成ル事はれたる月のごとし、眼中に威有てしかもすゝどからず、色をふくめるしほは、こぼれかゝれるごとくにして、したるき所はみぢんもなし、けだかくきつとしたる内に、どふもいわれぬあいきやうあり、およそ太夫と申は、此きみにかぎらず、くるわ數千の女郎の内にして、色の張本なるがゆへに、くつわは云に及ばず、茶屋あげややり手まで、目だかどもの寄合に、すいぶんぎんみして、智惠ときりやうともつたいと、すぐれたるをゑらんでそのくらゐをさだむ、されば面ていの内、卯の毛ほどもきづあれば、太夫さまとあがむる事なし、此まへのうすぐもと云し太夫、かたのごとく能き女郎なりしに、はからずも眶に物もらひと云もの出來て、なをりしあと少シばかり跡付ければ、此ひとつきずになりて、終に太夫のくらゐをすべり給ひぬゝ、しかるに此しらいとのきみは、能々せんさくして見れば、御顔の内に瀧疱の跡ひとつ二つ三つあり、なみ〳〵のきりやうならば、是にても太夫のきずと申べけれど、たれ人も是をいふものなし、たとへばつもれる雪の上に、梅花の一ようちりたるがごとく、いさゝかも目に立所なし、度々逢たる人もそれとしりて氣を付ざれば、大かたは見付たまはず、たま〳〵見付けたまふ時は、雪中に梅花を見出せし心地、なをうつくしきはなのかほばせ、いとゞ色ますおもひして、一しほたへなるおもがけは、織女の星を留て去り、雲母の玉を殘せるかとあやしむばかり、是しかしながら、美人の德そなはりたるゆへとしるべし、そのよそをいうつし出せと云はゞ、うんけいもきざみなす事あたはず、かなをかも筆をすてぬべし、御心ばへあくまでさとくして、しかもやさしく、はり有てなさけはふかし、御聲もうるわしく、諸藝にもつたなからず、風勢たをやかにして、物ごとしごけなきさまに見へ給へど、又はづれ〳〵、いとかいがいしき所あり、いつぞや淺草邊火事有て、此里風なみあしきとて、いかふさわぎし事ありしに、此きみの小づまかいどつて、立出給ふとりなり、いかなる武家のむすめといふとも、さぞあらん、あわれ此きみに長

刀をもたせて見たしと、其時見たりし人の申キ、すへずへ此きみ此里におゐて、色と云色に、色をくらぶる色あるべからずと、稻荷大明神のたくせん有しよし、粹法の未來記に、しるしおかれし事をおもひあわせ給ふべし、されば此書のしなさだめに、無類上上吉と申は、くるわ數千の女郎の内にして、此君一人にかぎれるをや、まことに外にくらぶる色なければ、無類と申ことはりとぞ、

野暮問テ云、おとは、初ざくゝ、しら絲の三君、去ル夏中より御つとめの品、格子とひとしく成たるよし申侍る、しかるに太夫と名のり給ふは如何、

粹答テ云、是汝がしる所にあらず、およそ太夫のくらゐを下り給ふ時は、かならず名をかへ給ふ大法なり、此三君夏中より、御つとめのはな代を、格子と同じくなせし事は、當分あげ屋より、わりなくたのむ子細有て、しばらく其品如レ此なれども、是當座のはかりごとにして、追付ありし位にかゑり給ふべきはづなり、是に依てお名をもあらため給はず、をもてむきの御つとめは、格子と同じさまに似たれど、内しやうの格式は、太夫の位かわる事なし、さるによつて此書そのくらゐをあらためず、太夫の本座にそなへおくものなり、是野暮てんのしらぬ所、珍重々々、

○太夫

極上上吉　三浦　京町　三浦甚左衛門内
定紋桐又は四ツ目結
たも付給ふ事あり、

此きみは今格子におわします、吉村の新ぞうとして、享保二年の水あげなり、そのかみかぶろにて左吉と申せし時より、すぐれたるよそをい有て、是せんだんのふた葉なりと、みな人かうばしくおもひよりしに、十目の見る所十手のゆびさす所、いやといはれずそなはりたる位あれば、姉女郎は格子のつとめなれども、まされる色を見うらさまとて、太夫の位にのぼり給ふ、風儀容色共にすぐれ、ものごしまでもかあいらし、道中のよそをいしどけなく、しどけなりふりおのづから、末におかれぬ餘勢あり、御よわいはいまだ二八にたりたまはぬほどなれば、さかりをまつのわかみどり、春一しほの色まして、すへ〳〵のはんじやう、たのもしくおもひやられぬ、

右三浦山口の兩三家を合せて、太夫すべて六人なり、是をあげ屋の六美人と云、

○格子女郎之部

上上吉　富　世　京町　三浦四郎左衛門内

此きみはそのかみ濃紫とて、さしも太夫の位いみじく、優艶美麗のよそをい、あげ屋の花とよばれ、しよげいの達人、何につけてもふそくなき御かたなりしが、げにや花は色殊なるを以て、かゑつて枝をそこなわるゝためし、此君の色あまりにすぐれましますゆへに、人のそねみをうけたまいて、御つとめのさはりと成ければ、過しころより太夫のくらゐを去り、かうしの内におり給ひて、とみよと名をかゑ給ひぬ、本より金玉は瓦石の内にまじゆるといゑども、そのひかりかくれなきことはりなれば、なみ〳〵ならぬ御氣しき、いとゞたぐひなく見へ給ふにぞ、今のはんじやう太夫のむかしに猶増りて、御名を聞も、富よさまとみさかゑ給ふこそ目出たけれ、

上上吉　關　岡　江戸町山口七郎左衛門内

此關岡は、今の音羽さまのしんぞうにして、しらいとさまにはひとゝせの妹なり、水あげはうすぎくと名のりて、太夫のくらいにそなはり給ひし、その容色は太夫の位にゑらばれ給ふほどなれば、くどふ申に及ばず、道中のよそをい姉女郎をうつし給ひ、座つき一しほけしきあり、殊更發明第一のむまれ付にして、一座のとりまわし、物のたまいたるつまり〳〵まで、かゆき所へ手の屆がごとし、されども少シも出すぎ給ふ事なく、いとしほらしくあいきやう有り、たとへば上手のうつつゞみのごとし、ぬけもなく、又餘りてきこゆる所もなし、しかるに山口が家にして、關をかと申名題、代々格子第一のとをり名にして、此名を缺事なし、前のせきをか身請ありて、この跡をつぐべきものなければ、その名のたへん事をなげき、此君そのころ太夫の内にて、いまだしんぞうなりしかば、是非なくその位を除き、關をかの跡をつがしめたり、前のせき岡、隨分のきりやうとさたありしが、今此君にくらぶる時は、此君のよそをい、はるかにまさりて見へ給ふ、されば今此關岡にふうりうの力くらべんには、つゞくおすまふなしといへり、

上上吉　花　世　京町　三浦孫三郎内

此花よの君は、前のみはな、花月良心信女の妹ぶんとして、正德の末の年水あげあり、そのかみ太夫の位にして、花むらさきと名のり給ひしが、わけありて去年の春よりその位を去りて、格子の内に下り居給ひ、御名をも花よとあらため給ふ、ふうぞくぽつとりとして、しかもいやしからず、道中おのづから位あり、容色はなはだうるはしけれど、くせものどものひやうばんにかけて、無理に難を付てわる口を申さば、ちと肥過たまふ色とやいはん、しかれどもてんねんの美質そなはり、たとへば八重櫻のかさなりさけるがごとし、此君を肥過たりといふは、王軒が詩に、梅太清癯桃太肥と云しに似たり、是無理に難を付て見たものなり、今をさかりの花よさま、おすにおされぬ御よそをい、殊に此君見かけにしらぬ、内しやうにすぐれたる能圖ありと、能しれる人のかたりし、されば花よの名のむかし、むらさきのゆかりをしたひ、をもひをそむる人多しとなり、

右三人の御かたは、今格子の内に下り居給ふといへども、さきにしるすごとく、各そのかみ太夫のくらいにして、いともいみじかりし御つとめなるが、すこしづゝのわけありて、その位をかゑさせ給ふなれば、是を色の三幅對と名付、あげ屋の床の飾りもの、中はとみよ、左右は關岡、花よ、此三幅對の立物は、いかなる御客の床のながめにそなゆるとも、はづかしからぬ御かたなり、是に依て別にその傳をあらわして、太夫の次につらぬるものなり、

格子四天王

上上吉　かよい路　新町　ひしや久右衛門内

上上吉　三　崎　京町　三浦四郎左衛門内

上上吉　あやめ　江戸町　山口七郎右衛門内

上上吉　半太夫　京町　三浦孫三郎内

同ひとりむしや

上上吉　吉　村　京町　三浦甚左衛門内

右五人の君たちは、きりやう殊に勝れ、諸藝の達人にして、全勢位太夫をもあざむき給ふほどの御かたなり、是に依て、世にぜんせいの四天王といふ、いづれまさりおとりもなけれども、とりわけて申ときは、しこなし三崎、色半太、もつたいかよい路、情あやめと、くるわすゞめのさゑづり、否といわれず、その中に吉村をひとりむしやとする事は、その身は格子にして、しんぞうに太夫を出し給ふがゆへなり、あつぱれ

此君四天王の人々にまさりはするとも、おとり給ふまじき御しこなし、ひとりむしやとはさもそふずさもそふず、

同若四天王

上上吉　かつ井　三浦孫三郎内
上上吉　歌川　同　じ　内
上上吉　あふみ路　三浦四郎左衛門内
上上吉　ひとへ　ひしや久右衛門内
同ひとりむしや
上上吉　うねめ　三浦や甚左衛門内

右五人の君たちは、若手にてずい一の御きりやうなり、つな、金時、ほうせう、貞光、季武とて、五人のまれものありしに、其あとつぎの若もの、たけつな、金平など、年まの四天王に一倍ましのはたらき、和泉太夫が正本に見へたり、今此五人の若手の君たちも、としまの四天王に一倍まさりて見へたまへば、すへ〳〵なびかぬ草木もあらじとぞおもふ、若四天王の御せんせい、目をおどろかすばかりなり、

同子四天王

上上吉　玉川　三浦四郎左衛門内
上上吉　八しほ　山口七郎右衛門内
上上吉　かほる　同　じ　内
上上吉　山吹　三浦孫三郎内
同ひとりむしや
上上吉　かりう　三浦四郎左衛門内

右五人の君たちは、御年いまだ二八のうちそとなれば、さしてせんせいの御手がらあらはれねど、此後年まの四天王隠居あらば、此君たち、そのあとをくろめ給ふべき御きりやうそなわりたる、見所ありと粋の見通し、びいどろの三七が目利にまかせて、子四天王とさだむるものなり、

同琴柱組十三人次第不同

上上吉　琴浦　三浦四郎左衛門内
上上吉　まき尾　同　じ　内
上上吉　りせう　同　じ　内
上上吉　から崎　同　じ　内
上上吉　初いと　山口七郎右衛門内
上上吉　初花　同　じ　内
上上吉　立花　同　じ　内
上上吉　松山　三浦孫三郎内

上上吉　とよ崎　同　じ　内
上上吉　花崎　同　じ　内
上上吉　花村　三浦や甚左衛門内
上上吉　今紫　ひしや久右衛門内
上上吉　皆川　同　じ　内

右十三人は、せんせいのほまれもつばら世に鳴所なり、たとへば琴の十三絃になぞらへ、をの〳〵其音色のひゞき、すこしづゝの差別は有といへども、しらべあわせて是を見るときは、いづれをいづれとすてがたきあいかたの所あれば、是をあげ屋の立ものとして、琴柱組と名付るものなり、尤勝れし御方としるべし、

一騎當千

上上吉　菊川　山口七郎右衛門内

此君をあげ屋の一き當千といふ、くどふは御げんのをりから〳〵、

太夫格子總名寄家分　京町　三浦四郎左衛門内

太夫　高尾
太夫　薄雲

格子

とみよ　三さき　近江路　琴浦
まき尾　利しやう　からさき　あふ坂
葉山　松しろ　いまよ　あうしう
あげまき　八重ぎり　きてう　多川
玉川　清すみ　こわた　松かせ
かりう　小太夫　野風　いくの
小よし　ときわ　京町　三浦孫三郎内

格子

花世　半太夫　かつゐ　歌川
松山　とよ崎　花ざき　長谷川
若葉　大吉　花里　松島
くも井　大さき　式部　山木
山吹　かつ浦　清川　瀧川
ゑ川　夕ぎり　夕なぎ　初桐
みくに　京町　三浦や甚左衛門内

太夫　三浦
格子

吉むら　花村　うねめ　花ぎり
八千代　重浦　江戸町　山口七郎右衛門内

太夫　音羽
太夫　初菊
太夫　白絲

格子
關おか　あやめ　菊川　初絲
たち花　はつ花　千とせ　八しほ
萬太夫　かをる　初雪　わこく
いこく　小ざつま　松かせ　小にし
八くも　八千代　新町　ひしや久右衛門内　敷島　高間

格子
かよい路　ひとへ　今紫　皆川
をのざき

以上

右格子のれき〳〵、めい〳〵に評判の品を書わけ申上候へども、すべて格子の御かたと申は、かぶろ立より、そのよそをいの殊にすぐれ給ふにあらざれば、あげ屋の水あげをいわふ事なきに依て、格子のゑらびに出され給ふ女郎、一人としてあだなる御かたなし、今四天王琴柱組につらねしは、その中にしていちじるしきをあぐるのみ、されば四天王琴柱組にもれ給ふ御かたとても、是皆上々きつすいの御きりやうなれば、くどふ申はやぼらしく、たとへ其中にて、せんせいはすこしづゝの甲乙有とも、盛衰は是時の仕合しだいにして、女郎のおとれるにはあらずとしるべし、しかるに野暮は深色のある所をしらず、みだりに女郎の身だいを批判し、衣裳臥具のよしあしを論ずるたぐゐ多し、是もんもふの至り、しよわけの道をしらざるのはなはだしきなり、こゝろみにいづれの女郎なりとも、あい方にとりて、そのきやくと成りたる人、一せわやきてもみ立て見給ふべし、たちまち世上の目に立程の全盛をあらわしたまはん事、只客の手のはたらきによるべきなり、王昭君が胡國へ行、中將姫に一代夫なかりしとかや、美人も時にあわざるためしすくなからず、少石公曰、粹にあらざれば美人をしる事あたわずと、美人の美人たる所は、只色と情のふたつにあり、色といふはすがたの色を云ふにあらず、情とはかの一つの首尾をいふにあらず、此道をさとるを粹と云ィ、此理をわきもふるを、わけ者と云、しよわけをみがく人さまたち、それ是をかんが見給へ、

あげ屋の巻終

吉原丸鑑第一終

吉原丸鑑第二

△散茶壇茶之部
茶色香仙組三十六人　次第不同

夕なぎ　江戸町　あづま屋三之丞内
あふ夜　同町　大つ屋庄右衛門内
あふ坂　同　じ　内
吉十郎　同町　かづさ屋治右衛門内
高松　同町　かたばみや市右衛門内
金太夫　二丁目　兵庫屋庄右衛門内
もしほ　同町　さかい屋市兵衛内
はつ風　同町　てうし屋長兵衛内
松がゑ　同町　大松屋市郎兵衛内
今川　同　じ　内
しのゝめ　同町　つるつたや庄次郎内
たじま　同町　小松屋源右衛門内
玉かづら　同　じ　内
戀山　すみ町　萬字屋勘兵衛内
柏木　同町　ひし屋新助内

高はし　同町　きつかうや三郎右衛門内
鳥　山　同町　ともゑや喜右衛門内
いこく　同町　山屋助右衛門内
すが原　同町　山口屋與兵衛内
小むらさき　同町　ひし屋六兵衛内
小式部　京町　字桐屋三右衛門内
みやこ　同　じ　内
くれ竹　同　じ　内
中倉　しなのや太左衛門内
千壽　新町　長崎屋平左衛門内
小山　同　じ　内
高間　同町　かなや庄五郎内
しら梅　同町　あふみ屋助三郎内
あふ世　同　じ　内
花かづら　同町　大びしや久右衛門内
はつ紫　同　じ　内
花鳥　同　じ　内
櫻川　同町　桐びしや新四郎内
八くも　同町　山本屋助右衛門内
からさき　同　じ　内
ともゑ　同町　巴屋三郎右衛門内

以上

右三十六人は、當世茶こくのまれものなり、凡和歌に六義あるがごとく、女郎に六ッの見所あり、第一に情、此情は意氣知をさしていふなり、第二にしゆにんあいきやう、第三にしよげい、第四は座はい、第五は風儀、第六に容色なり、是を女郎の六德と云、粹のまなこを付る所、此六德にあり、上上極上の品、仍而見わくるゆゑんなり、又八病とて、八ッのいみ事あり、六德八病の議論、是を見わくる魂膽は、粹法三樂の書にあらはせり、事ながきがゆへに爰に略す、抑今ゑらびあぐるところの妓君たちは、茶こく數千のうちにおゐて、各ひときりやうそなわり、粹の見所否といわれぬ所あるを以て、都合三十六人ぬきんであつめて、香せん組と名づく、猶その評判、その家々の所におゐて是をしるす、予がおよばざる所は、後の粹さまをまつものなり、

江戸町　中の町より入右がわ家並、

上上　○さん茶　ひしや吉兵衛内
　　小ざつま

おでやつたしこなし、さつまのかみ只のつしりと仕出し給ふ、さればとてもつたいぐるしく、一座などをもくれたまふにはあらず、容しよくしよげい、此家第一の筆なれば、くどふ申にをよばず、

上上　田　む　ら
ようしよくの美は云におよばず、一座酒ぶりまでも上手なれば、酒の上の田村さまとは申なり、なさけの道もつたなからず、いかな鬼神のよふなおとこも、此きみのなさけにひとたび逢ては、千兩の金もあめあられと打こんで、たまる物でないとのことじや、

上上　千　さ　と
千里の外までも、君がうわさはかくれなし、過しころ長崎よりかゑりし人のはなしに、江戸町ひしやの千里は能女郎成と、丸山にてとりざた有しよし、さても名の高い事とがををりました、

上上　市　村
きりやうあつばれ、此家の一むらなり、まことに小ざつま、田村、千さと、一村の四人は、此家の四天王なる物をや、

總女郎

金太夫　小太夫　大　ふ　梅がへ
はつね　山　吹　夕ぎり　吉　村
玉むら　藤　江

○さん茶　藤屋太郎兵衛内
此ふじ屋は、前方向がわの末にありし、その見世は、今みやうが屋にかわりて、ふじ屋爰にうつれり、此所は前方がたばみや市右衛門が見世の跡なり、

藤　波
ふじは此家の名題、それを此きみに名付したるは、いかい亭主がじまんなり、客は舟、女郎は波、なみ能きやくをのぼせて、客又波にこがるゝとは、此君のためしなるべし、

上上　井　づ　ゝ
しなかたち生れつき先よし、風吹ばをきつしらなみとよみて、心中をたてたりし、その名をしたいて井筒と名のり給ふ、いきじの立物、むかし男はしらず、今の世の粹たち、あふてよふすを見給ふべし、

上上　正　つ　ね
小刀の銘にさへ、正つねと云はいかい切物なるぞかし、あつばれ出來もの、めい作と見へました、たれさまのおさし料になされても、はづかしうござりませ

ぬ、

上上　八重ぎく

菊はひとへきへしほらしきに、八重菊の今をさかり。なる見事さ、まがきの色は春のはなにもまさりぬべし、以上四人は此家の四天王なるぞかし、

總女郎

かわち　いわ崎　ふじ岡　小よし

まき岡　つま川　わか松

○さん茶　松ばや半左衞門内

上上　松風

よいとは云もくだなり、むかし行と云し粹めが、須磨の浦にてふかうなづみし女郎、かたりつたへてうわさはきけども目に見ず、今此女郎に色をくらべたらば、どう御座ろうの、

上上　染山

此きみはしゆにんあいきやうありて、見る人ごとにいとしがらぬと云事なし、まことや廿六夜をしんじんして、愛染の染の字を申をろして、そめ山と名のり給ふ、ことわりかな、

上上　大すみ

此きみの部屋は大二階の隅なれば、大すみさまと申やらん、否そふではなし、此女郎能きやくあまた有て、福人成ゆへ、いつの物まへにもつかゆる事なく、はらいが大すみじやと、小間物屋の介がかたりし、女郎のしんだい能は、よき客あるゆへ、能きやくあるは、きりやう能ゆへとしられぬ、

總女郎

大吉　大はし　小よし　よし松

よしずみ　川ずみ　花月浦里

半太夫　みやこ　藤江　すみのへ

市むら　つま木

○むめ茶　かづさや善四郎内

此家を小かづさやと云、むかふに大かづさ屋あればなり、

上上　をりゑ

どふぞおりゑて、御げんもがなとねがへど、お隙のないにこまつたと人の申あへる、ほんにきついおはやりそふな、お隙のないは、御きりやうのよければ こそ、

上上　あきしの

あつばれ出來もの、かづさやが小家より、日の出の女郎と皆人のうわさ、すへたのもし、

總女郎

八重梅　みよし　みなと　しかの

をり岡　かつ山　るい

○むめ茶　巴屋權兵衞内

此家を小巴屋と云、此ともへ屋は、前方二丁目小松屋がとなりに有りしが、過しころより此所へ見せなうつしぬ、

上上　ゑもん

ゑもんけだかく引つくろい、づんと出かけしよそをい、あつばれ見事、此家の一の筆なるもにくからず、

上上　玉かづら

紅顔玉のごとく、心はしんによのたまかづら、此君にかけられては、いかなる客もはなるゝ事なし、されば日にそいはんじやう、ひく手あまたと申ひようばん、

上上　はつ梅

美麗のすがた、にをやかにして梅のはつ咲、初むめさまとはよふ付た、お名にをとらぬ女郎と、皆人のうわさかくれなし、

總女郎

小太夫　はつせ　いとき　白井

八重はな

○むめ茶　山城屋太次兵衞内

上上　音羽路

をし立先見事、あふてなさけのとをりもの、扨又當町山口が家にして、音羽と云ふ太夫あり、太夫にあらぬ女郎、太夫の名をそのまゝとりて名のり給ふは、どふやら太夫のにせをつかひたがるよふにて、つたなく見ゆ、しかるに此女郎は、すぐに音羽となのり給はず、路の字一字をくわへて、音羽路と名のり給ふいとよし、是太夫とその名を別にして、一ぶんのほまれをあらわしたまはんとのおぼしめし、さりとは御きりやう、山城屋が家にして、上上の一の筆とするもにくからず、

上上　きてう

きてうにはかけられしと云しは、元祿時代のはやり言葉、此きてうは、きやくをかけると云事なく、いかにもすなをにもてなせども、きやくの方からかゝつてくるは、是ぞふしたわけぞ、おかさんせと云ほどかあいらし、

上上　道しば

小づくりにして、きつとしたとりなり、此家にてわか手のすい一、山城が内のしろねづみなり、はんじやう又ならぶものなし、

上上　かつの

かづの寶をつくしても、此君の情にはみぢんもおしうないと、あふ程のきやくしゆのおもひ入給ふ、是第一すぐれたる所ありとしるべし、粹さまたちいわずとも、

上上　はせ川

見るからいさぎよきふうぞく、底眞ごふもいわれぬ所あり、右五人の内、音羽路、きてう、かつの、はせ川を、此家の四天王とし、道しばをひとりむしやとさだむるものなり、

上上　玉かづら

上上　八はし

此兩君、おの〳〵ひときりやうある女郎なれば、此家二ふく對の立物とするものなり、

總女郎

とこよ　玉川　梅がゑ　梅ぞの

初むめ　松風　かをる　かつ山

かよいぢ　浦里　八重ぎり　夕ぎり

きさらぎ　まんじゆ　いくしば　むらさき

小ざつま　小わかさ

○むめ茶　かたばみや三右衛門内

上上　いこく

女郎の見立と、つばの好みとは、人々の物すきにて大きにかわると申事候へども、それはよのつねのことわりなり、上作のつばは、どこへ出しても上作物、誰が見てもわるいと云ものなし、此女郎もそのごとく、來聘の朝鮮人に見せても、かぶりはふらぬ御きりやう、さすが當町の名主どの〻、いこくと名付て、立もの〻一の筆ともてなし給ふも尤々、

上上　いまよ

いまの世のはやり女郎なれば、今更申もくどい事ながら、よふしよくとりなり、人のすくふうぞく、さりとはいま世さまじや、

上上　千とせ

一日のゑいぐわに、千とせをのぶると云事、まことなるかな、此君の手枕に艶顔を打ながめて、よねんなき一夜のたのしみ、も〻とせの苦をわすれて千とせをのぶる心地、いかにもそふじや、

上上　九重

よそをいは、八重櫻の咲みだれたるごとく、けふ九重の花にもたぐへぬべし、以上四人を、此家の四天王とさだむるものなり、

上上　わこく

是又四天王にをとらぬきりやうなり、これを此家のひとりむしやとするものなり、

總女郎

かつま　千さと　政よ　松しま

大くら　わか村　いくよ　もんど

かよいぢ　市川　ゑぐち　みよし

いく島　いづく

太夫格子　山口七郎右衛門内

右太夫格子のれき〳〵、殘らず此書の第一あげ屋の卷に是をしるす、

○むめ茶　萬字屋喜右衛門内

上上　小げんじ

うつくしきかほばせ、やさしきふうぞく、ひかる源氏のおさな顔を女にして見る心地、小源氏さまとは誠なるかな、

上上　花の

はなのかほばせ、見るから心もときめきするばかり、あふてなさけにあづかる人は、他愛をうしなふとのおもひ入、きついものじや、

上上　とみ山

此君のはんじやう、をそらく萬じが家の富さまなり、御きりやうしこなしどふも申されぬ、

上上　かせ山

過しかぐ山のゆかりをしたいて、今かせ山と名のり給ふ、あつばれ御きりやう、かのかぐ山におとりたまふまじ、うるわしき御聲、一曲一ト ふしはりあげて、三味せんのかせ山しよもふ〳〵、

右四人を此家の四天王とす、

上上　小太夫

上上　せき崎

右兩くんも、四天王にならびて、ともにをとらぬ女郎なれば、是又此家二ふく對の立物とながむるものなり、

總女郎

わかよ　中川外由　から梅
さごろも　からはし　花ぎく　とこよ
とみよ

○次　ひようごや甚右衛門内
半太夫　みちのく　つしま　高松

江戸町右がわ家並終、

江戸町　中の町より入左がわ家並初、

○むめ茶　あづまや　夕なぎ
上上吉

坂東の八ヶ國をかたどり、あづまやが家にして、八ヶ所の座敷をかまへ、八人の美君をゑらびてその座敷のあるじとす、その中に此夕なぎは、きりやう殊の外にすぐれ、しよじにつけてもつたなからず、是によつてかせん組の内にのせて、上上吉とするものなり、

小太夫

上上

此君は、此あとのひようばんより其名たかく、いまにかわらぬはんじやう、此家のたてもの、としまのしこなしどこへ出しても、

よし岡

上上

すがたたをやかにして容色うるわしく、小太夫さまにならびて、又よし岡のきみとしるべし、

よし清

上上

なりよしふりよし聲もよし清さまと、皆のうわさもいつわりならず、御きりやうのみか、御しんのそこまでよしきよさまと申ことじや、

富やま

上上

富山は富士山の略語、是あづまの名山なり、外につゞく山なしとの、てい主がじまんに名付しもことわり、そのほまれ名にしをふあづまの富山なれば、ひようばん今更云にをよばず、

みやこ

上上

あづまのやどにみやこと名のりたまふは、なみをはなれて、ひときははんじやうのかたとしられぬ、なさけの道もいとやさしくましますにぞ、ある人のうたに、

いまぞしる情の道をたづねきて
あづまのやどにみやこありとは

清岡

上上

よしをかのゆかりか、清おかさまと名のり給ふ、わが

手にてすい一の仕出し、月のかほばせいさぎよく、むかふ心もきよをかさまとは、ほんにそふじや、右七人に花むらをくわへて八人なり、是をあづまやが八人衆と云、よしやそのさきはいわずとも、

總女郎

たかせ　高くら　こと浦　丹しう
白ぎく　青柳　よしずみ　あやめ
はつせ　平をか　ふじゑ　淺づま
松がへ　半太夫

○さん茶　大津や庄右衛門内
あふよ

上上吉

此きみはしんぞうの時より、御部屋持の名にたかく、今かせんぐみにゑらばれ、江戸町ずい一の名君、髪の結ぶり一トふうあつて、中の町の道中、やつこめきたる所あり、一座さら〳〵ごさばけて、少もおもくれず、琴の一曲たぐひなき音色をしらべ、第一酒つよくして、なにほどの酒もりにもいたみたまふことなし、ある人初會の時、かゑるさのをりふし、うらを約束せんとて、枕本にありし硯ばこのふたに、

手枕は夢かとばかりおもほへて

又のあふ夜をいつとさだめん

とてんがう書したまふを見て、あふ夜さりあへず、いつ〳〵きさんせ、かならず待申さんとて、

ちぎりをく時したがはずかよひこば
あふよは夢もへだてざらまし

と返ししたまふよし、いとやさしき御じんとしられぬ、

あふ坂

上上吉

此きみは、あふ夜のきみのいもとにして、せんせい姉のあふ夜におとり給はず、さればこそかせんぐみの内にゑらばれ、姉妹もろともにほまれをひとしくしたまふ、お手がら〳〵、中におよばず、

大里
上上　大すみ
上上　清はな
上上　花よ

右四人いづれもまさりおとりなき女郎、是を此家の四天王とさだむ、あふよあふ坂の兩君にさしつゞきて、せんせいもつばらの御かたなり、

總女郎

關の井　松風　若紫　松がへ
たつた　をりへ　みちのく　都路
近江路　坂た　玉かづら　よし清
みちしば　さもん　とこよ

○さん茶　玉屋十兵衛内

上上　若千代

いつ見てもわか〳〵としたふうぞく、千代もかわらぬよそをい、誠におもかげのかわらで年のつもれかしと、よみし歌の心にもかない給ふ、ようしよくは玉やの立ものなれば、云におよばず、

上上　きむら

座付をとなしやかにして、御きはい能、琴三すじにもつたなからず、是此家の上上とはちよつと見ても、

總女郎

さんしう　かぐ山　外山　いくよ
萬太夫　千代崎　花村　せきしゆ

○むめ茶　かづさや次右衛門内

上上吉　吉十郎

容貌すぐれてうるわしく、しよげいしよわけの達人、さるによつて、其はんじやういつも上上吉十郎さまとて、かせんぐみにゑらばれ、そのほまれかくれなし、若手なれば末なをたのもし、

上上　江口
上上　山の井
上上　半太夫
上上　みやこ

右四人吉十郎さまにつゞきて、しこしなし家の立物なれば、此家の四天王とさだむるものなり、

總女郎

高くら　大吉　小ざつま　こと浦
さくら木　山川　市十郎　ときわ
いこく　九重　わか野　夕ぎり
若紫　野むら　わか草　ゑにし
まそで

○むめ茶　天滿屋仁左衛門内

上上　小太夫

さりし三浦の小太夫は、よし原三美人といわれしきりやうなりし、此きみもその小太夫にくらべんには、おさ〳〵おとりたまふまじき容色、此家の一の筆なれば、くどふは云にをよばず、

上上　大すみ

ちよと見る人も、先目に付はこのきみなり、艶顔あいきやうあつて、おのづからすみにおかれぬもつたい、年まのまつふくら、むまい所多し、

上上　江口

此きみのしこなし、西行ほうしもとんと腰をぬかし申べし、あいきやうの笑貌どうもいわれず、是笑口のきみと云べし、

上上　清はな

しやんとしたすがた、水仙の花瓶に立たるがごとし、見るから心さわやかなり、清花と名のりたまふ御名によそへて、ひとしほ見事々々、

右四人を此家の四天王とす、

上上　柏ざき

此きみを此家のひとりむしやと云、ある人此君をかしわ崎と名付しはいかにと問しに、此君あまりにはやらせたまふゆへ、一度に二人三人づゝ客しゆつどい來り、貫やるまいの口説あれば、あとより來るきやくには、大かた名代を出して一座をすませ、床まへにちよつと、かしわざきさまと申事じや、

總女郎

大くら　清わら　若紫　つねよ
かうばい　きよずみ　川せ　八はし
小式部　小わた　かをる　はつね

○むめ茶　巴屋源右衛門内　豐浦

上上

容色つやゝかに、しこなしをとなしく、さすが此家の一の筆、いやといわれず、

上上　あふさか

此きみの御事は、ゆくもかへるもおふ坂さまと、巴屋が内をしるもしらぬもひやうばんのうはさよし、そのほまれかくれなければ、能所くどふいわずとも、

上上　つま木

初くわいから、しつぽりとしたしなし、我やどのつま木さまかとおもふ心地に、びつたりと客の打こむ事、是此きみのとくぞかし、御きりやうしよじとかふいわれず、

上上　紅梅

嬋娟たるかほばせ、くれないの梅となのり給ふもにくからず、ふんぷんたるゑりの香は、いづれもおなじ

事ながら、とりわけ此きみの忍り本は、むまいにをいに、おぼへず人がひかれますとのうはさ、

右四人を此家の四天王とする物なり、

上上　金　山

是此家のひとりむしや、はんじやうとかふいわれず、ともへ屋がこがねの山と名付たるもことわり、去ながらびんぼうものは、此きみのかなづるにとりつく事成がたし、誰でもまぶにほり付て見たまへかし、

總女郎

とよずみ　しげ山　月　里　浦　里
しげのい　わかさ　ときわ　はつ絲
はゝ　山　梅がわ　花かづら

○むめ茶　ひょうごや仁右衛門内

上上　大　く　ら

下戸のたてたるくらもなしとは、今こそおもひしられたれ、ひやうごやが裏の大くらは、此きみの酒ぶりよく、あまたのきやくをのみこみ給ふゆへなりと、皆人のひやうばんありし所に、かたわき成おとこ罷出、否此きみのはんじやう、酒ぶりばかりではござりさせぬ、第一おちやがよきにとの事じや、

上上　わ　か　竹

此さきの若松さまのゆかり、とりわけ若竹のたよたよとして、すなをなる御よそをい、三すじ一ふしもすぐれて、枝葉もさかへしげれ〳〵、しげるほど能きみなるとぞ、

上上　ふ　く　い

御し〻つきふつくりと、見るから福井さま、此家のふくのかみ、いつ見ても御機嫌のよいかたじや、

上上　わ　か　さ

わかいがきどくとはふるいことばながら、此君のしこなしがをおりました、日ましにはんじやうどふもいわれず、以上四人は、今此家四天王とさだむるものなり、

總女郎

酒　たいこく　政つね　小　林
わか草　ひとへ　せんよ　千　山
つま川　つま木

○さん茶　さくらや彦右衛門内

上上　山　木

此きみはさくらやが内の一の人なり、ひとりもひと

りがら、大ぶんの高金をとりこみ給ふゆへ、山きのはんぐわんかね高さまと申となり、

總女郎

岩　尾　いこく　玉かづら　わこく
きよ玉　ささらぎ　大　和　宮　崎
江　川

○局五寸　い　づ　〻　や

から松　りせう　きん山　よし川
かしわ木　清はし　わか松

○むめ茶　みやうがや吉右衛門内

此みやうがや、角町へ宿替のつもりにて、彼冬此所のみせしまい申、いまだ角町のみせさだまり申さず候ゆへ、ありしまゝにて當分此所にしるしなき申候、

上上　と　こ　く　ら
上上　大　よ　ど
上上　大　ふ　じ
上上　長　門

右四人を此家の四天王とさだむ、此みやうがやと申は、元來すみ町の内に格子ありて、但馬數馬など云し名君、あげ屋の道中、三浦山口とぜんせいをあらそいしに、但馬はつしんありし後、まもなく此格子やぶれぬ、ちかきころ此所に藤屋が跡をしゆふくして、ふだ〻び爰に新茶の見せをひらき給ふ、されば家がら、今も猶ふうぞく能所のこれり、とこくらさまは、さりしとこよの君のゆかりとかや、大よど大ふじ長門の三君も、過しころまで西田屋にて、せんせいのきこえ名高かりし君たちなり、西田屋なくなりて、此家にうつり給ふ、今もかわらぬはんじやう、此家にて四天王なるぞかし、

上上　か　よ　い　路

此君はみやうがやが内にしてずい一のわかもの、きりやうのひとりむしやぞかし、かほかたちゆふにやさしくほつそりとして、とりなりかあいらし、座付おとなしく、忍がほにあいきやうそなわれり、いまだ御年わかくましますゆへ、御もの云ィ少シはや言にきこへたまふ事あり、今すこし御ものごしにくらゐ出來候はゞ、又なき上上吉、いか成大名のかよい路になすともはづかしかるまじ、すへ〳〵のはんじやういとたのもし、珍重々々、

總女郎

みちのく　小太夫　小　山　ふ　じ　村

ふじおか　みやこ　清くら　かめ山
くらの介　八十郎　あかし

○むめ茶　かたばみや市右衛門内

上上吉　高　松

此かたばみやは、過しころまで當町の入口、ひしやがとなりにありし家なり、此見せは西田やと申侍りしを、西田屋をしまいて、かたばみや爰にうつれり、さるによつて、今も西田屋の女郎多くのこれり、此きみはそのかみより、そのほまれ名に高松ときこへて、今にときわのはんじやう、かせん組にゑらばれたまへば、しよじはいわずとも、

上上　を　り　ゑ

見せつきのうるはしさ、どふもいわれず、一座して猶よし、床へ入て目かれせず、是上上の一の筆、いかにも〳〵、

上上　花　村

見事なること爛漫たる花のごとし、見る人おぼへず足をとゞめずと云事なし、花村行客を留と云、古き詩の言葉にかない侍る、

上上　か　う　梅

色ことなるよそをい、まがきの内に坐したまふ氣しき、鉢植の梅と云ともにくからず、をりゑ花村紅梅を、此家の三ぶく對とながむるものをや、

總女郎

花かづら　立　田　みやこ　大いそ
松　風　初　風　花　鳥　高くら
ふじのへ　ふじ村　もなか　三　五
いさわ　戸　澤　玉しま　をの川
かつ井　きてう

江戸町左がわ家並終、

吉原丸鑑第二終

吉原丸鑑第三

二丁目　仲の町より入左がわ家並、

○さん茶　泉屋彌右衛門内

上上　市　野

門前に市をなすは此君のはんじやう、さてこそ御名も市のさま、二とはさがらぬ御きりやう、あつばれあゆばれ、

上上　か　つ　ら

かつらのまゆづみにをやかにして、丹花の口もとかあいらし、此君ははんじやうにて、亭主も金はわく泉屋と聞へし、

總女郎

松しま　錦　木　もしほ　八重がき
しが崎　かつ山　かぐ山　ていか
市はし

○さん茶　桐屋半左衛門内

上上　あ　ふ　よ

戀々て君に逢ふ夜のうれしさ、どふもいわれぬ床の内、上上なさけしりと皆人のうはさ、うそならばあふて見たまへ、

總女郎

ふじ村　關　野　吉をか　つねよ
かつら　しき島　ひらの　ふじの
外　山　せんよ　みなと　岩　崎
戸　和

○さん茶　兵庫屋庄左衛門内

上上吉　金　太　夫

此きみはかせんぐみの一人なり、ふうぞくのつしりとして、ようしよくうるわしく、三すじのしらべはいふにおよばず、琴のつまおと殊にすぐれ、聞事見事、凡人は云におよばず、いかなお寺の和尚さまでも、此君にあふてからは、けさころもをしまわるゝにきわまつた、

上上　り　せ　う

容色先にくからず、とりまはし利はつなり、金もちのをやおさま、ひぞうのむすこどのに、智惠をつけんとおもひたまはゝ、此女郎にはつ尼あげて、もんでもらい給へ、文殊まさりの御利しやうさま、たしかな事で

ござる、

上上　　かを　る

ぼつとりものゝしなものなれば、見る人戀をふくまずと云事なし、松の内と云上るりに、かをるゆかしきをく座敷と云しも、此君をしたふ言葉なるとぞ、

上上　　夕ぎり

巫山の神女のあしたには行雲となり、暮は行雨となると云し、夕霧と云もそのたぐいか、白日の屋梁をてらし、明月のひかりをのぶるよそをいあり、楚の襄王にあわせてやりたい、

上上　　松井

りせう、かをる、夕ぎりに、此松井をあわせて、此家の四天王とす、いづれをとらぬ御きりやう、過じころより能きやくしゆありて、身請の事などのぞみたまふよし、やがて〳〵御吉事を、まついさま〳〵、

上上　　あふ岡よし

上上

此兩君、四天王につゞきておとらぬ御きりやう、此家二幅對の立ものとするなり、

總女郎

まつ風　清はし　吉清　金をか

小ざつま　瀬川　九重　半太夫

よし松　はやざく

○さん茶　四日屋金兵衛内

歌　川

上上

なり能鳥は聲もよしと云たとへ、誠なるかな、此きみのうつくしきすがたに、うつくしきこわ色、一トふしのうた川さま、小うたのみかわ上るりまでも、

上上　　は つ山

はつ雪のふりつむ山か、しろくたへ成御はだへ、見るからきゆる心地、いつ見てもめづらしいはつ山さまじや、

上上　　藤の井

野田の藤はかくれなき名所、此藤の井は此家の名物、御立すがたのびゝとして、しなやかなるふせい、さながら藤のはなの風にしなへるがごとし、此きみにまかれてねてからは、起る事がしにくいとはきついものじや、

上上　　ときすみ

以上四人を此家の四天王とす、ときすみと名のりたまへばたけき武士の名のりのごとし、あつぱれいきじのつわもの、いかなつよい大じんでもきて見さんせいばか合にがゝつては、まけるものではござんせぬ、

總女郎

田村　とこよ　吉をか　松山

さくはな　ひとへ　若むら　かもん

さゝ木

○さん茶　桐屋武兵衛内

此桐やは、前方中松やと云し家なり、今も松やの女郎入こみてあり、

上上　　と も へ

むかし木曾殿のおもひものとも共と云し女はゝうでのちから世にすぐれ、そのほまれかくれなし、今此ともへは、色となさけのちからもち、いかなおとこも此君によせあわせては、あし腰が立ませぬ、

上上　　松風

ときわの松風、いつもかわちぬはんじやうは、朔日から晦日まで、お隙と云事なし、きりやうよく人あいよし、あふて見たくば、三十日もまへ方より約束を云こみ給へ、

上上　　三さき

みさきをはらつて出たまふよそをい、あつぱれ女郎やと見へし、此家の四天王なれば申もくどし、

上上　　よし村

以上四人を此家の四天王とす、いづれをとらぬ御しこなし、すがた心もよしむらさまとは、どこで聞ても、

上上　　みなへ

花はさかりに、月はくまなきをのみ見る物かは、ちり過たる庭のけしきこそ、見所はあるなれと云おきし兼好は、いかいわけしりなり、此きみさかりは少しすぎさせ給へども、なを見所のある女郎、されば此家の一人むしやとするものなり、

上上　　小太夫

上上　　小五郎

四天王にならびて、此兩君又なき御しこなしゆへ、是を二幅對の立物とす、

總女郎

みやこ　かをる　わか草　玉川

近江路　岩崎　櫻木　かるも

小きん　竹川　皆川　あふ坂
島の介　折岡　白たへ　萬よ
小林

○さん茶　堺屋市兵衛内
上上吉　もしほ

もしほたくなる夕けぶり、たへまををそしと約束して、つどい來る客しゆ、毎日さりとはお隙なし、誠に此君、かせん組の一人なる物をや、

上上　坂倉

此家にてもしほにつゝきて、此坂倉あつばれ御きりやう、諸藝までも、おそらく此家のたからぐらなるべし、

上上　なにはこにし
上上　さこん
上上　清すみ

右四人を此家の四天王とす、いづれもまさりをとりなければ、めい〳〵評判申におよばず、

總女郎　みよし　關の井　ささらぎ　かしを
みはし　みちしば　坂田吉崎
はじとみ　高くら　てうじや　長兵衛内

○さん茶　初風
上上吉

此君はかせんぐみの一人なれば、ようしよくしよげい、茶こく上上吉の女郎、評判くどふ申におよばず、

上上　ま袖

此君しんぞうのころより、いかふ人々のほめた女郎、今丸袖のま袖さま、どふもならぬむまいさかり、吸付ほどいとしらし、

上上　りん山

りん〳〵りんとしたるとりなり、りん山と名のりたまふは、りんぼうの山をおす心か、あまりきついお名じや、否けふではなし、林山と云字を書て、はやしの山とよめり、しげりてよきと云心、

上上　小にし

白粉の名物を小にしと云、此きみのすがほ、いかな名物の白粉も、しろきをはづるばかり、むまれ付のすがほの小にしさま、ま袖、りん山、小にしの三君を、此家三幅對の立ものとする物をや、

總女郎
玉澤　今よ　よしの　錦木
萬太夫　道しば　玉川　若絲
しら梅

○さん茶　巴屋仁右衛門内
此ともへ屋は、向がわにありしが、過しころ爰に見せなうつしぬ、

上上　半太夫

ともへ屋が家の立物、一座しこなし、若手の女郎のおよばぬ所あり、此家にては太夫さまとも申べけれど、御つとめの品、そのくらゐにあらざるゆへ、卑下して半太夫さまと名のり給ふ、いとよし、

上上　かすが野

かすが野のわかむらさきのすり衣、君にしのぶの客しゆ、毎日たゆる事なし、そのせんせいはかぎりしられぬどのひやうばん、うゐかうむりの平さまにあわせたし、

上上　佐々木

佐々木はむかしよりさきがけの家にて、四郎高つな、三郎もりつな、いづれも軍のせんぢんして名をあげし由、源平盛衰記に見へました、此君もそのごとく、いつの物日節句にも、人さきに約束して、中ノ町へせんぢんをなさるゝ、お手がら〳〵、

總女郎　關の井　みはる　庄太夫
つしま　三五　はなよ　たき川
いわみ　今わか　ともへ　とこよ　青柳
きん山　中川

此中にも、ともへは若手のすい一のきりやう、追付此家の上の君と成り給ふべし、見たまへ〳〵、

○さん茶　櫻崎　佐渡や　六兵衛内
上上

はなやかなるよそをい、櫻ばなの咲みだれたるがごとし、名のらせたまわずとも、是さくらぎさま、

總女郎
高はし　さぬき　三ふね　三はな
さごろも　あさか　かしは木　山しな
かしわ崎　松しま　梅がへ

○さん茶　若山　津の國や　佐兵衛内
上上

かほばせはなのはじめてひらくがごとく、まゆずみ

は新緑のもへ出るに似たり、わかやか成けしきを、春の山邊になぞらへて、わか山さまとはげにそふじや、

上上　　ゑ　　も　　ん

此君の名高き事、もろこしまでもかくれなければこそ、たゞいゑもん名高くとも、おもひの末は石に立と、かんよう宮のうたい御すもじ、

上上　　つ　　し　　ま

此君はいきじを第一にみがき給ひ、いき方心にそまねば、いかな大じんをも、ちつともわるびれずふり付、わけよき客をば、びんぼうをもいとはずいたまわず、さりとはいき方よければとて、意氣つしまと云よし、御きゐやうの女郎としられぬ、

あふしう　初　紫　はつ山　巴
わかさ　山じな　外　山　たんしう
玉　川　清しげ　山　木　吉　村
小わた

○さん茶　津の國や興兵衛内　あ　ふ　坂

此家におゐて此君の御事は、しるもしらぬもあふ坂の、かくれなき女郎、としまのしこなし、ごふもいわれず、

上上　　お　　り　　得

見事なる仕出しを花にたぐゑて、あるきやくのよめる、

ひとゑだを折ゑて床のながめにも
あかずねびきにしたき君かな

此うたにて御すもじ、

總女郎
あかし　たつ田　近江路　花　月
はじとみ　おりをか　きてう　小　櫻
はせ川　中しほ　さんしう

○さん茶　巴屋五左衛門内　と　も　へ

上上

此家にて上上すぐれたる女郎をゑらび、亭主が家名をゆるして、代々此家の立ものとす、ともへ屋が家のともへさま、くどふ申に及ばず、

上上　　中　　倉

容顔うつくしく、ふうぞくをだやかなり、毎日のはんじやう、亭主が中倉さまとも云べし、

上上　　き　さ　ら　ぎ

出すぎず、入めになし、むつくりとしたよいしこなし、たとへば中春のてんきの、あつからずさむからずして、のどかに心うきたつが如し、きさらぎさまとは能付ました、

上上　　清　　ず　　み

いたゞきよりきびすにいたるまで、きよらかにしてすきとをるが如し、げに清ずみの君なるをや、

上上　　小　　太　　夫

ゆふにやさしきふうぞく、又ある物でなし、此家にて、巴、中倉、きさらぎ、清ずみを四天王とし、此小太夫をひとりむしやとするものをや、

總女郎
ふじしろ　なると　清　原　こきん
こもんど　さもん　をぎの　きてう

二丁目左りがわ家並終

二丁目　中の町より入右がわ家並

○さん茶　是を小松やと云、松　屋　源　右衛門内

上上吉　　た　じ　ま

上上吉　　玉　　か　づ　ら

右兩君は、きりやうすぐれてしよげいに達し、意氣知よくしこなしよし、是に依てかせんぐみの中にゑらばれ、上上吉のほまれかくれなければ、ひやうばんくどう申におよばず、

上上　　萬　　太　　夫

千にすぐるゝを英と云ゝ、萬にすぐるゝを雄と云、此君は風流の英雄、千萬人の中へ出しても、すこしもをくれをとりたまふまじきしこなし、まことに萬太夫さまじや、

上上　　吉　　清

容色美麗にして、しこなしも又よし清さま、せんせいも今をさかり、あつばれ見事、此家の御立ものとはだれが目にも、

上上　　か　ら　は　し

しよわけずい一、かけひきの上手、やぼでもすいでも此君にかけられては、のぼらずと云事なし、此國の人は云におよばず、ちんぷんかん唐人でもきて見さんせ、見事にかけて見せんとの御事、さてこそ御名も唐橋さま、かけてのぼらぬ人なしとぞ、

上上　　筒　井

ふりわけ髪のむかしより、只人ならぬよそをい、つゝ井さゝの水あげとて、せいろうつみしも、おもへばきのふけふの心地、いつのまにかはおとなしく、今は此家の四天王、御きりやうと云ゝ、しこなしと云ゝ、のこる方なき女郎なり、

此家にて、但馬、玉かづらは上上吉、かせん組にえらばれたれば、これを風流の兩大將とし、それにつゞきて、萬太夫、吉清、からはし、筒井を四天王とするものなり、

總女郎

岩さき　こと浦　しらぎく　きせ川
すま浦　つしま　敷島　牛太夫
大ざき　小式部　小源太　小三太
小きん　はじとみ　山吹　山川
戀山　金山　かせ山　葉山

此内金山と云は、奥座敷の主にして、二人かぶろをつかい給ふ事ありといへども、ひやうばんにすこしつかゆる事あるにより、總女郎のすへにつらねをくものなり、

○さん茶　つたや清ゑん内

此つたやは、元來新町かなやがとなりにありし家なり、過しころ此所に見せをうつす、

上上　　金太夫

夫こがねは、世のたからの上もりなれど、近年はそれも品々有り、この金太夫は古金か新金か、是上上きつすいの金太夫、たれに見せても見にくいと云ものなし、

上上　　牛太夫

すがた能しこなし能、人あい能床よし、されば上上のきわめ手がた、せうこたしかな牛太夫さまじや、

上上　　みかさ

みかさ山の月のかほばせ、あたりもかゞやくばかりよい御きりやうと、そのほまれかくれなし、

上上　　かしわ木

年さむふして松柏の貞をしるといへり、いつの年の暮でも、此柏木のおとろへたるけしきを見ず、されば、金太夫、牛太夫、みかさ、柏木を、此家の四天王とあをぐ物をや、

上上　　中川
上上　　いわき

上上　　なには

此三君は、四天王につゞきてをとらぬきりやう、是によつて、此家にて三幅對の立ものとするものなり、

總女郎

きてう　ふじ村　中倉　金山
三五　さんしう　しづか

○さん茶　名主　ひしや藤十郎内

此みせ舊より、つたやへ替り申候、此ひしやは、外へ見せを出す筈に候へども、所さだまり不申候間、先當分此所にしるしなき申候、

上上　　ひと へ

ようばうやさしく、心ばへいとしほらし、誠に名ぬしどの丶家の寶、上上の御きりやう、くどふ申すにをよばず、

總女郎

瀬川　とこよ　山吹　やよい
せんじゆ　ささらぎ　白菊　都路
いわくら

○さん茶　ゑびや五兵衛内

此家は前方伏見やと云し家なり、

上上　　さごろも

しゝつきむつちりと、見かけ先むまそうなり、此女郎は佛道を好み、部やに持佛堂をかまへ、夏書にねん佛を書寫し給ふよし、さりとはきどく、御しんのほど是にてすもじ、

上上　　外山

まがきにて御すがたをはいせし時は、さながら外山のはなを見る心地、一座してのおもしろさ、御座もちとかふいわれず、

上上　　小もんど

小もんどさまとはそれはむかし、今は年まの御かたなれば、もんどさまと云ふてよし、主水とかいて、水をつかさどるとよめり、此女郎にあふ客、水のへる事なし、きよしやう人は、くすりぐいにあふて見たまへ、

上上　　さんせき

三夕は、さびしき歌のためしとよみおきたれど、此女郎更にさびしき事なし、そのはんじやう、いつも正月三ケ日のごとしと云ゑり、右四人をば、此家の四天王とするものなり、

上上　　小林

小林のあさいなは昔のつわもの、今此小ばやしは、しよわけのつわもの、是を此家のひとりむしやとするものなり、

總女郎　ささらぎ　高はし　小にし　小山
市山　中川　さぬき

○さん茶　萬字や七兵衛内　吉野

上上　花はよし野、名高ききこゑあれば、少遠慮もあらんかなれども、近代吉野と云太夫もなければ、名のらせ給ふもくるしからず、御きりやういかにもはづかしからず、能ども〳〵吉のさま、

總女郎　吉田　初瀬　み舟　大すみ
しかの　しづか

○さん茶　一文字屋伊三郎内　小ざいしやう

上上　むかし平家の大將通と云人、なじみの女郎の本に行て、陣場へおそなはり給ふとて、舍弟の能登守、いかふにがい顔せられし由、その女郎を小宰相と申せしとかや、あわれその不粹の能登守を、今此小ざいしやうにかけて見たい、五人ばりに十五束、いかな〳〵ひく事はなりますまい、

上上　小山　山高きがゆへにたつとからず、小山といへど此君のほまれ、大山よりもなを高し、此家の御立物、とかふ云に及ばず、

上上　數馬　ひしゆかつまが作りたるぼさつの尊像も、是にはいかでまさるべき、是わたもちのぼさつがほ、此君にあふときは、ぼんのふたちまち消めつし、しりから佛になる心地、色となさけと床の内、あふて見たまへ粹さまたち、

上上　に　し　を
かさね小袖の色々に、錦をかざるにしをさま、以上四人は此家の四天王、いづれをとらぬ御きりやうなり、

總女郎　入江　柏木　かつら　かつい
かつしほ　からはし　はるの　山崎
小式部　をりゑ

○さん茶　かぎや治左衛門内　歌流

上上　窈窕たる花のすがた、三すじの調しほらしく、うるわしき御物ごしは、かりうびんがの御聲とやいわん、小うたのひとふし一流あり、歌流さまとは是をいふか、

上上　と　よ　川
波風しづかに、大ようなる座もち、是豐川さまとはきこへたり、此豐川にわたりかゝつては、首だけはまる客しゆ多し、

上上　み　を　崎
みをが崎とは海道の名所、名だかき富士のすそ野につゞき、ならびなき風景、此女郎のけしきも、又それになぞらへて見るほど、たぐひまれもの〳〵、

上上　村　瀨
きりやうしこなし末にをかれず、以上四人は此家の四天王、くどふ申におよはず、

總女郎　初むらさき　名　月　花　月　夕なぎ
風をり　八重がき　みさき　から崎
いわせ　あやめ　かせ山　柏　木

○さん茶　太田や又右衛門内　田村

上上　きりやうこつがら、あつばれ諸わけの御大將、鈴鹿の鬼神も君がしこなしに、一たびはづめば千の小がね、雨あられとふり下るは、太田やが大仕合、此女郎の御利はつなり、

上上　き　よ　は　な
しろくきよきは、卯の花のかきねにさけるよそをい、雪かとあやしむ御はだへ、君にそいねの床の内、きゆる心地とひやうばんうそでなし、

上上　若　世
わかいがきどく若世さま、御しこなしのよせい、どふもいわれず、御きりやうもよし、諸げいもよし、

上上　あ　ふ　坂
あふ坂の關の戸ざしはかたくとも、君にあふ身はへだてじと、かよい來る客のかず〳〵、隙なき繁昌今をさかり、

上上　み　ゆ　き
よう色雪をあざぶくきりやうなれば、見雪さまとは申やらん、見るとそのまゝきゆる心地、田村、清花、わ

か世、あふ坂を、此家の四天王とし、みゆきをばひとりむしやとする物なり、

總女郎

たじま　田川　かりう　あふよ
玉ざわ　松村　初はな　みよし

○むめ茶　尾はりや勘兵衛内
此家は、前方巴やがすみし見世なり、巴や向がわへ移りて、をわりや爰に見せをひらきぬ、

總女郎

小ざわ　萬太夫　豐崎　小太夫
ふじの　小もんど　山吹　わか山
吉十郎　若竹　わかくさ

右いづれも新見せなれば、せんせいまち〳〵なるをもつて、ひやうばん〳〵わしく跡より申べし、

○さん茶　松や一郎兵衛内
此家を大松やと云ふ、

上上吉　松枝
上上吉　今川

松枝のいろもかわらぬせんせい、今川の流れつきせぬはんじやう、ともにかせん組にゐらばれ、上上吉のほまれ、ふそくなき女郎なれば、くぎふは申におよばず、

上上　岩尾

君が代は千代に八千代にさゞれ石の、いわをとなりてこけのむすまでとよみしは、此君のさかへをいわふ證歌なるべし、

上上　ゑもん

かほだちじんじやうに、しこなし位有、ゑもんけだかき女郎と、皆人の評判、末々なをたのもし、

上上　八重菊

ほうそは菊の露をなめて、八百歳をたもちしとや、此君にあふは壽命のくすり、千年うりがあめよりまさりて、むまい所有ぞかし、右岩尾、ゑもん、八重菊の三君は、松枝、今川につゞきて、此家の三ぶく對の立ものとする物をや、

總女郎

松山　をのへ　かよいじ　みはな
ところよ　初いと　初ざき　外山
きさらぎ　松井　梅がへ　豐崎
八しほ　しの原　松岡　山しな
若村　ふじの　ひとへ　山川
わこく　いさわ　こよし　あづま

小ざつま　江口　いほり　とみよ

二丁目右がわ家並終、

伏見町家並　但仲の町の方より初る、

次女郎

今川　藏之介　藤倉や　清兵衛内
花村　若山　吉岡　小川
同　平野屋德兵衛
住江　あふ坂　坂田　成瀬
なる戸　兵庫や出見世
同　小西　初音
かりう　若草
局五寸　玉屋庄次郎内
坂た　藤しろ　高橋　若山
玉の　ともへ　高ま　まんよ

次女郎

澤なみ　あかし　かわや三郎兵衛内
同　橋本や小左衛門内
小泉　金太夫　柏木
同　近江や勘七内
千とせ　はつ梅　倉橋　とよ倉
若島　若むら
同　松ばや五郎兵衛内
清の　田村　市野　玉木
梅がへ　いくよ　堺屋勘七内
同　幾世　せんよ
くめ川　ちよの　ちよはし　いこく
とさ　外山
同　萬字や五兵衛内
吉清　染山　こきん　染川
局五寸　山形や五郎兵衛内
白菊　清すみ　櫻木　初はる
局五寸　松ばや德兵衛内
やどり木　つねよ　梅がへ　さ源太
しづか

右局女郎の内山形屋が内にて、しらぎく、清すみ兩人は、伏見町すい一の名とりなり、總て局次女郎のひやうばんは、末者日記と云ふ書にあらわす、ゆへに略す、

吉原丸鑑第三終

吉原丸鑑第四

角町　中の町より入左がわ家並、

上上　○さん茶　萬字屋庄三郎内　市川

遊女をなづけて川竹の流の身と云、此きみ容色よく、しょげいしこなし、今此家の一川なり、

上上　せきしゆ

むかしせきしゆとて名高き女郎有りしが、心ばへゆうにやさしくして、もてあそびたまふ物まで、じんでうを好み、扇のほねをほそくけづらせてもちたまひしを、今の世までも手本にして、せきしゆぼねと是を云、いま此きみも其名をしたひ、せきしゆと名のり給ふ、御心いたいけさ、御きりやうしほらしく、やさがたの女郎と皆人ほめます、

上上　袖岡

すつと出た所、ひときりやうそなはれり、袖の一字は衣へんによしと書けり、衣裳つきよきとりなり、おやつちやア、

上上　若紫

手につみていつしかも見んむらさきと、ひかる源しうが見立たまいし女郎のおもかげ、いかばかりありけん、此きみにくらべて見たし、

上上　和歌山

此君はてんねんやさしき人がら、絲竹のもてあそびはさらなり、百人一首いせ物がたりなど、和歌の道を好み給ふよし、さてこそ御名も和歌山さまか、

右の内、市川、せきしゆ、袖岡、若紫を四天王とし、和歌山をひとりむしやとするなり、

總女郎

今川　瀧川　かつら　ときは
むさし野　川せ　山ぶき　をりへ
ふじ崎　小いづみ　しもよ

○さん茶　桐屋助九郎内

上上　八重梅

美麗のよそをいは、梅の八重咲八重むめさま、紛々たる清香手枕のうへにくんじ、何遜が夢に逢見し人も、かくやとおもふばかり、歌仙組にあきあらば、やがて上上吉成べし、

上上　高くら

せんせいのほまれ、角町のすみ〳〵までもかくれなし、誠に御名は高くらさまじや、

上上　はつ村

目はな立にくからず、風俗なをいとしらし、一座酒あい三味せんまで、此家の是又上上なるものなり、

上上　くらの助

右三人に、此くらの助をくわへて、此家の四天王とす、あつぱれしこなし見事ども〳〵、

上上　木むら

此君又四天王につゞきて、をとらぬきりやうなれば、ひとりむしやとするものなり、

總女郎

しき島　あふよ　よし清　吉村
かつ井　をのへ　まんよ

○さん茶　竹屋庄右衛門

上上　なをへ

名を得たる此家の立もの、せんせいのほまれかくれなし、見かけから内しやうまで、ぼつとりもののとをりもの、

上上　高島

是は又お名は高しまさま、竹屋が内の御の字、しらぬものはござんせぬ、

上上　都路

戀の名所は都ぢさま、色となさけの立もの、又ある物でなし、誰でもあふて見やこちさまとしれ、

上上　小太夫

爰に見事なる女郎あり、是竹屋が家の小太夫さま、誠に高島、なをへ、みやこぢ、小太夫の四人は、をしもおされもせぬしこなし、此家の四天王とするものをや、

上上　袖こと浦島

右兩君は四天王にならびて、おとらぬしこなし、此家二對の立ものとするものなり、

總女郎

しろたへ　小いづみ　にしを　きてう
うつせみ　なみへ　をのへ　あふ坂
とめ山

○さん茶　是を小づたやと云、つたや作兵衛内

上上　かつ浦

たれにもまけぬしこなし、いづくの色くらべにもかつ浦さまと、そのかくれなし、

上上　　は　つ　花

春をむかへて先咲梅のはつ花さまとは是なんめり、いまだわか木の色なれば、はんじやうは日ましとおもひやられます、

上上　　ゑ　も　ん

御顔だちは云におよばず、ゑもんのゑり本より、すきとをるはだへのうるはしさ、白むくをあざむくばかり、しよげいも又此家の上上なるとぞ、

總女郎

小太夫　津　山　津　川　玉　川
はつ山　はつい　みよし　清　原
江　口

○さん茶　此家を中萬字やと云、　萬字屋勘兵衛内

上上吉　　戀　　山

此家にてれん山と申は、第一の名題なり、此前のれん山も、せんせいのほまれかくれなかりし美君なりし、今此君も、まへ方のれん山にまさりはするとも、おとるまじき女郎、きりやうしこなしともにすぐれて見へたまへば、歌仙組にゑらびて上上吉とするものなり、

上上　　か　わ　ち

業平はかわちがよひにうき身をやつされけるに、手づから飯かいとりて、大めしを手もりにせられけるを見て、戀をさましたまいしとや、此女郎はそれにひきかへ、なじみをかさねて見るほど、しほらしき事多し、平さまにあわせたら、たとへお内儀の、風ふかばをきつしら波、たつたり居たりせいとうせらるゝとも、此かわちがよいは、とま事あるまいとのさたじや、

上上　　か　わ　ず　み

すらり〳〵と出たまふよそをい、少シもつかゆる所なく、ありのまゝなる御心にくからず、きれい成所が川ずみさま、御名を聞さへいさぎよし、

上上　　花　ず　み

花にすむ鶯のはつねゆかしき御ものごしに、となりの客も見ぬ戀にしづむぞかし、いわんや御一座して、かほばせを一目見てからは、是ごふもなりませぬとのうわさ、

上上　　あ　さ　ぢ

君がなきけのかたじけなさは、あさぢがはらのつゆときへても命もおしうないと、客しゆのふかうはまらるゝは、さては能所あるにきわまりたり、此家にて戀山をかせんぐみの上上吉とし、それにつゞきて、かわち、川ずみ、花ずみ、あさぢの四人を、四天王とさだむるものなり、

上上　　か　　山

是又四天王におとらぬきりやう、是によつてひとりむしやとする物なり、

總女郎

きん山　大くら　さんしう　いとの
やしほ　からさき　八重ぎり　大　吉
吉をか　小ざわ　花　菊　あづま路
清　川　いづも　櫻　木　すゞしろ
浦ざき　さほ山

○さん茶　ひしや　新介内

此家は、そのかみ大つたやがすみし跡なり、今のあるじ新介は、向がわにありて、六兵衛を大びしやと云、新介を小びしやと云し、近年小びしやの家をば、平野やにわたして、此見世にうつりて、ひしやのの

上上吉　　柏　　木

小野の篁の歌字づくしに、しろきはかしわと云ふ事あり、此女郎の白きはだへ、柏木さまと名づけたるか、ある人のいわく、それも一理はきこへたれども、しろきものはしな〳〵あるべし、何とて木へんの字を付しや、實にそれ社能ふしん、木は十人と書たる字なり、左りのかたに十人ならべて、此きみに見くらべたるに、十人ほ十人なみ、白きは此きみ一人と目の付く所、柏木さまとは是でよめましたか、

上上　　染　　山
上上　　松　　島
上上　　あ　さ　づ　ま
上上　　ゑ　も　ん

うれんをかけかへたり、はんじやう大かたなられば、今は小びしやと云ものなく、是左びしやと云、仲の町より入りて、此町の左りがわなればなり、

右四人を此家の四天王とす、いづれもおとらぬしこなし、御手がらの数々申もくどし、

上上　　山　　木
上上　　ゑ　　川
上上　　を　　へ

右三人は、四天王の人々に増りはするとも、をとりたまふまじき御きりやう、是此家三幅對の立ものとする物なり、

總女郎

大吉　三はな　大くら　うねめ
とみよ　花月　清原　きてう
松浦　さんしう　小やま　あさぢ
小ざつま　小よし　こきん　とめ山
今川　みよし　若紫　いづみ
はつね　をり岡　かわせ　ひとへ

○さん茶　伊勢や　又左衞門内

上上　高崎

よいぞ〳〵とほむる名の、高さささまとはかくれなし、此家の立物、上上の一の筆なるをや、

上上　待宵

約束の客をまつよいのけしき、中の町の揚やに腰かけて、かぶろにたばこつがせてやすらい給ふもつたい、さても見事、あれはどなたと氣をつけぬものなし、此家の立ものなれば、そのはづとしられぬ、

上上　皆川

上上　きせ川

みな川につゞくながれのきせ川、此家にて右之四人を四天王とあをぐ物をや、

上上　かよい路

此君四天王につゞきて、ほまれゆゝしき女郎、御きりやり殊にすぐれたまへば、ひとりむしやとする物なり、

總女郎

大いそ　吉村　高松　松岡
清すみ　小ざつま

○さん茶（此家を小さもへ屋と云、）　巴屋仁右衞門内

上上　はつい

此女郎はともへ屋がほり出し、此家のはつものなり、されば此家の色がしら、せんせいのずい一なるとぞ、

總女郎

いこく　かよひじ　もなか　ゑにし
はつね　みゆき　とみよ　あかし
八しほ

○さん茶　龜甲や三郎右衞門内

上上吉　高橋

總じて此龜甲やと申は家がらにて、土佐ぶしの上るり三味せんの上手多し、とりわけ此高はしは、三味せんの達者、土佐ぶしのめい人なり、大かたのさん茶女郎は、いな所にりきみ付て、あげ屋へ出て、太夫かうしと一座する事をいとい給ふ、しかるに此高はしは、毎度あげ屋へ出て、太夫かうしの末座につらなり、三味せん上るりの手がらをあらはし、殊更座もちまき人にて、酒事のさしひき、一座の太夫かうしのかたをば、いかにもそだてゝ、うつくしくあいしらい、大じんをとりはやして、座敷をくろめ給ふしかた、おとなしくはつめいなり、いづれのさん茶女郎もかくこそありたけれと、大じんを初、たいこまつしやのものまでも、此女郎をほめぬはなし、けつく高はしが、度々あげ屋へよばれて出る事を、外の家のさん茶女郎はそねみて、さもしきわる口をいはるゝ方あり、かくわる口を云女郎の下心のほどこそつたなけれ、さらばさん茶にて口きく女郎、あげやへ出て、太夫かうしのれき〳〵、大じんの一座につらなり、うつくしう一座をとりはやして見たまへかし、我が家にてほへぬ犬さへなければ、めい〳〵の宿にては、さこそせんせいのしこなしせらるゝとも、あげやにてはその格ひとつもあわづ、座つきふつゝかに見ぐるしからまし、あるいは又太夫かうしにまけじとのはり合、かを大じまんに打こまれたまふもあるべし、此高はしはむるいの利はつ、茶こくのまれものなれば、容色は十人なみなれども、かせんぐみにゑらみて、上上吉のほまれをあらはすものなり、

初風

上上　うねめ
上上　やはせ
上上　よし野

此四人は高はしの君につゞきて、此家の四天王とす、いづれもおとらぬきりやう、殊に家がらゆへ、土佐ぶしの上るり、三味せんの手きゝ、おの〳〵そのほまれかくれなし、中にもはつ風は容色すぐれて、四天王の一の筆なる物なり、

總女郎

はつはな　千とせ　小にし　かうばい
つがわ　かぐ山　わかな　野風

よしざき　市はし　うこん

○さん茶　萬字や　太左衛門内
此家を小萬字やと云、

上上　かつ山

花は面にひらき、柳は腰にしなやかなり、髪かつ山のひとふう、この家の立もの、あつばれ能女郎、

上上　高瀬

ひけや〳〵高せ舟、ひく手あまたのはんじやう、晝となく夜となくきやくのたゆる事なし、ちよつともろうて見たまへかし、

總女郎

小ざつま　かりう　くらの介　なるせ
松がへ　松しろ　高くら　小よし

○さん茶　巴や喜右衛門内
是家を大とも〻屋と云、

上上吉　鳥山

此きみは三代めの津島が出せし女郎なり、されば島の一字を書分て、鳥山と名のり給ふ、容色すぐれてうるわしく、三味せんのたつしや、上るりは土佐ぶしをいとい、半太夫ぶしを好みたまふ、目の上に絲すじのごとくなる跡あり、是しんぞうの時、姉女郎眉のかたちつくるとて、かみそりの刄をあてたまふとなり、此かみそりの跡、さいわいのよそをいと成りて、今見ればふたかわ目のごとく、その目もとのしほらしさ、一たびかゑり見れば百の嬌ありとや、物打云たるけわいかあいらしく、心ばへいとやさし、しゆにんあいきやうそなわりたる女郎、此きみに逢たる人は、中たへ給ひても、なをそのなさけをわすれたまはぬよし、是上上吉のせうこ、かせんぐみのずい一なるものをや、

上上　つしま

此家にてつしまと申は、代々此家第一のとをり名なり、元祖津島より、今のつしまは四代めにして、代々せんせいのほまれをあらはし、更にをくれをとりたる事なし、上上の一の筆なれば、どふ申にもをよばず、

上上　松山

すへの松山波はこすとも、此きみのせんせいは、ときわの松山、いつもかわらぬしこなし、がを折ました、

上上　袖をか

夜着ふとんの山のごとく、小そでは岡の如くにつみあげたり、是袖をかの御座敷、さても能しんだいと、見る人目をおどろかす、此きみのきりやう、又うつくしい物じや、

上上　金太夫

あたりもかゞやくよそをい、こがねの君とも申べし、誠に此家にて、鳥山を上上吉とあをぎ、それにつゞきて、つしま、松山、袖をか、金太夫を四天王とさだむるものなり、

上上　つま木

上上　政つね

此南君、四天王につゞきてをとらぬ女郎、是を此家二幅對の立物とするものなり、

總女郎

とみよ　外山　さんご　かつい
からさき　政きよ　きさらぎ　かをる
戸ざわ

○さん茶　蔦や　庄次郎内
此家をつるつたやと云、此家舊冬より、二丁目ひしや藤十郎跡へうつりて、此所の見世をしまい候、舊冬るしつめの時分ゆへ、あらたむるに及ばず、翌にしるし申候、

上上吉　しのゝめ

月のかをばせあでやかにして、しよげいにもくらがらず、君が手に一もみもまれて、いかなる野暮てんの男も、しのゝめの空のあけゆくごとく、たちまち粹の心をさとりぬ、されば上上吉として、かせん組のゑらびに出され、そのほまれかくれなし、

上上　わか山

御年ははたちをこへたまへども、御すがたはなをわか山さま、御きはいよしの御かたと、いづれもほめます、

上上　あげまき

介六があい方にはあらねど、たぐいなき名を、すみ町にあげまきや、これ大將具足のかざり物、行すぎたまふうしろすがたを見ても、あつばれゆゝしき御かたとしられぬ、

上上　梅がゑ

梅がゑのにをいことなる花のすがた、是又此家の上上、くどふ云に及ばず、

上上　つまぎ

容色先よし、殊にはみすじの達者、是つまぎくのつまぎさま、此家にてしのゝめは、かせん組に入りたまへ

ば、上上吉としてそれにつゞき、若山、上卷、むめがゑ、つま木の四人を、四天王とさだむるものなり、

『上』　　しがさき

此しがさき四天王につゞきて、しこなし又あぢなものなり、されば ひとりむしやとするものなり、

總女郎

琴浦　淺か　しん山　あわぢ

淺を　はつ絲　はつね　雲井

しの原

右角町左りがわ家並終、

角町　仲の町より入右がわ家並初

○さん茶　是を角山口と云、　山口屋與兵衛内

上上吉　　す　が　原

此きみは、元來三浦のかうしにおわして、ぜんせいゆゆしかりしが、わけありて此見せにうつり給ふ、こがねはあくたにまじゆれども、其ひかりかくれなきためし、今かせんぐみにゑらばれ、上上吉とあをぐもさる事ぞかし、

上上　松がゑ
上上　白ぎく
上上　しづま
上上　かつらぎ
上上　たんしう
上上　はついと

以上六人を此家の六人衆と云、いづれもひときりやうそなわりて、三すじ酒事の上手、ひとり〳〵其品をわけていわんは、事ながくやぼらしければ、是を略す、總じて此山口は總女郎の内にも、格子下りのかた入こみ有り、角町の角屋敷、家がら能女郎多し、

よよ　若むらさき
よよ　千　よ
よよ　きよたき

右三人わか手にて、しこなしよきに依て、六人衆につづきて三人衆と云、

總女郎

清たま　清原　清藤　萬しう
いとさん　絲櫻　絲崎　山崎
はつ山　小わた　小ざつま　こと浦

こきん　かつま　吉十郎　政木
正つね　ひとへ　をりゑ　きりへ
梅がへ　からさき　松風　風の
むらせ　わか草　櫻木　まつ花里
とよざき　くらはし

○さん茶　此家を右ひしやと云、　ひしや六兵衛内

上上吉　　小むらさき

柔和第一の御氣はい、さりとはいとしらし、御きりやうはかせんぐみにゑらばれ給へば、云はずとも上上吉としるべし、

野暮間ヲ云、およそ茶こくのきみたち、三浦山口の太夫名をなのりたまふ女郎は、第一太夫にまぎらはしく、つとめの品かわりて、そのくらゐにそうをうせるを以て、その名をけづりて、此書の名よせの中へもあらはしたまはぬ所に、此君ばかり小むらさきの名をあらはして、殊にかせん組にゑらびくわへ給ふ事、いかなるゆへにあるやらん、

粹答云、よいかなや問ふ事、おれわれ汝にかたらん、此小むらさきは、俗姓ゆへある人なりしが、いとけなくして母にはなれ、二六の年の暮、その父云がいなきさまにて果たまひぬ、夫よりめのとなりけるものをたのみ、二三年ろうありしに、はからずも此里へ身をよせ、ながれのきみと成たまふ、さればひしやのあるじ、其むかしをあわれみ、容色すぐれ給ふによりて、つき出しの太夫にせんとて、あまたの師匠をつけて諸藝をならわせ、あげ屋町の茶屋をたのみて、道中のよそをいをしこみ、すでにあげ屋にて、水あげあるべきはづなりしに、わけありて此事やみ、この見世にとゞまりたまひぬ、しかれどもなをなみの女郎にまじゑず、しんぞうつき出しより、別に座敷をわたしやり、手かぶろをさしそへて、見せに出たまふときも、しとねをしきてもてなしたり、今はよふやくせんせいのさかりもすぎさせたまふほどなれども、是又太夫のくらゐを下り居たまふにひとしければ、なみ〳〵の茶女郎と、おなじさまに評せんことは、粹のなさけをしらぬに似たり、是に依てその名をけづらず、かせん組にゑらびて、ほまれをあぐるものなり、

上上吉　　小式部

いにしゑの小式部は歌をよみて、繪にかける時鳥に音をなかせけるとや、今此小しきぶがひとふしの小うたには、屏風の繪もおどり出べし、たゑ成すがた、たゑなる聲、是又かせん組、上上吉の君なるをや、

上上　小ざいしやう

此家にて、此さきの小ざいしやうと申せしきみ、たぐいなきほまれをあらはしたまふ、そのあとをしたいて、今小ざいしやうと名のりたまふ、御きりやうはむかしの小ざいしやうに少シもおとりたまふまじ、御しこなしも、此家上上の一の筆なるものをや、

上上　松しま

まつしまや小じまのあまのぬれごろも、ぬれにぬれたるふうぞく、いかなかたいおやぢにても、此君のぬらしにあふては、びつたりと戀にしづみます、どふぞしんじつおなさけを、まつしまさまとしたいくる人多し、

上上　小太夫

見事々々、是此家の小太夫さま、しこなしと云ィ、上るりみすじのこる所ござんせぬ、

上上　今紫

此家にて小むらさきのゆかり、かあいらしきふうぞく、今むらさきの今をさかり、誠に小むらさき、小式部の兩君は、かせんぐみにゑらばれ、それにつゞきて、小ざいしやう、まつ島、小太夫、今むらさきの四人を、此家の四天王とあをぐものをや、

總女郎

若紫　小長門　わか島　歌流
まんよ　きさらぎ　さく花　市村
吉澤　尾上　大くら　八十郎
吉十郎　津川　花川　くめの介

○さん茶　兵庫や又三郎内

上上　清花

芙蓉はなひらけてにごりにしまぬよそをい、素面紅粉をからずして、おのづからうつくし、此家上上の一の筆なる物をや、

上上　あふよ

あふ夜うれしき床の内、御はだへにそゑば、むつちりやわ〳〵として、格別むまみある女郎、是又此家の上上とは、いかにも〳〵、

上上　小太夫

むまれつきとりなり、そろふて能子太夫さまじや、みすじ一ふしも又よしとぞ、

上上　さこん

よい御きりやうといふもおろかや、清花、あふ夜、小太夫に、此さこんを合て、此家の四天王なれば御すもじ、

總女郎

うつせみ　高ま　いこく　さ衣
松風　楓岡　上まき　小吉

○さん茶　かぎや吉兵衛内　關の井

上上

相撲はつよきをゑらんで關と云、げに風流のつわもの、此きみを此家の色の關とりとするものなり、

上上　しのゝめ

かのゑぼし折の五郎太夫がむすめもおもひ出されて、此君の容色、くらまのわか衆さまに見せましたい、

上上　ことざき

ことざきの殊更によきしこなし、此家の上上〳〵どふいわずとも、

上上　みよし野

右の三君に此み吉野をくわへて、此家の四天王とす、見よし野の吉野の花は、いはずともよしとしるべし、

總女郎

みはな　きよすみ　清原　大くら
藏之助　こきん　こざわ　花よ
わかよ　しがさき

○さん茶　山屋助右衛門内　いこく

上上吉

此きみはかせんぐみにゑらばれ、上上吉の女郎なれば、諸事はいわずともしるべし、あつばれ見事のしこなし、此家の名物なるぞかし、

上上　關のい

となりのかぎやに關の井あり、見せをならべて、たがいにせんせいのちからをくらべ、せきをあらそいたまふ、いづれおとらぬ四十八手、勝負はぎやうじのあつかいにもらひます、

上上　若竹

すらりとして見事なる仕出し、若竹のきみとも申べし、此家の上上云に及ばず、

上上　小よし

きりやう先よし、三味又よし、なにもかもよし小よしさま、是又此家の上上なり、

上上　ゑ川

ゑがほにたゑなるゑ川さま、此家にて、わか竹、關のい、小よし、ゑ川を四天王とさだむるものなり、

總女郎

かしわ崎　染山　染川　津川
清川　かわち　しの原　わこく
あふ坂　はつい　わか藤　ゑもん
たのも　せきの

○さん茶（此家を小山口と云、）　山口屋半三郎内

上上　にしき木

戀のそめ木とよみおきし、その錦木の色ふかく、誰人も戀をそめぬと云事なし、そのうつくしさは云に及ばずしてしられぬ、

上上　八重ぎく

菊のませがき、誰が云とはなけれど、見ごと〳〵と云さた、人の口にもうそはないぞ、まがきに行て見物爲給へ、

上上　清はな

きよきながれに咲はなは、かきつばたかこうはねか、いづれの床へなげ入にするとも、一景あるぞかし、

上上　いこく

隣の山屋にいこくと云女郎あり、是かせん組の一人なり、此きみ同名にて、やどをならべてすみたまふゆへ、多くはとなりちがゆる事あり、此君いまかせん組に入たまはずといへども、猶も此家の上上、あつばれの御きりやう、錦木、八重ぎく、清はなにならべて、四天王とするものなり、

上上　小林

小林のあさいなと名のりては、いかな男にも、うごきをとらせぬ色のつわもの、是を此家のひとりむしやとするものなり、

總女郎

わこく　小太夫　小にし　わか世
わか山　かつら　津川　松川
なるせ

○さん茶　大和屋淨林内

上上　九重

うちあがりてやさしきしこなし、九重のみやこ女郎といふともにくからず、大和屋は大きにやはらぐと書し家なれば、家から其中の上上おもひやるべし、

上上　外山

此さきのひやうばんに、かすみもたゝぬ外山さまとほめたりしは、此君いまだ新ぞうのころなりし、今は此家の上上、誠に目高が見てをきたるもをもいあたりぬ、

上上　小もんど

出すいらず、是中がたの小もんどさま、老若貴賤、誰にあわせてもにやはしく、どこへ出してもはづかしからず、

上上　小太夫

きりやうしこなし、さすがにすへにおかれぬ女郎、以上四人は、此家の四天王なるものをや、

總女郎

はつ梅　梅がへ　村瀨　小ざらし
小林　ゑもん　みやこ　若倉
山吹　せきい　なると　しのゝめ
かつらぎ　とざわ　山しろ　かしほ

○さん茶（此家の中とも巴屋と云、）　巴屋市右衛門内

上上　田村

あつばれきりやうの大將、此家の一の筆、一座のしこなしあぢな所あり、清水寺の觀音を信じたまふにや、皆令滿足の女郎なるとぞ、

上上　小太夫

總じて小太夫と申名は、近年のはやり名にて、此角町の内ばかりにも、小太夫と名のる女郎八人有、其中に、此ともへ屋の小太夫は、第一のきりやうなり、同名あまたまぎらはしければ、よく〳〵見わけたまふべし、

上上　大吉

なにからなにまでも、あふきによしと書て、大吉とよめり、殊に此君の正月をしたまふ君は、年中仕合よしと云へり、目出たき女郎としるべし、

上上　吉田

色もなさけも吉田の君、能と云はしれた事、田村、小太夫、大吉に、この君をあはせて、此家の四天王とす

るものをや、

總女郎

坂　た　小源次　半太夫　袖　岡

なると　吉十郎　染　川　染　山

吉　岡　吉　松　きんこ　若　竹

のかせ　夕ぎり　清ずみ　中くら

かつい　初いと　山ぶき　野　村

筒　井　小　角

○さん茶　玉屋六左衞門内

上上　初むらさき

世のことわざに、朝むらさき、夕くれないと云へり、いかさま此君、夜見せのおもかげも先よけれど、それよりは、手枕の床のうへに居つゞけして、朝居のねみだれ髪ひときはうるわしく、海棠のねぶりいまださめずと云しむかしおもひ出られぬ、玉屋が家の上上ことはもつとも〳〵、

上上　初　ぎ　り

桐は鳳凰のすみかにして、木の筋目ねから枝までとをりもの、諸事のしこなし、どこまでもつかゆる所なし、よいぞ〳〵、

上上　吉　岡

あつぱれきりやうよし岡さま、ひかりかゞやく玉屋が立もの、初むらさきを中だんとし、はつぎり、吉岡を左右として、此家の三幅對とながむるものなり、

總女郎

外　山　小太夫　金太夫　小にし

わか村　八重ぎり　花ぎり　川　せ

よし村

○さん茶　平野や仁右衞門内

上上　政　よ

松浦五郎が家より出しきみとかや、數度の手がらをあらわし、新ぞうをもあまた出し給ぬ、右と云ふ名の立たるは、此君のことがにあらず、すてられぬきりやうあれば、今も此家の上上、但シ短氣はたしなみ給へ、

上上　つ　ま　川

是又まさよのゆかり、きりやう能りつぱなり、依レ之方々より、すへ〳〵は宿のつま川と云こみ多し、望みならばはやくひきとり給へかし、

上上　長　門

長門は印籠の名物とや、凡長門印籠は、第一くすりの

蜜をたもち、重々のかけごのぬきさし、どふもいわれぬ具合あり、此きみのなにやらも、かのながといんろうのぬきさしと同じ具合と申さた、うそならあふて見給ふべし、

上上　平　野

ひらの屋が家にて平のと申は、代々のとをり名なり、此女郎はまだ若手なるゆへに、末座にひかへたまふといへども、すへ〳〵此家にて一の筆成べしと、目高どものひはん、政よ、つま川、長門に、此ひらのをあわせて、今も此家の四天王なるものをや、

總女郎

こと浦　いり江　あやめ　政　常

さんご　なかとみ　かよひぢ　かつい

ま　袖　かつま　つまよ　八重菊

○さん茶　ゑびや　利　兵衞

すが原　右　京　琴　浦　小傳次

まんよ

右五人を此家の五人組と云、

總女郎

玉かづら　小　柳　九　重　松がへ

とみよ　はつ風　半太夫　かぐ山

小太夫　ゑざわ

右此ゑびやは、過し利介が跡成を以て、委細のひやうばん是を殘ス、總女郎のみさほさだまり候節、追而くわしく可レ申候、

○さん茶　平野屋平左衞門内

上上　市　川

先見た所いさぎよく、座はいつかゆる所なし、げに市川の君なれや、流れのすへの新ぞうも、此君のふうをまなびて、此家の立ものいかにもそふじや、

上上　わ　か　松

わか松のみどりもへ出ルがごとく、日にそへてはんじやう、お手がら〳〵、きりやうは此家のずい一、隨分見事と申さたじや、

上上　若　よ

上上　み　は　な

右兩君、市川若松につゞきて、少もおとりたまふまじき御きりやうと見へたまへば、是をあわせて此家の四天王とするものなり、

總女郎

きせ川　かわち　から崎　から橋
つま川　ちよはし　とよさき
角町右がわ家並終、

吉原丸鑑第四終

吉原丸鑑第五

京町　仲の町より入右がわ家並、

三浦四郎左衛門内

太夫格子　此家を大三浦と云、

右太夫格子のれき〳〵、殘らず此書の第一あげ屋の巻に是をしるす、

○さん茶　此家を大いせやとも、又丸いせやとも云、　伊勢や甚助内

上上　花夜

はな夜とは、是花の夕べをいふか、春宵一刻直千金、花のかほばせあり、月のよそをいあり、おもしろのけしきや、

上上　若藤

春過て花咲ものは藤なり、年ますがたのいとゞうるわしく、今を盛と見へたまへば、さてこそ若ふぢさま、此きみにかいまとわれては、いかなきやくでも、動きはとられぬとの事じや、

上上　てい家

いつわりのなき世なりけり、かみかけてと、しつぽりとぬらす床の内、此君の座敷をば、しぐれのちんとも申べし、ぬれてくるきやくしゆ、數百人程入かゑ〳〵約束あり、是を百人一しよのなじみと云、

上上　田川

いつとても客のひでりなく、田川の水のたへぬはんじやう、終にひそんのさたをきかず、以上四人は此家にて、四天王とあをぐ物をや、

上上　若むら

上上　やゑわか

此兩くんは、四天王にまさりはするともおとらぬ女郎、是を二幅對の立物として、床のながめにする物なり、

總女郎

高はし　いなば　かわち　あふい
敷しま　かりう　いわ崎　初いと
ふじしろ　かるも　はな菊　花村
はつむら

○さん茶　此家をもつかうかせやと云、　伊勢や喜左衛門内

上上　はつ梅

諸花に先立てまづさく梅を、花の兄と申とかや、伊勢喜が家のずい一、此君に色のさきをあらそふものなければ、總女郎の姉さまぶん、初むめさまとは見事見事、

上上　九重

八重ひとへ咲九重のはなの色、花にもまけぬよそをい、見る人心をかけずと云事なし、一盃の酒ぶり、三すじの手もと、いづれすぐれし御かたときこゑし、

上上　柏木

きりやうしこなし、あつばれ見事、右三人を、此家三幅對の立ものとながむるものなり、

總女郎

をり岡　坂た　山吹　山の井
小山　小林　から梅　小太夫
半太夫　柏崎　とよ崎　櫻崎
はつはな　八はし　八重がき　岩尾

○むめ茶　錢屋久四郎内

上上　越川

越川のながれいさぎよく、戀わたる人多し、きりやう

は此家の上上、いわすとも、

上上　ゑ　川

繪にかく川のけしき、波風たゝずして風景かぎりなし、越川、ゑ川の兩君は、此家二ふく對の立物なるをや、

總女郎

わか浦　わか倉　和こく　なには

玉　川　染　川　松　岡　かをる

高しま　みなと　市　の　ふじの

○むめ茶　俵屋　三四郎内

上上　千　と　せ

きみは八千代ませ〳〵と、くり事をいわふ千とせさま、たわらやがよねの内の上上の一の筆、くどふいわすとしれた、

上上　は　な　よ

はなの精の世にあらわれて、いきて物いふがごとし、諸げいにもつたなからずとこそ、

上上　花　雪

おもかげをはなにたぐへば、はだへは雪とながむべし、兎に角にながめにあかぬ此君、又見事成物としるべし、

上上　半　太　夫

此きみも又すぐれもの、此家にて千とせ、花よ、はな雪に、此半太夫をあわせて、四天王とさだむる物なり、

總女郎

夕ぎり　はな村　千さと　八千代

せんよ　大　吉　多　川　ゆき岡

小太夫

○さん茶　藤屋又兵衛内

上上　清　花

みかけからさつぱりとして、いちやつかぬふうぞく、是清はなさま、せんせいは春のはなざかり、見事々々と申ひやうばん、

上上　つ　ま　木

すがた心つまはづれ、とかふいはれぬつま木さま、いよ〳〵どつとぞほめにける、

上上　八　し　ほ

染にそめたる色ふかき八しほの君のよそをい、今はんじやうの染出し、次第に色が増します、

上上　清　は　し

若手にてしかもよし、三すじひとふしもかあいらし、以上四人は此家の四天王とするものをや、

總女郎

よし村　吉きよ　玉むら　花をか

大はし　八はし　八ゑぎく　つま川

小ざつま

○さん茶　山口屋勘兵衛内

上上　あ　ふ　よ

みめかたちとりなりまでも難ずる所なし、いかにも能御かたなれば、時にあふよもことわりとぞしられぬ、

上上　わ　か　松

わか松のみどり、さかゆくはんじやう、是御きりやうもよければなり、されば此家にて、あふよ、わか松の二人を、二ふく對の立物とながむる物をや、

總女郎

みなと　坂くら　松　岡　清わか

見はる　波　ゑ

○むめ茶　家田や久兵衛内

上上　、松　を　か

いつもかわらぬはんじやうを、常磐の色にたぐゑて、松岡と名のり給ふきりやうは、此家上上の一の筆、申におよばず、

上上　和　歌　浦

名もなつかしき和歌浦の、はまのまさごはよみつくすとも、此君のきやくはつきすまじ、まい日の約束お隙はないとの事じや、

上上　和　國

唐土はしらず、和こくのいろはこうしたものじやとのみこんだふうぞく、そのしこなしどふもいわれず、和こくと書て、國をやわらぐると讀り、いかな國がたのいなか衆をも、ひともみにもみやわらげたまふ、お手がら〳〵、

上上　初　い　と

すがたのみかは、しよげいのき用人、三すじひく手のしほらしく、調べ出さるはついとの音色、野暮のねぶりもさめゆくばかり、以上右四人は、此家の四天王とさだむるものなり、

總女郎

都　路　今　川　三しう　小　泉

わか松　りせう　つゝ井　ていか

○むめ茶　山口や加右衞門内

上上　幾野

その名は高し山口に、皆人こがれあふ江山、いく野の君と聞ては、まだふみも見ぬ人までも、此家の上上と、そのうわさかくれなし、

總女郎

清はな　野むら　小式部　本島

梅がへ　わか梅　小柳　清原

山しな　さゝの介

○むめ茶　山口屋與兵衞内

上上　小太夫

かほかたちじんでうにして、ふうぞくしほらしく、あつぱれ此家の立物、誰が目にもにくからず、

上上　三かさ

三笠山つき出しの時より、ひかりてりそふよそをい、今せんせいのさかり、ひやうばんどこできくもよし、

總女郎

いまよ　花川　市むら　こわた

つしま　小ざつま　よし清　清はし

山のい　大吉

○局五寸　三浦や新介内

藤しろ　三ふね　はつ花　玉しま

清わら　高松　しき島

○次　吉田や傳左衞門内

よしの　まつち　みはし

京町右がわ家並終、

京町　仲の町より入左がわ家並初、

格子　此家を小三浦とも向三浦とも云、　三浦孫三郎内

右太夫格子のれき〳〵、殘らず此書の第一あげ屋の卷に是をしるす、

○さん茶　同じ内

上上　しがさき

此君は此みせの色がしら、ぜんせい今をさかりなり、すべて此やどは家がらにて、女郎のふうぞくおとなしくしてすゝどからず、是おのづから、格子女郎のよせいうつるがゆへなり、此きみをあげ屋の一座にもらしぬる事は口をしけれど、見せのはんじやう、名をとらんより得をとれとの、ていしゆがさしづなるべし、此三浦やは、元來今の孫三郎が格子の所にありて、そのかみ見世を出しそめしは、寶永改元のみぎりなりし、其時しがさきと申せし女郎、奥の座敷を領じ、ぜんせい名だかくきこゑたりし、其後此見世爰にうつりて、吉住つゞきてほまれをあらはせり、今又此君根元の名題をつぎて、其跡をくろめ給ふ、お手がらかず〳〵申におよばず、

上上　八しほ

容貌うつくしく、はだへこまやかにして、むつくりやわ〳〵としたむまれ付、色あり意氣知あり、或人の發句に、

青ィ客ふるや時雨の八しほ染

野暮問テ云、此きみはいまだ座敷持にもあらず、しかるを總女郎の内にぬきんでゝ、上上の位をあらわし、座敷持のなみにしるしたまふ事、細見のおもわくはいかに、

粹答曰、是等の所又細見のまなこなり、此女郎かぶろなりし時、此見世にて、絲木といふる女郎に付そい居給ひしに、そのかみ金山と申せし太夫、つとめをひきたまふ折から、あげ屋のかたみにのこさんとて、此女郎を見立たまい、絲木のかたより乞とりて、金山の金の字をかたどり金五と名付て、格子のつとめに出しおき給ふ、さればきりやうと云ィ、うしろ見と云ィ、かたゝ〳〵以て今見せのつとめにおろしぬる事、一ゑんのみこまぬ所なり、よしや座敷もちにはあらずとも、きりやうは上上なれば、どこまでも上上なり、きのふけふまであげ屋の道中、皆人の見しれる所、なんといやか、

總女郎

たんしう　かせ山　皆川　三はる

みやこ　九重　小よし　小わた

はつせ　くにとよ　三はし　大吉

吉松　八重菊　なると　せいしう

ともへ

○さん茶　長崎屋庄左衞門内

上上　しまの助

しやんとしてびたつかぬふうぞく、いかにも若衆さまにしてうけ取ます、中の町へお出の折から、どてもの事に、はかまをきせまして見ましたい、

上上　　しまざき

助さまよりさきをかけて見せんとて、島ざきさまとは、さても氣ばやな女郎、あふた所ぬけめはござらぬ、末々はんじやうなをたのもし、

上上　　市　川

大あたり、市川といへば野暮てんは、團十郎が狂言の事じやとがてんする、是此里をしらぬ野存なり、此市川の大あたり、團十郎がおよぶものにはあらず、此やどの一まいかんばん、はいらしやれはいらしやれ、

上上　　清　原

てれんなしの魂膽、清原眞人とも云べし、しまの介、島崎、市かわに此君をあわせて、此家の四天王とさだむるものなり、

總女郎

わかよ　みふね　よし野　よし住
山しな　小もんど　のむら　とよ島

○さん茶　海老屋長右衛門内　やしほ

上上

やしほの紅葉色ことなるありさま、花にもまさりて見事なり、此家にて上上一の筆、いやといわれず、

上上　　かをる

此君は、いまだ御よわい二八にたらぬほどの御かたなれば、ぜんせいの手がらあらわれずして、末座にひかへ給ひ、御部やの主にもあらねど、てんねんよき所そなわり、しゆにんあいきやうましますゆへ、末々はこの家のすい一たるべしと、粹仲々間の面々、いづれもその口そろふがゆへに、姉女郎をさしこゑ、おして上上のきわめ札を付おく物なり、

總女郎

なるみ　とみよ　もしほ　初絲
まさよ　きせ川　みちのく　清原
市川　もなか　小もんど　まんよ

○むめ茶　丸屋喜兵衛内　きさらぎ

上上

うそならば、きて見さんせよきさらぎの、はつ牛からはつ牛まで、約束のたゆる事なし、ぜんせいは丸やの喜の字よろこべ〳〵、

上上　　くらの助

是又丸屋がたから藏、きりやうすぐれてしよげいよし、此家の上上、きさらぎ、くらの介を、二ふく對の立物どながむるものをや、

總女郎

七　浦　浦　里　染　川　山　吹
ひとへ　八重ざき　八十郎　松　浦
くらはし　とよしろ

○むめ茶（此家な丸ぎりやと云、）　桐屋吉兵衛内

上上　　しらぎく

まがきの内のすがた、見るからそれとしらぎくの、雪をあざむく肌、此家の立ばな、いかにも能きをひと見へた、

上上　　玉　澤

いつにおさめぬ玉澤の、能きやくをまち得てひかりをます、あつぱれおたから物、見事々々、

上上　　小ざつま

是又きりやう此家の上上なり、白ぎく、玉澤、小ざつまをあわせて、此家の三幅對とさだむるものなり、

總女郎

あさぢ　淺か琴　浦かつま
せきしゆ

○さん茶　和泉屋佐右衛門内

上上　　八重ぎく

菊は花の隱いつ成ためし、此きみ少シ隱氣に見ゆるとは、それはいかい見ぞこない、陶淵明が好物を愛し、一盃なる口、なるほどさばけておもしろし、或人此君の床の内にて、一首の詩を詠じて、

收二菊屏風下一、悠然見二艶顏一、にくいやつめ

上上　　こわた

ふうりうのふうぞく、さすがにこの家のたてもの、見とがむる所なく、しつぽりとおとなしく、

上上　　八十郎

是わか手にて殊更に出來物なり、第一きりやうよく、土佐ぶしの上るり、三すじの達者、いつぞやあるおやぢ、むかしをおもひ出て、此里を見物してまわられけるに、此八十郎を見て、おぼへず戀をおこし、ふたゑになりたる腰つきにて、まがきにうつかりとたゝずみたまふを、噫せうし、あの老人さまはとわらわれ、にわかに突たる杖をなげすて、腰をそらして、わかいものゝふうをせられし、是を見て口ばやなるおとこ、戀に腰そらすやはなの八十郎

上上　小太夫
うちむかふかほばせ先かゐいらし、一座のけしきそそらずしめらず、さればこそ以上四人を、此家の四天王とするものなり、

上上　わか竹
すらりとしたとりなり、いかにも若竹なり、是此家のひとりむしや、四天王におとらぬきみとしるべし、

總女郎
八重ざり　八重がき　かせ山　善次
半太夫　庄太夫　市十郎　桐屋三右衛門内
○さん茶（此家を字桐やと云、）

上上吉　都
上上吉　吳竹
右兩君はかせんぐみにゑらばれ、きりやうと云ィせんせいと云ィ、今をさかりの御かたなれば、ひやうばんくどふいわずとも、

上上　染山
あつばれ御きりやう、みやこ、くれ竹につゞきて、おとらぬしこなし、此家の上上とだれもおもひを染山さま、

上上　小山
小山とは、人ののぼりやすきと云事か、いかさまきやくしゆののぼりやすき女郎、お名に相違はないとのうわさ、

總女郎
幾よ　高島　市川　大さき
竹し　竹しの　こよ山　せいざん
○さん茶（此家を奥のきりやと云、）　きりや　六右衛門内

上上　萬太夫
容色さし出してだれに見せても、是よしといふは、さすが萬太夫さまじや、諸げいしこなしも、此家上上一の筆、云にをよばず、

上上　いまよ
今此家の名とり、おそらくいま世と名のるからは、今の世ノ色にはおぼへがあるとの御じまん、ほんにきつい事じや、

上上　今紫

むらさきのあけをうばふとは、色ふかきとのためしなり、今此むらさきには、たましいをうばはれぬべし、さりとはたまつた物でなしとのさたじや、

上上　手がしわ
萬太、いまよ、今紫に此君を加て、此家の四天王とす、しよじはいわずとも上上とおぼしめせ、

總女郎
玉の　加賀よ　くめ川　瀬山
わか浦　はつ浦　政つね

○むめ茶　加賀や七兵衛内
上上　とよ崎
上上　高さき
上上　せきの井
上上　小ざわ
上上　みどり木
上上　かりう
右六人は加賀やが六人衆とて、何も同格の女郎、ひやうばんひとり〳〵に品をわけんもいとくどし、各上上の御きりやう、御手がそろいました、

總女郎
小ざくら　小ざつま　よしの　一はし
きてう　きした　いさわ

○むめ茶　若なや八部右衛門内
上上　かしわ崎
わかなやの色がしら、きりやうの立物、うた上るり、三すじまでもかしこき君と、そのほまれかくれなし、

上上　ときわ
常磐とはつねにかわらぬを云、此君のはんじやう、おとろへたる色を見ず、盆も正月もおなじ氣色なれば、ときわの君とあをぐも道理、

總女郎
はつ梅　とみよ　尾上　梅山
玉しま　いづみ　わか倉　大くら
くらの介　久米の介

○さん茶　鈴木や太左衛門内
上上　花かづら
此きみは、鈴木やが家の色がしらなり、容色先うるはしく、しよげいにもつたなからず、座つきおとなしくそゝらずして、一座をうつしたまふ事、さすが年まのしこなし能所多し、さればそのはんじやう、毎日の

約束、お際のないのが氣の毒ばかり、

上上　花ぎく

上上　花まつ

上上　田むら

右三君は、はなかづらさまにつゞきて、各おとらぬ御きりやう、いづれをいづれとわけがたければ、是を鈴木やが三ぶく對と云、

總女郎

なにわづ　たかま　きせ川　櫻井

小ざくら　よしの　玉村　花村

まつを

○さん茶　もつかうや庄兵衛内

上上　和歌野

歌にやわらぐ此君の、年まさすがたも若のさま、此家の一の筆なれば、御きりやうなにも上上は申さずとても、

上上　玉ざわ

ひかりをふくむ玉澤のあでやかなるすがた、此家のたから物、亭主が大事におもふもことわり、

上上　いわざき

いわざきときけば、どふやらするどにかたそふにおもわれ候へども、見ると聞とはかくべつにて、あふて一座のやわらかさ、とかふいわれぬいわ崎さまと、是がたしかなうわさなり、

以上三人を此家の三幅對と云、

上上　いさわ

上上　若むらさき

右兩君は、是又此家の立物、あつぱれ御きりやう見事なれば、是を二幅對とさだむ、

總女郎

かよいじ　今川　あづま路　梅がへ

半太夫　わこく　きてう　こふじ

○次　立花や佐五兵衛内

坂田　大くら

○次　山屋五兵衛内

玉の井　八はし　みはし　高はし

いわを　いく島

○次　いせや彌兵衛内

まさよ　はつ山　ふじい

京町左りがわ家並終、

西河岸次女郎之部、但家並京町の方より始、

○次　いづゝや孫右衛門内

きんさく　清むら　いづゝ　淺む

こ　川　ふじゑ

○同　ききやうや次右衛門内

わかよ　よし村　岩ざき　あさづま

いわを

○同　かしわや一郎兵衛内

政つね　きんこ　こと浦　玉の井

かりう

○同　きの國屋與右衛門内

みちしば

あふよ　かつい　かつま

○同　いせや二郎兵衛内

かめ山　松山　しげ山　梅がへ

○同　手島や甚右衛門内

はせ川　かをる　つがわ　小にし

をしを

○同　紀國や清兵衛内

玉の　萬太夫

○同　いせや佐五兵衛内

いくよ　いさわ　小いづみ　岩崎

小太夫

○同　松本や久兵衛内

しかの　若松　まんよせ川

せきや

○同　桐や喜右衛門内

みなと　小ざつま　やしほ　しかの

はつ山

○同　いづみや加兵衛内

小きん　やゑぎり　かをる　せきしゆ

せいしゆ

○同　いづみや惣兵衛内

ひとへ　たがわ　をのへ　ひとよ

たじま

○同　俵屋傳右衛門内

はつね　梅がへ　八千代　金太夫

あかし　高まつ

○同　きりや半兵衛内

にしを　よしの　外山　はなよ

○同　かづさや
川のかつま　小もんど　初ね
くらの介　大くら　をぎの　淺づま
○同　みなとや佐二兵衛内
みなと　三はし　高はし　大はし
市はし　市川
○同　あふみや一郎兵衛内
千とせ　わか竹　まつがへ　大吉
かをる　さかくら
○同　あふぎや久右衛門内
わか松　くらはし　ひとへ　ていか
○同　次郎兵衛内
清すみ　きんさつ
○同　平野や七郎兵衛内
ふじの　川さき
○同　松本や市右衛門内
きてう　いづゝ　たじま　いづみ
○同　扇や藤左衛門内
くらはし　玉のゐ　いまよ
○同　中屋半九郎内
松しま　小にし　高まつ
○同　桐屋三郎兵衛内
きりしま　松がへ

吉原丸鑑第五終

吉原丸鑑第六

新町　仲の町より入左がわ家並、

○さん茶　みやうがや半左衛門内

上上　外山

まゆずみの色は外山のかげをうつし、顔ばせはさながら花のひらくがごとし、是此家の一の筆、しよげいもつたなからずとぞ、

上上　高松

せんせいの名は高まつの、みどりの髪うるわしく、大象もつながれぬべきよそをい、一座のこなし床のなさけ、さりとはむまい所あり、

上上　藏之助

これ又此家のたから藏なり、そのはんじやういふばかりなし、あつばれ御きりやう、見事ども〳〵、

上上　中も

色もさかりの時を得て、今せんせいのもなかなり、此家にて、外山、高松、藏之介に、此きみをあわせて、此家の四天王とさだむるものなり、

總女郎

八しま　千里　八千代　八重竹
八重ぎく　ひとへ　一角　萬よ
三はな　清はな　きよずみ　中川
くれ竹　玉むら　たじま　敷島
浦里　高瀬　清はし　津川

○むめ茶　ひしや五兵衛内

上上　よしずみ

色もなさけもよしずみさま、よしとは云におよばぬ事、此家の上上一の筆なる物をや、

上上　關の井

關のし水のかげうつる、月のかほばせあでやかに、ひしやが二階もかゝやくばかり、はんじやうとかう申されず、

上上　つゝ井

是又見事の出來もの、ふかきなさけをくみてしる、つつ井の水のあぢわい、あふてほり出しの女郎ときやくしゆのうわさ、誰の口もかわりませぬ、

總女郎

若村　大くら　吳竹　半太夫

吉十郎　三よし　さんせき　清はし
山ぶき　中くら　かつい　柏木
ふじ村　今川　しら玉　萬太夫
藏之介　花むら

○さん茶　長崎屋平左衛門内

上上吉　千壽
上上吉　小山

右兩君は、そのかみ格子の位にして、道中のはなをかざり、あげやの月をもてあそび、よせいめでたき御かたなりし、今此見せに下り居させ給ふといへども、むかしのひかり殘りて、なみ〳〵ならぬ御よそをい、たぐゐすくなく見へたまふによりて、かせんぐみにゑらびて、上上吉とする物なり、

上上　野村

すがたやさしく、しこなしをちつきて、難する所なし、此家上上の一筆なるものをや、

上上　八千代

秋の夜の千代をひと夜になして、八千代ねるともあかぬとは、君が手枕なるべし、いつ見てもあかぬ御一座、きやくしゆのなづみ給ふはことわりなるぞかし、

上上　とよざき

目かれせぬ御きりやう、せんせいをとゝへたる時を見ず、とよざきは是常世咲のはな、

上上　山ぶき

小づまけ出して、いでの山吹さくらにまさるとながめたりしこがね花咲此君の、富貴ゑんまん、何に付てもふそくなしとぞ、

右野村、八千代、とよ崎、山吹を、此家の四天王とす、

上上　清花

是又四天王につゞきておとらぬ御きりやう、これをひとりむしやとさだむ、お手がらのはまれ多し、總而此長崎屋は、近きころまで格子を仕出せし家なれば、なにかの事のはづれ〳〵、格別家がらよし、女郎のくらゐもおとなしく、能きところ多し、

總女郎

花鳥　きてう　敷島　玉島
玉よ　はつ梅　はつ山　若山
とよ山　ふじ原　小太夫　小ぜいぜう

村瀬　かじわ崎　てう山　さぬき
せき岡　ゑもん

○むめ茶　加賀屋德右衛門内

上上　入江

しづぼりとをちつきて、かみさま風のしこなし、御酒はふかうまいらねども、御部やの内にせんじ茶のかまをしかけて、たて茶をふるまひ給ふはめづらしく、うわきならずしておもしろし、

上上　若山

しめりたる一座も、さつとわかやぐ若山さま、わつさりとしておもくれず、誰が目にも上上なり、

上上　うね

かつらぎの大きみの心とけしもことわり、此女郎のさかづきとりあげて、も一ッあげませふといわれし口つり、いかな大じんもゑい間はなはだよしといわん、

上上　うこん

さくら色なるかほばせいやしからず、右近のさくらと云てにくからず、入江、わか村、采女、うこんを、此家の四天王とするものをや、

上上　小山
上上　戸川

此兩君四天王にならびてをとらぬきりやう、是を此家二幅對の立物とするものなり、

總女郎

若紫　若草　右京　左近
こと浦　今世　花村　梅枝
豐崎　浮はし　重川

○むめ茶　大坂や三郎兵衛内

上上　松風

此家のまれもの、此やどにて此君にかたをならぶるものなし、大坂屋が一の人、しよじいわずとも上上としるべし、

總女郎

外山　きん山　吉川　吉岡
千代野　八千代　をりゑ　も中
清はし

○さん茶　大黒屋半右衛門内

上上　定家

三十ひと文字の和歌はいざしらず、音曲は此家のう

た所、三すじはもちろん、大黒屋が福の神、いつもるゑがほよしときこゑた、

上上　なるとあわのなるとに、波風たゝぬ日はあるとも、此きみの座敷にきやくのたゆる事なし、さりとははんじやうト申さたじや、

上上　藤江ていか、なるとにならびて、おとらぬしこなし、右三人を大黒屋が床の三幅對と云、

總女郎　わかさ　小柳　井筒　あづまきんご

○さん茶　かなや庄五郎内

上上吉　高間が床にきやくとゞまりまし〳〵て、けふも居つづけ、あすも約束と、いつ聞てもお隙と云ふことなし、かくはやらせたまふにて、しよじは云はずとも、誠にかせんぐみにゑらばれ給ふなるをや、

上上　千里きやくは千里をとをしとせずして來る、是此君の德そなわりて、美色のほまれあまねきがゆへなり、せんりのきみと申べけれど、家がかなや成ゆへ、かなによみてちさとさまとは申ぞかし、

上上　今岡過しかな岡のゆかりとして、今岡と名のりたまふ、姉かなをかに、みぎわ增りの女郎と、そのほまれかくれなし、

上上　小太夫小太夫と申名は當世のはやり名にて、新町の中にても四五人あり、中にも此小太夫は、隨一のきりやう、音曲も又きゝ事なるとぞ、

上上　玉かづら小太夫、千里、今岡に、ひかりをあらそふ玉かづら、此四人をあわせて、此家の四天王とするものなり、

上上　尾上四天王にならびておとらぬほまれ、きりやうしこなし、あつばれこの家のひとりむしやとするものなり、

總女郎　小にし　高はし　三夕　松岡　にしき木　いりゑ　玉島　若村

はつね

○さん茶　萬字や五兵衛内

上上　萬字や　小式部

此萬字や、むかし二丁目にありし家なり、近年此所に見せをうつしぬ、その二丁目にありしころ、前の小式部と申せし女郎、此家のはな成りし、そのゆかりをしたいて、此君今小式部と名のり給ふ、まへ方の小式部にくらべ見るに、一倍增の出來物、此家の一の筆、くどふ申さずとても、

上上　小よし是又前の小にしのゆかり、その小西よりも今くらぶれば、夕ゞよしとの心にて、小よしさまとは、いかにもそのとをりと見へます、

上上　白たゑしろたへの雪をあざむくはだへ、見る人心きゑゑ〳〵となるとの事、うちとけてあふて見たまへ、

總女郎　八重ぎく　小林　初いと　青柳　若くさ　をりゑ　れん山　左京　右京　若藤　吉十郎

○次　くじやくや小兵衛内

清川　清原　小太夫　小ざつま

○むめ茶　海老や庄左衛門内

上上　但馬よしあし云もくだなり、此ゑびやにて但馬と云てからは、一と云て二もない御かた、せんせいのほまれはかくれなし、

總女郎　春野　外山　八重ぎく　ひとへ　とよ浦　さが野　八橋

○次　越前や惣右衛門内

よし野　松浦　八千代

○次　ゑんぎや八郎兵衛内

清はし　三はる　はつせ

新町左りがわ家並終、

新町　中の町より入右がわ家並初り

○さん茶　しなのや吉左衛門内

上上吉　中倉

此中くらはかせんぐみの内にして、そのゑらびにあ

へる女郎なれば、しよじいわずともしるべし、容色うつくしく、ゑがほ人あい、さすが上上吉と云てにくからず、

上上　吉十郎

しなもの〳〵、お家がらしなの屋のお吉さま、名を聞くからによしとはしれた、

上上　みな川

かたちうるわしくあいきやう有、皆人のほれやすき女郎、みな川はみなの川の略語、戀ぞつもるとよみをきし歌の心をおもひやるべし、

上上　坂くら

本阿彌が目きゝの書に、關の坂くらは孫六が弟子にて、大切ゝ物、札きわめのさしりやうむきと云へり、今このさかくらは、誰が目利にも、たしかに折紙道見、見事の出來物、さし領望のかたは、あいたい次第に代は百枚までも、

上上　若紫

小むらさき、花むらさきと申名、代々三浦にて太夫のとをり名とするゆへ、そのゆかりをうらやみて、紫の一字をかたどりて名としたまふ事、近代のはやりものなり、其中にも太夫にあらぬつとめにて、うち付にこむらさき、花むらさきとなのりたまふは、名にまけて結句みぐるし〳〵、若紫、初むらさきなど名のりたまふは、やさしくきこゆ、此君此家にて若手すい一の御きりやう、むらさきのゆかりをしたいたまふもにくからず、中倉は、かせんぐみの内にゑらばれたれば一の人とし、それにつゞきて、吉十郎、さかくら、みな川に、此若紫をくわへて、此家の四天王とさだむるものなり、

上上　三夕

此きみ四天王につゞきて、をとらぬしこなし、是を此家のひとりむしやとするものなり、

總女郎

玉島　小太夫　小澤　都路
かよい路　かすが野　あふ坂　山川
市川　櫻川　櫻木　絲櫻
きさらぎ　松風　紅葉　坂た
小もんど

○むめ茶　近江屋助三郎内

上上吉　しら梅

上上　せい山

上上　富を

上上　戀せん

右四人は、舊冬まで格子の御勤いみじかりしを、わけありてのこらずその位をおろしぬ、御きりやうは各上上、〳〵どふ云におよばず、中に白梅は、今を春べの御けしきなれば、香仙組に選ものなり、

上上吉　あふよ

此君ははじめより、此家にて第一の御きりやう、しよじのしこなしのこる所なし、是又香仙組の一人なる物をや、

上上　ひとへ

花はひとへなる能と、つれ〳〵草に書おきたり、此きみのすがた、山櫻のひとへなるごとく、おもからずしてうつくし、いま兼好にあいかたを見立させたら、是じや〳〵と云べし、

上上　道きよ

此きみは意氣知をみがき、しよわけの道いさぎよきをもつて、道清さまと申とかや、すなをにしていやしからず、さりとはあぢもの、

上上　藤村

是又見事の仕出しものなりかし、そのとりまはし、どこやらに役者めきたる所、うつりて見ゆると云人あり、半太がゆかりをしたい給ふやいなや、

上上　みつ井

容色しよげいもつたい、三ッものそろうた三ッ井さま、此家におゐて、あふよはかせんぐみなれば、立物の一の筆、それにつゞきて、ひとへ、道清、ふじむら、三井を四天王とさだむるものなり、

總女郎

ゑ川　岩崎　やぎり木　清たま
あかし吉　住今　世雲　井
市はし　九重　八千代　とこよ
ときは木　ともゑ

格子　ひしや　久右衛門内

此家ハ大びしやとも、又格子びしやとも云なり、

右格子のれき〳〵は、此書第一あげ屋の卷に是をしるす、

○さん茶　同じ内

上上吉　花かづら

上上吉　はつ紫
上上吉　花鳥

右三君は、去年の冬まで格子の御つとめにして、まい日のあげ屋入、目をおどろかすばかりなりし、しかるをさん茶におろしぬる事は、見せの女郎のために、ふうぞくの師となさんとの亭主がおもひ付に依て、あげ屋せんせいのさかりをすてゝ、御つとめの品をかゑ給ひぬ、されどあげ屋にてなじみ給ひし大じんたち、大せいつけこみ、今のはんじやう大方ならず、御きりやうは本よりそなわりたる上上吉、しよじくどふは云におよばず、かせんぐみのすい一なるべし、

上上　つま木

ふうりうのしこなし、おちついて能、誰がやどの妻ぎにとるともくるしかるまじき女郎と、皆人のほむるところ、いかにも〳〵、

上上　小源次

名は若衆様に似て、すがたはお姫さま、御きりやうと云ィ、しこなしと云ィ、あつばれどふも申されぬ、

上上　琴浦

しこなしおとなしやかにして、ひとふうあちある女郎、ひく手あまたの琴うらさま、一曲のつまおと猶ゆかし、

上上　とみ山

とみは人の欲する所と云事は、此とみ山を、世の人のほしがるゆへなるべし、いかさま人のほしがるも道理、是見事なものじや、

上上　中川

おもひと戀の中川に、とんとはまつてよるせをねがゑど、五日や十日では、さき〳〵約束のお隙があかぬとは、きついものかな、十目の見る所、能キものは人も只おかぬとしられた、

上上　かるも

此きみのせんせい、又きついものなり、ある人茶屋をたのみて、お隙をたづねつかわしたれば、此御かたにおきやくのたゆる事なければ、お隙といふ事なし、ちよつとかるも、たゑていではならぬと云ふた、

總女郎

かほる　かりう　戸ざわ　山しな
みちのく　しの〻め　小わた　あかし
たむら　せき浦　なる戸　小柳

○さん茶　ひしや新四郎内
此家なきりびしやと云、

上上吉　櫻川

此君は、過しころまで格子の御つとめにして、しかもせんせいのさかり、いかにして所をかゑ給ふらん、あたら櫻をおげ屋の花とながめぬはおしけれども、あまたのきやくをせきとめて、櫻川のはんじやうは、今もあげやのむかしにかわらず、かせんぐみのすい一として、上上吉のほまれかくれなし、

上上　なでしこ

目にたゝずじんでうにして、しかもしほらしきよそをい、花にたぐへば、まがきの内のなでしことも申べし、せんせいは此家上上の一の筆、くどふいわずとも、

上上　千里

千里ひとはねと、ずつと出た所、こせつかずして見事なり、誰が目にも上上と申にをよばず、

上上　はつ山

初春の夕べより、おいかけずして客ののぼる事、是はつ山のしこなしなり、きりやうはもちろんしよげいまでも、

上上　おり得

色と情をたて横に織得たる、回文錦字の詩、唐人に見せてもうけ取女郎、されば日ましに御はんじやう、此家の仕合と見へた、

此家にて櫻川はかせん組なれば、上上吉として一の人なり、夫につゞきて、なでしこ、千里、初山におりゑをくわへて四天王とす、

上上　政きよ

是又四天王に、おさ〳〵おとるまじき御きりやうなれば、是をひとりむしやとさだむ、政きよ一人といふ、半太夫が黒小袖のうつりが、

總女郎

小にし　小ざくら　きん山　りん山
ちとせ　まんよ　まん珠　名月
みちとせ　三さき　利生　花里
つく非　つ川　きよすみ　まさご
かめぎく

○さん茶　丸屋甚左衛門内
此家やどがゑのさたあれども、まだ不二相知一候ゆへ爰にしるす、

上上　藤　を　か
むらさきの雲とながめし藤をかは、さながら歌舞のぼさつかや、此丸屋が隠居の家に、朝日の如來のおわしますなれば、是前立のぼさつさま、皆人參りて御ゑんをむすびたまふべし、

上上　つ　ま　を　か
ふじをかにならびて、此つま岡おとらぬきりやう、猶わかやかにうつくしく、われも人も妻をかにとのぞむもの多しとぞ、

上上　や　ば　せ
山田八ばせのわたし舟は、往來の旅人をのせて近江の江をわたす、この八ばせの君は、あまたの和氣人をおい入れて、戀の海をおよがする、右三人は、丸屋が家の三ぞんとあがむるものなり、

總女郎
こと浦　あかし　はな野　も　中
はつしほ　しらゆき　あふ川　川　島
高　松　わか竹　關　井　花　月
○さん茶　うづらや彦右衛門内

上上　花　む　ら
此家第一の御きりやう、せんせい今をさかりなり、しかしあまりほめますとて、めつたに鼻はたかふなされますな、

上上　い　も　せ
しとやかになれ〳〵しき女郎なり、かりそめにあい見し客も、おもわずふかきいもせとなる事、此君のなさけふかきがゆへなり、されば花村、いもせの兩君は、鶉屋が兩羽がいとして、家内にて羽ねをのしたまふとなり、

總女郎
市むら　ていか　花　月　花　鳥
せきしゆ　あやめ　平　の　とよ崎
はつ梅　いわを　若　紫　大　吉
○さん茶　あふみや助次郎内

上上　み　や　こ　路
容色は花のみやこぢ、せんせいも又是みやこ路さま、此家にて上上の一の筆、しよじ申もくどし、

上上　み　ち　の　く
みちのくのあさかのぬまはまぎるゝとも、見せの内にて此君はまぎるべからず、ちよつと見てもかくべつ目に付ふうぞく、うそなら行て見くらべて見たまへ、

上上　初　絲
初いとにつながれてよりくる客のかず〳〵、毎日の約束ゆだんすれば、一ト月もあはれぬと、われがちにせり合たまふは、能仕合にあふみ屋の立物とするもことわりなり、

上上　玉　よ
いにしへの玉よのひめはしらず、そのおもかげはかがやく玉よ、みやこじ、みちのく、初いとに、此君をあわせて、此家の四天王とするものなり、

上上　松　が　ゑ
若松がゑのみどり、春ひとしほ色まさりて、此家のひとりむしや、お手がら〳〵、

總女郎
あふみぢ　あづま路　若　山　若　竹
初ふじ　初ぎり　初むら　みなと
道きよ　みち風　坂くら　かわち
いとい　越　川
○むめ茶　山本や助左衛門内

上上吉　八　く　も
上上吉　か　ら　さ　き
右兩君は、かせんぐみにえらばれたまへば、しよじいはずして上上吉とはしるへし、其内にからさきは年ましにて、八雲さまより姉さまぶんなれば、からさき八くもと申べけれど、八雲はきりやう殊にすぐれ、色のほまれをあらわしたまふ事、からさきさまよりはるかに先だちたまへり、これに依て、此家八雲さまを一の筆とするものなり、

上上　大　野
しよじつかゑぬけしき、こせつかぬ御きりやう、さすが大野の君とも申べし、はんじやうすへたのもし、

總女郎
ここよ　さもん　花　山　櫻　木
小太夫　八はし　あふ坂　大　里
八ゑぎく　いわ崎　むらさき
○むめ茶　巴屋三郎左衛門内

上上吉　と　も　ゑ
ともゑ波のもん、あたりをはらつて出たまふよそをい、目をおどろかす御しこなし、此家の名題をとりて

名のらせたまふほどありけり、かせん組にゐらばれ給ふなるをや、

上上　かりう
上上　しきぶ
上上　うきぶね

右三君を、ともゐ屋の三ッがしらといふ、巴さまはかせん組なれば、一の人とあをぎ、それにつゞきて此三君を、總女郎の色がしらとするゆへなり、おの〳〵ひときりやうそなわり、をしもをされもせぬせんせい、そのほまれかくれなし、

上上　若むらさき

手につみてと云をきしむかしの人のおもかげも、おもひやられていとやさし、三ッがしらの御かたにつづきて、是又立物なるものをや、

上上　花月

花と月とは、世の人のながめにあかぬためし、いかさま此君の花月と名乗たまふもにくからず、いつ見てもうるわしきすがた、見るに見あかずと、皆人のひやうばんよし、

上上　深山

御きりやうと云ィ御しこなし、さりとはぬけめなし、一座さら〳〵として、しかもそゝけたまはぬようす、深山と名のらせ給ふは、皆人の興ふかくおもふゆへか、

總女郎

松浦　重浦　若山　染山
外山　山吹　はつ原　はせ川
半太夫　かをる　さ衣　松風
八重ぎく　若野　もしほ　とみよ
ていか

右新町右がわ家並終、

東河岸の部　新町の方より初る、

新町河岸

○次　山川や六郎兵衛内
ふじなみ　さゞなみ
○同　三崎や市兵衛内
よしの　小いづみ　清原
○同　山屋清右衛門内
江口　花咲

○同　山本や助九郎内
きてう　きよ花　金太夫
○同　大黒屋與八内
ささつね　いくよ　小ざくら　吉かわ
よしざわ

角町河岸

○次　萬字や角兵衛内
いくよ　いわさき　三や崎　りせう
みよし
○同　桐や七兵衛内
いづみ　市川　一むら
○同　萬じや佐二兵衛内
たかの　玉川　玉の　をのへ
○同　松屋八右衛門内
みなと　はつね　ふじ岡　中倉
そめ川
○同　岡田屋八兵衛内
市川　市野　まんよ
○同　車屋清七内
ひとへ　松風　松島　まんじゆ
小ざつま　ときわ

二町目河岸

○次　ひしや七郎兵衛内
玉かづら　きよ花　たむら　清島
金太夫
○同　森川や甚兵衛内
いくよ　いづみ
○同　伊勢屋權兵衛内
わか松　みはな　なるせ　わこく
○同　三笠や傳兵衛内
よし清　とよ川　たむら　今川

五寸局より以下、東西の河岸、次女郎のうはさは、別に地まはり末者日記と云書あり、故に此書に是を略す、

右東河岸次女郎家並終、

總評論

一前々より、色里ひやうばんの書あまた出るといへども、多くは皆かたつてくわしからず、ゐらんでつまびらかならず、こゝにおゐて、達者數子としよわけを

議論し、この度改正の評判をあらわす所なり、凡太夫格子より以下、散茶むめ茶にいたるまで、上上極上の次第をわかちあぐる事、あながちにそのぜんせいのみをおもんずるにはあらず、意氣知、諸藝、風儀、容色の、輕重淺深をはかり、その品さだめをなすものなり、

一さん茶むめ茶と云は、此里の古跡にあらず、そのかみ此里に於て、女郎の品をわかつ事三段なり、所謂太夫、格子、局なり、其後局に三段の品をわけて、五寸三寸二寸と云、きれを賣と云心なり、又東西の河岸に、端た女郎と云ものを出して、是を次と名づく、きれに次で出したると云事なり、しかるに又、中古江戸中所々の茶屋に、遊女あまたかくれありしを、ことゞくこの里にうつしあつめし事あり、其時別に其品をわかたんために、是を名づけて散茶と云し、諸方はしゞくの茶屋に打ちりてありし遊女なればなり、散茶の名是よりをこれり、ふらでなびくなど云事は、俗說としるべし、又其後貞享の末元祿の初頃より、五寸の局を破りて、一所の見せにあつめ、さん茶になぞらへて、埋茶と云ものおこれり、二寸三寸の局は、寶永の中頃より絕て今はなし、そのはじめは、さん茶埋茶兩派にして、つとめの品差別ありしかども、近年は其さたにおよばず、兩派一ようの流となれり、是によつて、さん茶むめ茶を合て、世に茶女郎といふ、今さん茶むめ茶のやどをかぞゆるに、その家百軒にあまり、茶女郎二千人になんゝたり、その中にきりやうすぐれし女郎をば、別に座敷をもふけて、その部屋とさだめて、その客をもてなす、是を座敷持、部屋もち女郎と云、此格の女郎今四百餘人あり、是を茶こくの上上とさだむ、そのひやうばんは、その家々の所におゐて記す、

一右茶こく部屋もち女郎四百餘人の中にして、なを殊更にすぐれ給ふ女郎三十六人をゑらび出して、香せん組と名づく、是茶こくの上上吉なり、是又ひようばんは、その家々の所におゐてしるす、

一さん茶むめ茶の内にして、三浦山口の太夫の名に同じき名を、名のりたまふかたゞくをば、ことゞくその名を此書にあぐる事なし、その仔細は、およそ太夫と申は、遊女のつかさにして、古今色里のかざりなり、さればいにしゑは、その名をおもんじて、外の女郎たやすく太夫の名を名のる事なかりし、近來みだりになりて、すへゞくの女郎まで、太夫の同名を名のりていみはゝかる所なし、是はなはだよろしからず、しよわけの道末に成て、意氣知のさたおろそかなるがゆへなり、その下心をさぐり見るに、ひとへに太夫の高名をかりて、をのがぜんせいのたすけとせんとおもふにあり、夫名は人に依て貴しと云り、むかし都に彦左衞門と云女郎ありしが、又なき美人なりしかば、全せいたぐゐなかりしよし、粹の物がたりにつたへきけり、その身にきりやうあらん人は、なんぞ他の名をかりてぜんせいのたすけとせんや、しかるに、そのつとめのくらゐ格別にして、太夫に同じき名を名のり給ふ事、只是ひそかに名のかうばしきをぬすんで、野暮殿をちよろまかさんとする手くだに似たり、君子は似て非なる物をにくむといへり、たとへ野暮は名にほれてよろこぶとも、粹は心をかくべからず、よしや前々よりつき來り給ふ名なりとも、太夫にその名出來たりと聞たまはゝ、早々名をかゑたまわんこそ、きりやうある女郎の本意ならめ、いわんやひとたび、太夫の名に高くきこゑたるを、そのくらいにあらぬ女郎、もとめてその名を名のりたまはんや、たとへ茶こくにて、ぜんせいすぐれたりとも、元來太夫と格別のつとめなれば、位をとりしなくだり、その名まことの太夫にけをされていと見ぐるし、是に依て此書の内、そのくらいにあらずして太夫の名に同じき女郎をば、おの〳〵その名をけづりて、ひようばんをあらはさず、されば太夫にあらずして太夫の名に同じき女郎は、そうをうのぜんせいありと云とも、是みな野暮をちよろまかすのみにして、下しんつたなきしよわけを察し、その名をとふて、粹法のひようにおまばざる所をしるべし、客としてかのまぎらの色をよろこぶは、是又やぼの骨長なる事をしるべきなり、心あらん女郎は、今まで太夫の同名を名のり來り給ふとも、はやくその名をあらためて、一ぶんの名を起し、ぜんせいの手がらをあらはし給へ、しからば是又きりやうの御かたと云べきなり、

一此書當春早々御披見に入べきため、舊冬つぶさに吟味をとげ候といへども、飛鳥川のさだめなきながれの里なれば、毎日ひとりふたりの入かわりたゆる事なし、されば此書梓にうつし候より、開板までの内

に、少々入かわりたる女郎あるべし、されば今より後、時々のかわりをあらため、毎年ひとゝせのおわり〳〵に、ふるきをたづねあたらしきを増して、書面をなをし可申候、かわりめ御座候はゞ、板本へ御しらせあるべく候、只今總女郎の内にして、若手しんぞうの御かた〳〵も、おい〳〵御さかんの御手がらあらわれしだいに、上上、上上吉の列にあげくわへ申べく候、當期ニ永日後之時ニ候、恐敬金銀、

江戸日本橋南三丁目
戸藏屋喜兵衛

吉原丸鑑第六終

山田安榮
本居清造
伊藤千可良 校
岩橋小彌太

大正三年十二月二十日印刷
大正三年十二月廿五日發行

（德川文藝類聚第十二）

非賣品

東京市京橋區新榮町五丁目三番地
國書刊行會代表者
編輯兼發行者　早川純三郎

東京市芝區櫻田和泉町七番地
印刷者　高宗啓藏

東京市芝區櫻田和泉町七番地
印刷所　國書刊行會第二工場

東京市京橋區新榮町五丁目三番地
發行所　國書刊行會

不許複製

K 98

330
493

終